尾地雫
Illustration
おちゃう
イレギュラーズ・リベリオン
3
偽りの姫君
Ochi Shizuku Presents
Irregular's Rebellion
GA文庫

イレギュラーズ・リベリオン
偽りの姫君
3

「こっ、これからだ！」
リース＝リガルジェント？
ハンティス＝ハーミリオン
「どうした？ まだ一発も当たってないぞ」

「…………ど、どうかな？」
「やっぱりサヤの方が似合いますわね」
サヤ＝サクライ
アルレナ＝
アラート

イレギュラーズ・リベリオン
3. 偽りの姫君

尾地雫

本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、ＳＢクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。
本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

カバー・口絵　本文イラスト
おちゃう

CONTENTS

プロローグ
第一章　歓楽街の夜
第二章　皇女
第三章　祭り
第四章　海底迷宮
第五章　海竜
エピローグ

プロローグ

Irregular's Rebellion

「まさしく大海原だな」
遥か彼方の水平線を眺めながら、ハンティスは思わず感嘆の声を漏らしていた。
心地よい潮風が頬を撫で、磯の香りが鼻を突く。
燦々と照りつける陽光に、きらきらと輝く水面。時折その上を、銀塊のような美しい鱗を持つ魚が飛び跳ねていくのが見える。先ほどから耳を楽しませてくれているのは、海鳥たちの鳴き声だ。
ハンティスは船の甲板の上に立っていた。
大型の客船だ。乗員、乗客、合わせて五十人を超す人間を乗せたこの船の動力源は水章霊で、波を掻き分けながら軽快に海上を滑っていく。
ハンティスたち第29部隊を含むマーテリア騎士学院の帝都遠征隊は、数日前にキルクルスを出発した。二日ほどかけて街道を南下し、港湾都市トレストンに到着。そこから海路を取ったのである。
ふと、波の音に混じって苦しげな呻き声が聞こえてきた。
『……うぅ……し、潮風で……ふやけそう……』
ハンティスの肩の上に、背中に炎の翼を生やした小さな少女が乗っかっていた。
眷属章霊の〝不死の炎鳳〟だ。
高位の火章霊である彼女は、どうやら水気を多く含んだ空気に弱いらしい。夏バテした犬のようにぐったりしていた。
「船室に戻るか？」
『……そうする……』
そのとき、どこからともなく歌声が聞こえてきた。
『うーみーはー、すごーいーなー、でっかーいーなー』
フェニックスと同じくらいの大きさの少年が、水を得た魚のように空中を踊り回っていた。
上半身は人間だが、下半身は魚の尾びれになっている。
高位の水章霊である〝瀕海の覇者〟だ。
『う、うるさーい！　耳障りなんだから！』
『つーきーがー、あがるーしー、火はおーちーるー』

フェニックスが苛立ったように抗議するが、レヴィアタンはそれを意に介さず、陽気に歌を口ずさんでいく。意外と綺麗な声だ。
『いま〝日〟じゃなくて〝火〟って言ったなーっ！』
『わー、よくわかったねー』
『許すまじ！』
フェニックスが声を荒らげ、レヴィアタンに飛びかかる。甲板の上で追い駆けっこが始まってしまった。
「またかよ……」
どうやら火章霊と水章霊は相性が悪いらしい。二体の喧嘩はいつものことだった。
「こら、レヴィアタン、他のお客さんに迷惑だからやめなさい」
そう窘めながら、船室から少女が姿を見せた。
潮風の中でも艶やかさを失わない黒髪に、黒曜石を思わせる瞳が印象的な彼女は、サヤ＝サクライ。レヴィアタンの主人であり、第29部隊の一員だった。
『やーい、怒られてやんの！』
「お前もだ、フェニックス」
べぇ、と舌を出してレヴィアタンを挑発する自身の眷属に、ハンティスもまた注意した。幸い今は甲板に人が少ないが、この船には自分たち以外にも一般の乗客が多く乗っているのだ。
『おまえもなー』『むかーっ！』などとやり合う二体の向こうから、また別の少女がこちらへと駆けてきた。
「海！　海！　ミィナ、テンションあがっちゃう！」
八重歯を覗かせて、ミィナ＝ミクランがぴょんぴょん飛び跳ねる。そして船端の手すりから身を乗り出すと、海に向かって「にゃーっ！」と叫んだ。
「おい、落ちるぞ。あと何でにゃーなんだ？」
「ウミネコのマネだよ！　にゃあああご！　ごろにゃああん！」
「さすがにそんな鳴き方はしないだろ……」
「……章霊たちより騒がしいんだけど」
大海原を前にしてやたらとハイになっている部隊の仲間に、ハンティスとサヤは二人そろって嘆息する。

そこでサヤが何かに気づいたように、船首の方を指差した。
「あれ、何しているのかしら？」
「ふっ……さすがは海……わいのようにビッグやな」
舳先で腕を組み、坊主頭の少年――チャンク＝ギーフリックが、意味不明なことを呟きながら仁王立ちしていた。照りつける太陽で、キランと歯を光らせる。
「世界がわいを、待っている……」
待ってない。
「気にしたら負けだと思う」
「……そうね」
そんなアホからそう離れていない場所には、二人の少女がいた。
「……うぅ……」
青い顔で手すりに寄りかかっているのは、栗色の髪を頭の左右で纏めた少女――マロン＝マーマードだ。どうやら船酔いしてしまったらしい。
「マロン、大丈夫ですか？」
心配そうに声をかけながら、銀髪の少女がマロンの背中をさすってあげている。
人形めいた端正な顔立ちと宝石のような碧眼が特徴的な彼女は、シスリーネ＝シルベルストだった。
「……だ……め……かも……」
ふるふると首を振るマロン。
シスリーネが真剣な顔で言った。
「もし限界がきたら言ってください」
「……？」
「私がすべて飲――」
「ちょっ、ストップや！　シスリーネ！　それはあかん！　女の子としてアウトやろ!?」
二人のやり取りを聞いていたらしいチャンクが、思わずといった様子で突っ込みを入れた。
「見た目はただの女の子同士の口づけなので、まったく問題ないかと」

「お、ほんまやな。全然問題ない――なわけあるかいっ！」
船酔いに苦しんでいるのはマロンだけではなかった。
銀髪を頭の後ろで一本に結わえた少女が、甲板に設置されたベンチにだらしなく腰かけ、げっそりしていた。シスリーネの姉であるシオン＝シルベルストだ。
「大丈夫っすか、シオン隊長？」
「はっ、これくらい、どうってこと――うっぷ……」
隊員から心配され、気丈に振舞おうとするシオン。だが、マロンに負けないくらい顔は蒼白になっている。
彼女が率いる第88部隊は、女性ばかりで構成された二年生部隊だ。補欠の第29部隊と違い、彼女たちは聖騎武祭への出場部隊に選ばれていた。
「船酔いって大変そうだねっ！　――あいたっ？」
近くをはしゃぎ回っていたミィナが、ちょうど船室から出てきた男性とぶつかってしまい、尻餅をついた。
「よそ見してるからだ、馬鹿」
ハンティスは彼女を叱り、それからその男性に謝罪する。
「すいません、うちの馬鹿が」
「馬鹿って二回も言われた!?」
「そんなことよりお前も謝れ」
「ごめんなさーい」
「いえいえ。しかし甲板の上は滑りますし、他のお客様もおられますので、走るのはおやめ下さい」
と、丁寧な口調で謝罪を受け入れてくれたのは、柔和な笑みを浮かべた中年男性だった。追突してきたミィナを逆に跳ね返しただけあって、かなり恰幅が良い。
白い制服を着て、頭にツバ付きの帽子を被っていた。
「まったく、どこに行っても騒がしい奴らだ」
そこへ溜息を吐きながら、長身の美女がやってきた。
彼女はパレット＝バスカリー。引率の一人として今回の遠征に同行している、ハンティスたちの指導教官だ。豊満な胸のせいで、マーテリア騎士学院のぴっちりした教官服が随分と窮屈そうだ。

「うちの生徒が迷惑をかけてしまったようだな、船長」
「いや、元気があってむしろ好ましいものです」
気を悪くした様子もなく、彼はにこやかに微笑む。
どうやら彼はこの船の船長だったらしい。
「すまないな。だがもし海の魔物が出現したときは手を貸そう。それくらいなら、我々も役に立てるだろう」
その反応に気を良くして、バレットが応じた。
「いえいえ。それには及びませんよ」
だが船長はあくまで慇懃に、その提案を一蹴した。
「と申しますのも、この船には船員の他に、海の魔物との戦闘に熟達した優秀な護衛団がおりますから」
船長は微笑みを崩さず、自信ありげに主張する。
「これまで幾度も魔物に襲われて参りましたが、そのすべてを彼らが撃退してくれました。正直に申し上げますと、我が船の護衛団は、海の上では正規の紋章騎士にも負けない実力を持っていると自負しております」
「……ほう」
バレットが不快げに片眉を吊り上げる。
「おっと、ちょうどいいところにいましたね。お前たち、騎士学院の皆様にご挨拶を」
船長に呼ばれて現れたのは、数人の屈強な男たちだった。
誰もが例外なく見事な赤銅色に日焼けしており、海上生活の長さを窺わせる。彼らが船長の言う護衛団だろう。
「船長の言う通りですぜ。海には海の戦い方ってもんがありますからね」
その中の一人、頬に深い切り傷のある男が不敵に笑った。彼が一団を統率するリーダーのようだ。
要するに、正規の騎士でもない候補生などに出る幕はない、ということだろう。いや、むしろ足手まといになるとでも言いたげな口振りだ。
とは言え、彼らの言い分はもっともだった。
実際、マーテリア騎士学院の生徒たちは、海の魔物を相手にした経験がほとんどない。加えて、船酔いで戦闘どころではなさそうな者が何人もいる状態だ。傍からは彼ら護衛団の方がよほど頼りに見えるに違いない。
癪ではあるが、ここは彼らの顔を立てるべきだった。彼らとしても別にこちらを嘲るつもりはなく、きっと自分

たちの仕事に誇りと自信を持っているゆえの発言だろう。
「……なるほど」
バレットもそう判断したのか、やや不満げながらも大人しく頷いた。そのとき、男たちの背後から凛とした声音が響く。
「ですが、我々は紋章騎士になるために日々、研鑽を積んでいる身。魔物が出現して船が危険にさらされている中、何もせずにじっとしているというのも耐え難いことですわ。ですので、可能な範囲でサポートさせていただければ嬉しいですわ」
長い金髪を揺らしながらこちらへと歩いてくるのは、アルレナ＝アラートだった。
マーテリア学院騎士団の団長にして、聖騎武祭に出場する第９９部隊の隊長でもある。
彼女の纏う高貴な雰囲気に呑まれたように、船長も護衛団の男たちも言葉を失ってしばし沈黙してしまう。
さらに彼女の背後から現れた大男に、彼らは一様に目を見開いた。
ムストリア＝ムファーレ。マーテリア学院騎士団の副団長であり、第９９部隊の副隊長だ。
身長はゆうに二メートルを超えており、体格のいい護衛団の男たちですら、彼を見上げるしかなかった。
「……そう、ですか。では、もしもの場合はぜひお願いいたしますよ」
二人に圧倒されていたらしい船長が、我に返ったように言う。操舵室に戻るつもりなのか、踵を返して去っていく。護衛団の男たちもどこか毒気を抜かれたように顔を背け、その後に続いた。
「ん？　何でしょうか……？」
不意に船長が足を止めた。
彼は訝しげに眉を顰めながら、手すりの向こう側、海の方に目を向けている。
その場にいた皆が、釣られたようにその方角へと視線を転じた。
穏やかな海面。だがその奥底から、ゆっくりと巨大な影が浮かび上がりつつあった。
海の中に何かがいる。
甲板は俄かに騒然となった。
「クラーケンか！」
やがて水奥に見えてきた紫黒色の物体を睨んで、護衛団の一人が叫んだ。さすがと言うべきか、まだ水中にいる

段階でそれと判明したらしい。
クラーケン——イカやタコなどの頭足類動物とよく似た姿をした海棲の魔物。
だが大きさは比較にもならない。小さな船であれば、その触腕に絡め取られ、船ごと海中に引きずり込まれてしまうという。
「そこらの漁船ならともかく、ウチの船ならまずそんなことにはならねぇけどな！」
切り傷の男が乗客を安心させるようにそう声を張ると、護衛団の男たちは腰に下げていた武器を抜いた。その大半は湾刀だが、中には紋章武装を顕現させている者もいる。
彼らの迅速な臨戦態勢から一歩遅れて、ついにクラーケンが海面を大きく盛り上げて姿を現した。水飛沫が間欠泉のごとく噴き上がる。
「な……」
護衛団の男たちはそれを見上げて、唖然としたようにその場に立ち竦んだ。
現れたクラーケンは、ゆうに十メートルを超えていたのだ。
それでも身体の大半はまだ海中に潜んでいる。下手をすれば、全長はこの船すらも凌駕するかもしれない。
「……こ、こんなにデカいのは見たことねぇぞ……？」
「や、やべぇぞ……へ、下手したら、この船ですら……」
予期せぬ規格外の魔物を前にして、屈強な男たちもさすがに動揺を隠せない。
「てめぇら、怯むんじゃねぇよ！」
「そうだ、デカくても対処法は変わりねぇ！　目だ！　目を狙え！」
「おうっ！」
それでも船の守護を任されたプライドからか、互いに叱咤し合って、敢然とクラーケンに立ち向かわんとする。
だがそのとき巨大な触腕が高々と振り上げられたかと思うと、大きくしなって甲板に迫った。
それはさながら暴風だった。
最前列にいた護衛団の男二人が纏めて薙ぎ払われ、船室の壁に叩きつけられる。一瞬遅れてうねるような空気が一帯を吹き荒れた。
護衛団が何とかしてくれるだろうという期待を打ち砕かれて、甲板にいた乗客たちが今度こそ絶望の声を上げた。

「に、逃げろ！」
「どこに⁉」
「この船は絶対に安全じゃなかったのかよ！」
「み、みなさん、落ち着いて——」
乗客を落ち着かせようとした船長の声が、突如として途切れた。その身体が宙へと浮き上がったのだ。
見ると、そのでっぷりとしたお腹に、ぬめぬめとした粘液を纏うクラーケンの触腕が巻きついていた。
「せ、船長っ！」
護衛団の男たちが慌てて船長の足を掴むが、彼らの身体まで一緒に引きずられていく。
「……威勢の割に情けないわね」
そんな彼らを後目に、ボソリと呟いたのはサヤだった。
「んだとコラ⁉　仕方ねぇだろ、あんな化けも——」
反論しかけた男が継ぎ句を呑み込む。
サヤが手すりを踏み台にして、巨大な魔物がいる海目がけて跳躍していたのである。
少女の蛮行に乗客や護衛団が愕然と目を剝く中、彼女は虚空から二本の剣を顕現させた。
水章霊の力によって生み出された、双剣型の紋章武装——《雙水簾》だ。
空中で二条の剣閃が走った。
次の瞬間、船長を縛っていたクラーケンの触腕が切り落とされていた。
「ぐはっ⁉」
急に束縛から解放された反動で、船長はゴム毬のように跳び、ごろごろと甲板の上を転がった。クラーケンと綱引きをしていた護衛団の男たちも引っくり返る。
サヤはそのままイカの頭部に着地。彼女を捕まえようと触腕が伸びてきたが、その前に頭部を足場にしてこちらへとトンボ返りしてくる。
「さすがですわ、サヤ」
そう賞賛の声を投げながら、アルレナが船端で弓を構えた。
風章霊の力で顕現させた、弓型の紋章武装——《殲滅弓》だ。

矢が射放たれる。一本だけではない。目にも止まらぬ速さの連射で、クラーケン目がけて次々と矢が飛んでいく。しかもその各々が峻烈な螺旋状の暴風を纏っていた。クラーケンの巨体を抉り、青みのある血飛沫が海面に散る。乗客から大きな悲鳴が上がった。

クラーケンが触腕の一本を空高々と掲げ、甲板目がけて振り下ろしてきたのだ。

だがその落下地点にムストリアが躍り立つ。彼の手に顕現されていたのは、地章霊の力による大剣型の紋章武装――《大地断裁（アースクエイク）》だ。

ムストリアはそれを下段に構えると、その人間離れした膂力に任せて豪快に振り上げた。

「むん」

巨大な触腕がくるくると宙を舞った。

直径一メートルはあろうかという太さのそれを、たったの一閃で斬り飛ばしてしまったのだ。切断された触腕は海へと落下し、盛大な飛沫が上がった。

「どりゃあああ！」

さらに船へと襲いかかってきた別の触腕を、ミィナが拳に装着した紋章武装――《黎明ノ霹靂（ディブレイク）》を叩きつけて海へと弾き返す。

「おらぁっ！」

シオンもまた負けじと巨大な戦鎚型の紋章武装――《雷神ノ鎚（ミョルニル）》を振り回し、別の一本を防いだ。

「シオン隊長、無理しないでくださいっすよ⁉」

「はん、黙って見てる場合じゃねぇだ――うっ……」

「だから言ったっすよ！」

「わいも――ぬおっ⁉　ぎゃっ！」

滑って転んで頭を打って悶絶するチャンクを飛び越え、ハンティスは手すりの上へと飛び乗った。

「フェニックス！　ぐったりしてないで力を貸せ！」

『むーっ！　あたちは元気なんだから！』

ハンティスの叱咤に、フェニックスが頬を膨らませ、気丈に反論してくる。

「――大気を震わすは熱唱の響き。爆ぜろ、滅せよ、火炎の濁流」

火系第三階位紋章術〈炎波（ブレイズウェイブ）〉。

高位の火章霊の後押しを受けて、凄まじい轟炎が吹き荒れた。

全身を炎に呑まれ、クラーケンが悶え苦しむ。立ち昇った香ばしいにおいに、ミィナが「美味しそう！」と叫んだ。

「おい、海に逃げるぞ！」

「た、助かったのか……？」

船体を捕えていた触腕を離し、クラーケンは堪らず水中へと逃げようとする。護衛団の男たちが安堵の歓声を上げた。

だが、突如としてクラーケンの動きが停止する。

「おい、波が固まってねぇか……？」

「ほんとだ……海が凍ってるぞ⁉」

何が起こったのかと驚く乗員たちに交じって、二人の少女が眼下の海を満足そうに見下ろしていた。

「逃がしはしませんよ」

「う、上手くいったね、シスちゃん……っ！」

シスリーネの氷系第三階位紋章術〈寒波（コールドウェイブ）〉と、マロンの風系第三階位紋章術〈旋風（ウィンドウィンド）〉。

猛烈な冷気を海面に叩きつけることで、クラーケンの逃げ道を塞ぐよう海面を凍らせていたのだ。

「よくやった二人とも。フェニックス、もう一発いくぞ」

ハンティスはトドメとばかりに、再び詠唱する。

「――奏でよ、焼灼の音色。煌めけ、焔の紅色。汝の閃熱で、天をも燃やせ」

今度は火系第三階位紋章術〈灼熱（フーガイ）〉だ。

身動きを奪われたクラーケンは強烈な火炎をまともに浴びて、黒こげになってしまった。

「ちょっとハンちゃん、あれじゃ食べれないじゃん！」

「どのみち苦味や臭味が強すぎて食すことはできません」

シスリーネの指摘に、ミィナは「えーっ」と悲しげに叫んだ。

「ふん、上出来だ」

教え子たちの勝利に、傍観者に徹していたバレットが満足げに鼻を鳴らす。
そして船長の方へと振り返ると、彼女は勝ち誇るように告げたのだった。
「もう安心していいぞ。我々がいる限り、この船旅は安全だ」

クラーケンを撃退した後の航行は至って順調だった。
途中で何度か海の魔物に襲われたが、面目躍如とばかりに護衛団が活躍したお陰で、ハンティスたちの出番はほとんどなかった。
そして客船は当初の予定通りの日程で、無事に港へと辿り着く。
「わー、大きな都市っ！　それにいっぱい人がいるよ！」
ミィナが歓声を上げた。
海運都市ジェノバ。キルクルスにも匹敵する規模を誇るここは、異国との貿易で大いに栄えた都市だという。
埠頭には異国の商船と思しき船が多数停泊しており、大勢の異国人風の商人たちが行き交っていた。
「ジェノバには異国人が多く住んでいて、〝異人街〟と呼ばれる一帯まであるほどですわ」
「へえ、そうなのか」
初めてこの都市を訪れたハンティスは、アルレナの言葉に驚く。
一行は船長たちに別れを告げ、久しぶりの陸へと降り立った。
港には市場が隣接しており、多くの屋台で賑わっている。
「これから宿舎に向かうが、貴様ら逸れるなよ。特にミィナ＝ミクランとチャンク＝デーフリックは――おい、言っている傍から屋台の前で涎垂らすな！　女をナンパするな！」
バレットが声を荒らげて注意する。それから溜息交じりに、
「まったく。明日から他学院との合同訓練だ。マーテリアの代表として、あまり恥ずかしいところを見せるなよ」
実はすぐに帝都に向かう訳ではない。聖騎武祭の前に、他の騎士学院と合同で訓練を行う予定なのである。どうやらそれは毎年の慣例らしかった。
「ま、どの学院も、うちよりレベルが落ちるし、はっきり言って大した練習にはならないだろうがな。あくまでも

付き合いといったところだ」
「あの、他の学院というのは……？」
「一つはこのジェノバにある学院で、テンプス騎士学院ですね。他の二つは確か、シツリナ島にある学院と、属州レナントにある学院だったかと」
マロンの質問に、事前に調べていたのか、シスリーネが即答する。
「はっ、どうせならもっと強いところとやりたいぜ――うぷ……」
「シオン隊長、まだ酔ってるっすか？」
大勢の人でごった返した市場を抜け、大きな通りを進む。聖帝教の教会のある岬まで続いていることから、表参道と呼ばれているらしい。
やがて、ジェノバの騎士団が所有しているという小奇麗な宿舎に到着した。
大通りから少し奥に入った閑静な住宅街にあり、漆喰を塗られた壁面が陽光を浴びて白く輝いている。
騎士団の独身寮らしいが、同時にテンプス騎士学院の寮にもなっているそうだ。マーテリアでは学院の敷地内に寮があるが、どうやらテンプスでは学院と寮が離れているらしい。
「なかなか良さそうなところじゃないか」
宿舎を見渡しながらそう呟いたとき、ハンティスはふと視線を上げた。
宿舎二階。その窓の向こうに人影があった。
爽やかな白い制服を着ている。恐らくテンプス騎士学院の生徒だろう。
十四、五歳くらいと思しき、中性的な顔立ちの美少年で――
「……え？」
ハンティスは思わず目を瞬かせていた。
こちらの視線に気づいたのか、すぐにその少年は姿を消してしまう。
（どういうことだ……？　今のは――）
動揺のあまり、ハンティスは手に持っていた荷物を落としてしまった。
「どうしたの、ハンティス？　いきなり立ち止まっちゃって。みんなもう中に入っちゃったわよ？」
こちらの挙動を訝しみ、サヤが声をかけてくる。だがハンティスは先ほど少年がいた窓の向こうに視線を向けた

まま、茫然とその場に立ち竦んでいた。

（——リース？）

先ほどの少年が、かつてともに戦った親友に見えたのだ。

「って、そんなわけないよな」

たまたま似た人がいただけだろう。ハンティスは頭を振って否定すると、皆を追って宿舎の玄関を潜った。

第二章 歓楽街の夜

Irregular's Rebellion

「ふふ」

扉の前でメデューサは思わず小さな笑みを零していた。

（……久しぶりだわ。と言っても、せいぜい数か月といった程度なんだけれど）

この扉の向こうにいる人物のことを思う。ただそれだけで、気持ちが高ぶってしまう。

しばらく彼に会うことができなかったこの期間は、本当に苦痛だった。ずっと早く会いたくて仕方がなかったのだ。

（まぁ、あの子のお陰でちょっとは慰められたけれど）

思い出すのは、赤い髪の少年。あれは心と身体が打ち震えるほど楽しいひと時だったと、メデューサは回想する。

「あら、今は思い出して感じている場合ではなかったわね」

彼女はようやく扉をノックした。

「メデューサよ。つい今しがた帰還したわ」

「入れ」

部屋の奥に設けられた椅子に、一人の青年が膝を組んで座っていた。

歳はまだ二十歳前後といったほど。鋭い眼光に、赤い頭髪。細身だが鍛え抜かれた筋肉は、服の上からでも分かるくらい隆起している。

そしてこうして対峙しているだけで肌が粟立ってしまうほどに、目の前の青年には圧倒的な強者の気配があった。

（ああ……）

メデューサはしばし我を忘れ、青年に熱っぽい眼差しを注ぐ。

（やっぱり、本当に素敵だわぁ……アナタとお互いの魂が溶け合うほどに激しく――）

――殺り合いたい。

しかし今は胸の奥から迸るその感情をどうにか制御して、メデューサは報告した。

「新しい仲間の確保には失敗したけれど、魔物による都市の襲撃、それからアルスベル公の側近の暗殺には成功したわ。結果、公爵は聖騎武祭へ派遣する騎士の数を、前年より大幅に減らす予定だそうよ。それから少し予定よりも数が少なくなってはしまったけれど、処理済みの魔物四百匹を連れてきたわ。今は所定の場所に待機させてる」

「そうか。よくやった」

青年が満足げに頷く。それからどういう訳か、その視線がこちらの右腕へと注がれた。

「それで、それは誰にやられた？」

「……これは」

さすがの眼力だと、メデューサは舌を巻く。

先日、廃坑道で斬り落とされた右腕は、未だまともに動かない状態だった。

何とか命系紋章術で繋いだが、完全ではない。もっと高位の術をかけなければ完治しないだろう。

「……マーテリア騎士学院の生徒たちよ。偶然、何かの任務で廃坑道にやって来たらしく、準備していた魔物も何体か彼らにやられてしまったわ」

「二つの紋章武装を使う男だそうだな」

「なぜそれを……っ？」

青年が告げた一言に、メデューサは驚いた。

「堕章霊どもから聞いた」

「……そう」

頷きつつ、マステマめ余計なことを、とメデューサは自身の眷属に心中で舌打ちする。

青年は眼光をいっそう鋭くして、

「その男はオレたちの計画の邪魔になる可能性がある。帝都に近づけたくはない」

彼がそこまで強い懸念を抱いていることに、メデューサは大きな疑問を抱いた。

（一体、あの子は何者なのかしら……？）

同時に嫌な予感が湧き起こる。あの少年を最初に見つけたのは自分だ。他の者に横取りされるなど許しがたいことだ。

「それならもう一度アタシが行くわ。あの子の弱点も分かったし」

そう提案するが、しかし青年はそれを一蹴した。

「いいや、すでに手は打ってある。あいつは今、海路で帝都に向かっているという情報が入ってきたからな。ちょうどその途上に、新しく堕章霊に認められた新入りがいる。そいつに任せてみることにした」

「なっ……」

どうやら予感は最悪な形で的中してしまったらしい。
(冗談じゃないわ。こんなことなら、あのとき最後まで逝っておけばよかった……)
メデューサは歯噛みする。
そんなこちらの内心を知ってか知らずか、青年は口端を吊り上げて、
「海運都市ジェノバ。そこがお前の墓場だ、ハンティス」
そう不敵に笑ったのだった。

「うっひょーっ!」
チャンクの興奮した叫び声が海岸に木霊した。
眼前には輝く白い砂浜、そしてエメラルドブルーの海が広がっていた。
だがチャンクが鼻息を荒くしているのは、それら自然の美しさゆえではない。
浜辺には下着同然の格好をした沢山の女性たちがいた。
「水着っ、さいっこうやぁぁぁっ!」
——水着。
海での遊泳や潜水をするために開発された、特別な衣服のことだ。それは前述の通り、まさしく下着と大差ない露出度で、この海岸にいる大勢の人たちは老若男女を問わず、そのほとんどがそれを身に着けていたのである。
「……目のやり場に困るな」
チャンクに遅れて海岸にやってきたハンティスは、思わずそう呻く。しかし浜辺を歩く人たちは至って堂々としたもので、むしろ恥ずかしがっているこちらがおかしいのではないかと思えてくる。
そこはジェノバにある海水浴場だった。
言ってみれば遊びのために解放された砂浜のことだが、海のないキルクルスではもちろん、港町であるトレストンでもこうした光景はあまり見かけない。
しかし帝都を含むこの辺りの地域では、一年を通して気候が温暖であるということもあって、昔から海水浴が盛んなのだという。

宿舎に到着した後、生徒たちは自由時間を与えられていた。それでせっかくだからと、こうして砂浜へと繰り出してきたのである。
「ここは楽園やぁぁぁっ!」
水着姿の女の子を追い駆けていくチャンク。「なにあれ? きもい」とゴミ屑を見るような目で吐き捨てられても、まるで気にしている様子はない。
「いつものことだけど、あいつとは他人のフリをしておこう。……それよりムス、お前また鼻血出てるぞ?」
「し、あ、わ、せ」
鼻から血を垂らしながら、ムストリアは恍惚とした表情を浮かべていた。
海水浴に来たのは、ハンティスとチャンクだけではない。
まだ女性陣は到着していないが、男性陣はほとんど全員が集まっていた。みんな短パンの水着姿だ。
引率の男性教官二人も一緒だった。
「おいおい、女の水着姿くれぇで、どんだけ興奮してんだよ」
その内の一人、中年のベテラン教官が鼻で笑う。
無精ひげを生やし、どこか眠たげな雰囲気を醸し出している彼は、普段は二年生の実技の授業を担当しているベルガリア教官だった。砂浜の上に植物を編んで作った敷物を敷いて、ぼりぼりお腹の辺りを掻きながら、ごろりと横になっている。我が家でくつろぐ普通のおっさんにしか見えない。
「とか言いつつ、さっきから女性のお尻を視線が追ってますけど?」
ハンティスがジト目を向けると、ベルガリアはどこかで調達してきたらしい瓶入りのお酒をぐいっと煽って、不敵に笑う。
「ばか、俺くれぇの歳になると、女のケツなんざ無心で眺めることができるんだよ」
自慢げに言われても困る。
「ベルガリア教官! 昼間から生徒たちの前でのお酒はやめた方が良いと、ラナルは忠言するであります!」
そこへ口を挟んできたのは、まだ若い男性教官だった。
今年の春に実技担当教官として赴任してきたばかりのラナル教官だ。その生真面目な性格を表すように常に真っ直ぐ背筋を伸ばしており、その口調もどこか硬い。日差しが強いというのに、彼だけは暑苦しい教官服を着たまま

だった。

「いいじゃねぇかよ、ちょっとくらい。どうせ今は自由時間なんだ」

そんな若手教員にひらひらと手を振って、ベルガリアが反論する。

「それより、お前も遊んでこいよ。お前くれぇ男前なら、声かけりゃあ、女の一人や二人、ほいほい付いてくるだろ?」

「いえ! ラナルには生徒たちを監督する義務がありますゆえ!」

「……相変わらず真面目だな……まぁ、好きにしろ」

「そうさせていただきます!」

呆れた様子のベルガリアに、ラナルはびしっと敬礼を返した。

と、そのとき砂煙をあげながら、猛スピードで駆けてくる少女がいた。

「わーい! 海だ海だーっ! 泳ぐぞーっ! 潜るぞーっ! 魚捕まえるぞーっ!」

声だけで誰だか分かったが、振り返ると案の定、ミィナだった。

彼女は元から日焼けした身体を、橙色のビキニで包んでいた。

砂の上を蹴るたび、上下に揺れる胸。それを男たちが注視していることなど露知らず、彼女は全速力で浜辺を走り抜け、海水に飛び込んだ。

「ぎひゃあ! 冷たいっ!」

「準備体操くらいしてくださいな」

悲鳴を上げたミィナにそう苦言を呈しながら、金髪の少女がこちらへと歩いてくる。

男子生徒たちの間から、どよめきが巻き起こった。

アルレナだ。ホルターネックタイプの明るい色のビキニを着用し、白く美しい背中を大胆に晒している。瑞々しい少女の肌でありながら、大人顔負けの抜群のプロポーション。ごくりと唾を嚥下する音が連鎖した。

「にしても、なかなか恥ずかしいですわね……」

ミィナと違って少し恥じらうその様が、さらに男たちの欲情を刺激する。その結果、

「ぶーっ!」

「おい、ムス!?」

ムストリアが鼻血を噴出してぶっ倒れた。

「まったく、明日からの訓練に備えて本来ならば休息するべきだろうに」

そう言いながら現れたのはバレットだ。

しかし本人は、やたらと気合の入った大胆極まりない水着を着用していた。

上下が一体となったワンピース型の水着であるが、胸の谷間から臍の辺りまでがぱっくりと割れているのだ。さらに脇から腰にかけてのラインにも、大きな切れ目が入っている。露出度そのものは他の水着と大差ないものの、遥かに扇情的だった。

男子たちの視線が釘づけになる。ベルガリアもまた彼女の胸の谷間を凝視していた。どう見ても無心ではない。

「バ、バレット教官! さ、さすがにその格好はやり過ぎかと思われます!」

真面目なラナルが、顔を赤らめて咎める。

「ふん、この辺りではこれくらいは普通だ」

「姐さん最高や——ふぎゃ!?」

抱きつこうとしたチャンクが、お約束のように殴り倒されて砂に顔を埋めた。

さらに続々とマーテリア騎士学院の女子生徒たちが姿を現す。普段の訓練で鍛えているからだろう、その見事に引き締まった眩しい肢体は、浜辺にいる他の男性たちからも注目を浴びていた。

そんな中、ハンティスの視線はというと、他の生徒たちの背後に隠れるように少し遅れてやってきた少女——サヤへと向けられていた。

彼女の水着は大抵の女子たちと同じくビキニタイプだが、布面積は大きい方で、さらに腰にはパレオを巻いていた。そのため露出は控えめで、また色が黒ということもあって、どこか地味な印象を受けてしまう。

しかしながら、他の女子生徒たちが色褪せて見えてしまうほどに完成されたその肢体が、圧倒的な存在感を醸し出していた。

確かに胸や尻周りの大きさは、アルレナやバレットと比べると見劣りしてしまう。だが、無駄のない筋肉と適度な脂肪が絶妙なバランスで保たれた身体は、もはや一つの芸術の極致と言っても過言ではないだろう。

ハンティスがしばらく呆然としたように見詰めていると、

「そ、そんなにジロジロ見ないでよっ……」

頬を赤く染めたサヤが、身体を腕で隠す。

「わ、悪いっ……」

どうやら思わず見惚れてしまっていたらしい。視線を逸らすが、それでもハンティスはチラチラと彼女の姿を見てしまう。

「や、やっぱり、恥ずかしいわね……着替えてこようかな……」

「いや、そんな勿体ないことするなって！」

踵を返そうとした彼女を、ハンティスは慌てて止めていた。

「そ、そう？」

窺うような上目づかいでこちらを見てくるサヤ。その反応が可愛らしくて、ハンティスの心臓が早鐘を打つ。

「は……ハンティス！」

と、そこへ突然、長い銀髪の少女——シオンが割り込んできた。

「——っ⁉」

振り返ったハンティスは驚愕する。

彼女は布面積を限界ぎりぎりまでそぎ落とした真っ赤なビキニを着用していた。

布地の大きさは通常のビキニの半分以下。最小限のプライベートゾーンだけを隠しているという、まさしく露出を究極まで追求した水着だ。

そんなもので彼女の豊満な胸を押さえ込めるはずもなく、少し身じろぎするだけで、ぼよんぼよんと激しく上下運動を繰り返す。

「ど、ど、どうだ！」

本人もさすがに恥ずかしいのだろう。顔を耳まで紅潮させながら、しかしそれでも艶めかしいポーズを取ってアピールしてくる。

ハンティスは、ごくり、と思わず唾を呑み込んでいた。
その音が聞こえてしまったのか、サヤが半眼でこちらを睨んでくる。
「その程度ですか、姉さん」
しかしそこに、勝ち誇ったような声が乱入してきた。やって来たのは、上衣がタンクトップになっているタイプの水着を着たシスリーネだった。
彼女の背後には、バスタオルで身体を隠したマロン。
「さあ、マロン。あなたの真の姿を見せて差し上げなさい！」
シスリーネは高らかに煽った。
（まさか、シオンよりもすごい水着を……っ⁉）
と、ハンティスは戦慄して息を呑むが、
「や、や、やっぱり無理ですぅぅぅっ！」
「あっ、マロン！」
マロンはいきなり踵を返したかと思うと、全速力で逃げていってしまった。シスリーネが慌て彼女を追い駆けていく。
「……どんだけヤバい水着だったんだろうか……」
ハンティスは色んな意味で胸を撫で下ろしたのだった。

浜辺で日が暮れるまで散々遊んだ後、ハンティスたちは宿舎へと戻っていた。
食堂で夕食を取ってから部屋へ帰ってくると、すでにチャンクの姿があった。とても遺憾なことに、彼との相部屋なのだ。
こちらを見るなり、チャンクは渋い顔で告げた。
「……ハンティス。わいは今日、男になってくるで」
「は？」
こいついきなり何を言い出すのだろうか。

「夜の街に繰り出すんや！」
怪訝な顔をするハンティスに、チャンクは拳を握ってそう力強く宣言した。
「明日は訓練があるから、今日の夜は外出禁止って言われただろ？」
パレットの忠告を思い出し、ハンティスは眉をひそめる。しかしチャンクは、
「わいの住んどった地域では、『絶対にやめろよ⁉』と念を押すのは『やれ』という意味になるんやで？」
「……お前の故郷だけの話だろ」
ハンティスは思わず嘆息した。
「勝手にしろよ。バレても俺は責任取らないからな」
と、隊長としてはやや無責任なことを言いつつ、ベッドの上に寝転がるハンティス。長旅の疲れもあって、今日は早く眠りたい。
すると、いきなりチャンクがこちらの鼻先に、びしっと人差し指を突きつけてきた。
「ハンティス、前から思っとったんやけどな」
「な、何だよ……？」
珍しく真剣な顔をしたチャンクに、ハンティスは面食らう。
「じぶん、女の子に対してほんっまに優柔不断で受動的で意気地なしやな」
「っ」
ズバッと指摘され、ハンティスは言葉を失う。自分でも薄々気づいていたことでもあり、何も言い返せない。
チャンクはさらに切り込んできた。
「サヤが好きなんやろ？」
「な、何でそれをっ……」
「見とったらバレバレやろが。なのに同じ部隊、寮の部屋も同じゅう超ボーナス状態にありながら、まだなーんの進展もあらへんのやろ」
「ぐ……」
図星だった。正確に言えば一度告白してはいるのだが、それも色々あってあやふやになったままだ。
「しかもや！　他の女の子からのアプローチを断る訳でもなし！　なんて煮え切らんダメ野郎なんや！　羨ましい

爆ぜろ！」

「羨ましいのかよ……」

「そんなことしとったら、いつか全員からそっぽ向かれるで！」

正論だったが、ヂャンクに言われるとやたら腹が立つのは気のせいではないだろう。

「けど……どうしろってんだよ。俺だって、頑張ろうとは思ってんだよ……一応……」

思わず声が尻すぼみになる。

そんなこちらに、ヂャンクはなぜか自信満々に告げた。

「じぶんはな、もっと女の子に慣れる必要があるんや！」

「女の子に、慣れる……？」

「そうや。つまりは、経験やな、経験」

鸚鵡返しに訊き返すハンティスに、ヂャンクは兄貴然と講釈を垂れてくる。

「大人の男の余裕っちゅうもんを身につけるゆうこと。そうなったら女の子に振り回されるんやなく、こっちが主導権を持ってリードすることができるようになるはずやで。ついつい鼻息が荒くなってもうたりなんて童貞臭い反応もなくなるはずや！」

「それはお前だろ」

というハンティスの突っ込みを無視して、ヂャンクは立ち上がった。

「というわけで、ハンティス。ほら、じぶんも一緒に行くで」

ジェノバの街は、東部に広がる古い町並みの一帯――旧市街地と、市場や異人街などを含む西部の新市街地とに大きく分かれている。

宿舎を裏口から抜け出したハンティスたちは、新市街地を東に向かって進んでいた。

とうに日が暮れているというのに、街は活気に溢れている。

光章霊を利用した色とりどりのランタンがあちこちに飾られ、それが街並みに幻想的な美しさを加えていた。元は東方から伝わってきた文化だというが、今ではこの都市の名物となっているらしい。

「ほ、本当に大丈夫なんだろうな？」

結局ヂャンクに付いてきたものの、ハンティスはかなり不安だった。

「安心せえや。わいらだけやない。これは毎年の恒例行事なんや」

「恒例行事？」

「ほら、あそこや」

ヂャンクが前方を指差した。

そこには高さ二メートルほどの、随分と年季の入った壁があった。

まだジェノバが小さな港町でしかなかった頃、この古い市壁――と言っても大半が取り壊されており、所々に残っているだけだが――こそが街の西端だったらしい。異国との貿易で繁栄して人口が増えていくにつれ、西側に新たな街が形成されていったそうだ。

つまりこの壁のこちら側が新市街地で、向こう側が旧市街地ということになる。

その壁の近くに、どこかで見たことのある少年たちが屯していた。

全員が私服を着ているが、今回の遠征に参加している、マーテリア学院騎士団の男子生徒たちだった。

「これで全員のようだな」

ハンティスとヂャンクがやってきたのを確認してから、その内の一人が重々しく頷いた。

第９９部隊の少年で、一応ハンティスも面識がある人物だった。

（……確か、ルーカスという名前だったっけな？）

背はそれほど高くないが、肩幅の広いがっしりとした体格をしており、顎には無精ひげが生えていた。

「諸君！　今年もついにこの日が来た！」

彼はくわっと目を見開いた。

「これは我々、選ばれし者たちだけに許された特権だ！」

話を聞くに、どうやら合宿初日に宿舎を抜け出して夜の街に繰り出すというのが、代々続く伝統行事のようなものらしい。昨年、補欠としてこの遠征に加わっていたらしい彼は、先輩から引き継ぎを受けたのだという。

「ムスはどうしたんだ？」

男子生徒のほぼ全員が集まっていたが、ムストリアの姿はなかった。気になって問うと、ルーカスは残念そうに

首を振った。

「ムストリア副隊長もお誘いしたのだが、今回はやめておくとのことだった」

「……あいつが？」

少し腑に落ちないものを感じるハンティス。

（ムスなら喜んで来そうなものだが……）

ルーカスの案内で一行が辿り着いたのは、旧市街地にある一際賑やかな一帯だった。

「あら、ボクたち少し遊んで行かない？」

「ねぇねぇ、お姉さんと良いことしましょ」

そこかしこで艶やかな格好をした女性たちが客引きをしており、近くを通ると必ずと言っていい程声をかけられる。

どうやらこの一帯は大規模な歓楽街になっているらしい。

異国人の姿も多く見かける。長く祖国を離れた彼らが、一晩の癒しを求めて集まってくるのだろう。

「実はここ、都市が主導して作ったらしいで。キルクルスやとまずあり得へん」

と、ヂャンクが訳知り顔で解説してくれる。

キルクルスはその統治者であるアルスペル公爵の性格もあって、風俗業には厳しい都市だ。そのため制約が多く、簡単に開業することができない。

一方で、ジェノバはむしろ風俗業を莫大な税収を上げるための重要な産業の一つとして位置づけていた。そして店舗をまとめて管理できるという利便性も考慮し、こうした巨大な歓楽街が設けられたのだという。

やがて一行がやってきたのは、なかなかに豪奢なお店だった。

ルーカスが言う。

「この歓楽街の中でも人気のお店だ。女の子たちのレベルが高く、サービスも良い」

「こんなええとこ、どうやって見つけたんや？」

「実はな、この店のオーナーがうちの騎士学院の卒業生なのだ。すでに話は通っている」

騎士学院を卒業して、一体何の仕事をしているんだよ、とハンティスは思った。

お店の前に立っていた店員にルーカスが名乗ると、すぐに中に通された。

店内には広々としたラウンジが広がっていた。

赤や紫の混じった照明は少し暗めで、どことなく妖しげな雰囲気だ。

ハンティスはヂャンクとセットにされて、店の奥の方にあるテーブルへと案内された。

ソファに座って少し身体を強張らせていると、

「なんやじぶん、緊張しとるんか」

「こんなところ来るの初めてなんだから仕方ないだろ」

「ナハハハ、しゃーないなぁ、わいが女の子の扱い方のお手本を見せたるで！」

ヂャンクが気炎を上げていると、すぐに三人の女性がやってきた。

「こんにちは、あたしはメイメイよ」

「うちはロロ、よろしくね～」

「私はキョウコよ、こんなに若い子は珍しいわね」

三人とも十八から二十歳といったところだろう。

だが全員、化粧をして華やかな衣装に身を包んでいるせいか、ずっと大人っぽく見えた。強い香水のにおいに鼻孔を刺激される。

彼女たちはハンティスとヂャンクを挟み込むように座った。

「わ、わいは、ぢゃ、ヂャンク＝ヂーフリック！　き、き、キルクルスから来ました！」

ヂャンクがつっかえながら、やけに堅苦しい挨拶をする。

偉そうなことを言っておきながら、どうやら自分もバッチリ緊張しているらしい。

「えー、キルクルスから来たのー？」

やや青みがかった髪の女性――メイメイが目を輝かせた。小柄だが、胸は大きい。しかもそれをことさら強調するような服を着ていて、自分の魅せ方が分かっているようだ。

「それに騎士学院に通ってるって、すっごーい！　入るのすっごく難しいんでしょ？」

「ナハハ、まぁそんな大したことでもないけどな！」

煽てられて、一気に天狗になるヂャンク。彼女たちの方が明らかに異性の扱いに慣れているようだった。

「やっぱり身体、鍛えてるんでしょう？　あたし、男性の筋肉すっごく好きなのよねぇ」

真ん中に座った背の高い金髪の女性――ロロが訊く。
「そ、そんなでもないで？」
「ほんとに？　じゃあ見せてよぉ」
ロロが甘えたような声でオネダリしながら、返事を聞く前にチャンクの服を捲った。細身だが、それなりに鍛えられた腹筋が露わになって、メイメイが歓声を上げた。
「きゃあ、割れてる〜。触っちゃってもいい？　いいよね？　触っちゃえ！」
「ひぇっ？」
腹筋を指で撫でられ、変な声を出すチャンク。
「あん、すごく、硬い……」
ロロもまたチャンクの腹筋に触れ、何とも色っぽい声を漏らした。
「へ、減るもんやないし、好きなだけ触ってもらってええで！　胸でも腕でも！　何なら、もっと下の方も！　ナハハハ！」
鼻の下を伸ばし、チャンクが調子に乗ったように大笑する。
「緊張してるの？」
と、ハンティスに声をかけてきたのは、先ほどキョウコと名乗った女性だ。
「あ、いえ……」
ハンティスが曖昧に答えると、キョウコは少し哀しげに眉を細めて、
「それとも、私が東方の民族だから？」
「そ、そんなことはないですっ！」
「よかった。いつも人るときは心配しちゃうの」
ハンティスが慌てて首を振ると、キョウコは安堵したように息を吐いた。
彼女は黒髪だった。どうやらサヤと同じヤマタイ民族らしい。
「異国の人が多いこの都市だと差別は少ないのだけど……それでも、ね」
ヤマタイ民族はかつて東方から奴隷として連れて来られた民族で、奴隷解放が行われた今でも差別や迫害を受けることが多かった。こういった客商売となると、恐らく様々な苦労があるのだろう。

「いや、実はその……お、俺の知り合いに、ちょっと似てて……それで……なんというか……」
同じ民族だからかもしれないが、彼女は少しサヤに似ているのだ。
「あら、そうなの？」
ハンティスが正直に白状すると、彼女はやたらと色っぽく微笑んで、こちらの腕に自分の腕を絡めてきた。ぎゅむっと胸が押し当てられ、その柔らかな感触に、心臓の鼓動が一気に早くなる。
歳はせいぜいハンティスより二つ三つほど年上といったところだろうが、彼女は大人の女性としての色香を漂わせていた。仕草の一つ一つが、何とも扇情的なのだ。
「もしかして、その子のことが好きなの？」
いきなり問われて、ハンティスの心拍がさらに跳ね上がった。
「え、いやっ、その……」
こちらの分かり易い慌てぶりに、彼女は少し目を丸くした。それから苦笑気味に「そうなのね、冗談で訊いたのに」と呟く。
自らの失態を悟り、ハンティスは恥ずかしげに俯く。
そんなこちらの様子を彼女は可愛い弟でも見るような目で見つめてきたが、不意に何を思ったか、ぐっと顔を近づけてきて、
「じゃあ、私で練習してみる？」
甘い吐息が鼻にかかった。
「えっ……練習って……」
彼女が纏う妖艶な空気に身を強張らせながら、ハンティスは訊き返した。
「決まってるじゃないの」
こちらの反応を楽しむように間を置いてから、キョウコは紅を塗った唇をぺろりと舐めた。
「――キ、ス」
「……っ」
「大丈夫……お姉さんが教えてあげるから」
耳を撫でるような官能的な呟きに、ハンティスの全身を落雷のような衝撃が貫く。すぐ目と鼻の先にある彼女の

昼から、目を離すことができなくなる。
と、そのときだ。
「マーテリア騎士学院の生徒たち！　ここにいるのは分かっていますわ！　すぐに出てきなさい！」
突然、凛とした一声がラウンジに響き渡った。
それはアルレナの声だった。
「ま、まさかバレたんか⁉」
そう愕然と叫んだのはチャンクだ。いつの間にか彼は上半身裸になっていた。
直後、アルレナを先頭に、マーテリア騎士学院の女子生徒たちが店内に押し入ってくる。
「まったく、夜間外出禁止と言っただろうが」
「大人しくするであります！」
さらにバレット教官やラナル教官、それに——
（ムス⁉　そうか、お前がっ……）
二メートルを超す巨漢の姿を認めて、ハンティスはこの状況の原因を悟った。
「副隊長っ、俺たちを裏切っ——ぐはっ！」
ルーカスの叫び声が途切れ、苦鳴へと変わる。どうやら取り押さえられてしまったらしい。
「何だか大変なことになっちゃったみたいね」
キョウコが苦笑し、ハンティスの腕を引っ張った。
「ほら、こっちに来て」
「……っ？」
彼女に誘導され、ハンティスは店の奥へと進む。
辿り着いたのは、簡易な調理場だった。隅には裏口と思しきドアがある。
「ここから逃げることができるわ」
ドアを開けると、そこは狭くて細い道——路地裏へと続いていた。
さらにキョウコは、纏っていたストールをいきなりハンティスに手渡してきた。
「あ、あの……」

「もしものときのためよ。それで顔を隠しなさい」
「けど……」
「いいから」
「……むぐっ」
戸惑っていると、強引に巻きつけられた。特徴的な髪の色をしているため、バレないように配慮してか、頭までストールで包んでくれた。傍から見るとかなり怪しい人物だろう。
「結局、何もできなかったけど……一つだけ」
少しだけ名残惜しそうに言ってから、キョウコは人差し指を突き立てた。
「本当はね。女の子だって、もっと男の子に積極的になってほしいって思っているものなのよ」
「っ……」
どきりとしてその場で固まるハンティスの肩を、キョウコが叩いた。
「ほら、急いで。その子と上手くいくことを祈ってるわ」
「あ、ありがとうございます！」
ハンティスは礼を言って踵を返すと、外へと飛び出した。
だが狭い路地を駆け抜けようとしたそのとき、
「はっ、やっぱここで張っといて正解だったぜ」
「っ！」
前方から戦鎚を担いだシオンが姿を現した。
道を塞いで眼前に立ちはだかった彼女は、それを高々と振り上げた。
「そこで止まれ、止まらないとこいつを叩きつけるぜ」
物騒な宣言。だが、ハンティスはあえて加速した。
「なっ⁉」
予想外の行動にシオンが瞠目する。慌てて戦鎚を振り下ろしてきたが、ハンティスは頭から滑り込むように前転して、ギリギリのところでそれを躱していた。
すぐ背後で石畳の地面が爆ぜ、冷や汗を掻く。

彼女の脇を抜けて即座に起き上がったハンティスは、全力で走った。
「くそっ、そっちに逃げたぞ！」
(やばい、他にもいるのか!?)
シオンの応援を求める声に応じて、複数の足音が近づいてくる。幸い、その方角は一方に偏っているようだ。
ハンティスはそれとは逆方向へと舵を切った。
「っ!?」
頭上からの強烈な気配に、ハンティスはぞっと背筋が凍るような予感を覚えた。
「どりゃあああっ！」
(ミィナ!?　くっ！)
上から迫った拳を、ハンティスは咄嗟に横に跳んで回避していた。
「あれっ？　避けられちゃった!?」
(うちの部隊も来てたのかよっ！)
大いに動揺しながらも、ハンティスはすぐに別の路地へと飛び込む。
だがそこには二人の少女が待ち伏せていた。
「今です、マロン」
「——渦巻きて吹き荒れよ、獰猛なる風牙」
紋章詞が唱えられ、放たれたのは風系第二階位紋章術の〈旋風〉だ。
(こんなところで紋章術をぶっ放すなよ!?)
狭い路地だ。左右に避けることはできないし、後方へと身を転じている余裕もない。
「なっ！」「えっ？」
シスリーネとマロンの驚きの声が重なる。
ハンティスは家の壁を蹴り、跳躍していた。
〈旋風〉が足元を掠め、背後から追い駆けてこようとしていたミィナが直撃を喰らって、「ぎゃうん!?」と蹴り飛ばされた野良犬のような悲鳴を上げる。
家の屋根へと飛び上がったハンティスは、そのまま屋根伝いに逃走を再開。夜風を切って疾走する。しかし、

「逃がさないわ」
すぐ隣の屋根の上を駆ける人影に、ハンティスは戦慄する。
今度はサヤだ。こちらは全力で走っているのだが、それに平然と並走してきている。いや、それどころか徐々に彼我の距離を詰められつつあった。
(相変わらず速いな！)
足の速さでは彼女に敵わない。逃げ切る自信はなかった。
(くそ、どうすれば…………っ！)
そのとき偶然、眼下に開け放たれた窓を発見して、ハンティスは咄嗟に足を止めた。
即応し、サヤも急停止する。
「……ようやく観念したみたいね」
彼女は押し殺した声でこちらを威圧しながら、ゆっくりと近づいてくる。
(一か八かっ！)
決死の覚悟で、ハンティスは窓から店舗の中へと飛び込んだ。背後から「あっ、待ちなさい！」という声が聞こえてきたが、待つわけがない。
そこは大勢の客でごった返していた。照明は情欲を刺激するようなピンク色。部屋の中央にはステージがあり、男たちが興奮した顔で凝視していた。
(って、何だここは!?)
ステージの上にいたのは、卑猥なポーズを取る上半身裸の若い女性だった。下半身も下着一枚。しかしそれすらも、今まさに脱ぎ捨てようとしている。
そこはストリップ劇場だった。
「なっ!?」
後ろから息を呑む音が聞こえてきた。
ちらりと振り返ると、サヤが部屋の入り口のところで愕然としたように目を見開いていた。そして見る見るうちに顔が真っ赤に染まったかと思うと、「サイアクっ！」と叫んで入ってきた窓から飛び出していく。
(やばいもの見せてしまった……っ！)

ハンティスは突然の闖入者に驚く店員や客の間を「すいません！　すぐ帰ります！」と謝りつつ走り抜ける。
外に出ても気を緩めることはなく、店舗の間を縫って夜の街を逃げ回った。
五分、いや、十分は走り続けていただろうか。
「はぁ……はぁ……さすがに、ここまでくれば……」
ハンティスは歓楽街を出て、宿舎のある新市街地まで戻ってきていた。
人気の少ない路地で膝に手を突き、呼吸を整える。追っ手の気配はない。
「しかし酷い目に遭ったな……」
それもこれもチャンクとムストリアのせいだと、内心で恨み節をぶつける。
ハンティスは顔に巻きつけたストールを外そうと、手をかけた。この滑らかな肌触りからして、決して安物ではないだろう。こんなものを貰ってしまってよかったのかと、ハンティスはキョウコに申し訳なく思った。
（……にしても）
すごく良いにおいがした。
（せ、せっかく貰ったんだし……）
心の中でよく分からない言い訳をしつつ、ハンティスは背徳感を覚えながらも、しばしそのにおいを堪能してしまう。
「見つけたぞっ、覚悟っ！」
突然、背後から空気が弾けるような怒号が轟いたので、心臓が止まるかというほど驚いた。
（やばい、追いつかれた⁉）
振り返ると、路地の奥からこちらに迫りくる人影があった。
地面を蹴って跳躍すると、いきなり強烈な回し蹴りを繰り出してきた。
「っ！」
ハンティスは身を屈め、間一髪でそれを躱す。
（……うちの制服じゃない？）
チラリと視界を過った見慣れぬ制服に、ハンティスは違和感を覚えた。
ハンティスの頭上を飛び越えたその人影は、着地と同時に身体を翻し、すぐさま再び襲いかかってくる。

「よくぞ躱したな、食い逃げ犯めっ！」
「食い逃げ犯……っ？　おい、何のことだよ⁉」
身に覚えのない罵倒を受けて、ハンティスは怒鳴り返す。
最初は追っ手かとも思ったが、服装や声から判別するに、どうやら相手は見ず知らずの少年のようだ。薄暗い場所のせいで、生憎と顔はよく見えない。
「しらばっくれるな！　つい先ほど、そこの飲食店で食い逃げをした犯人はお前だろう！」
「何を根拠に言ってんだよっ？」
「顔を隠していて明らかに怪しいからだ！」
びしっ、とこちらの顔に指を差してくる少年。確かにハンティスは今、ストールを顔に巻きつけていて完全に不審人物ではあるが、
「だからって、いきなり犯人扱いはないだろっ？」
「問答無用！」
「いやせめてもう少しくらい問答しようぜ⁉」
「……」
「本当に問答無用なんだな！」
どうやらあまり話の通じないタイプの人間らしかった。
彼が繰り出してくる拳や蹴りを、ハンティスは何とかガードしながら後退していく。
と、そこで路地から大きめの通りへと出た。街灯のお陰で、少年の姿をよりしっかり認識することができるようになる。
（なっ……）
その瞬間、ハンティスは我が目を疑った。
気づけば反射的に身体が動いていた。少年の拳を掻い潜って懐に飛び込むと、その両肩を思いきり掴んで問い詰める。
「おいっ、どういうことだ⁉　まさかお前、生きて――」
だが至近距離でまじまじと彼の顔を見つめたハンティスは、目を白黒させた。

「——って、あれ？」

直後、少年の蹴りがハンティスの腹部に突き刺さる。強烈な一撃をまともにもらい、ハンティスは地面に膝を突いた。

「っつぅ……」

「なっ、なっ、何をするのだっ、いきなり……っ？」

少年はやたらと狼狽えた様子で、なぜか自分の身体を護るように両腕で胸の辺りを隠しつつ、二、三歩後ずさった。

「わ、悪い……知り合いとちょっと勘違いして、思わず……。けど、人違いだった」

立ち上がりながら、ハンティスは謝罪する。

「人違い……？」

少年は訝しげに眉をひそめた。

——彼が一瞬、リースに見えたのだ。

だがよくよく見ると、明らかに別人だった。

（リースがいるわけないだろ……）

ハンティスは内心で自嘲する。

とは言え、輪郭や口元など、どことなく似ているところもあって、この薄闇の中だと間違えるのも無理はない。リースよりも幾らか小柄で、顔はどこか幼い印象を受ける。

「そんなことでぼくを惑わそうだなんて、そうは問屋が卸さぬぞ！」

それにしても随分と性急で思い込みの激しい性格だ。

ハンティスは溜息交じりにストールをずらし、顔を見せた。

「だから俺は犯人じゃないって。ほら。この顔が食い逃げ犯に見えるか？」

少年が表情を驚きの色に染め上げる。

「貴様っ、よく見るとそれは女物のストールではないか!?　さ、さては盗んだのだな！」

もっと酷い勘違いをされてしまった。

「そして顔に巻きつけて、においを嗅いでいたのだな……っ！　な、なんという常軌を逸した変態なのだ！」

嗅いでいたのは本当なので、そこは言い返せなかった。

「もはや容赦はできん！」

「さっきからまったく容赦してなかった気がするけどな!?　ていうか、これは盗んだんじゃなくて、貰っ——」

「問答無用！」

「せめて最後まで言わせてくれ！」

「このリース＝リガルジェント、端から悪党と問答する気などない！」

「それどう考えても大量の冤罪を生むから!?」

と思わず突っ込んでから、ハンティスはハッとした。

（ん、ちょっと待て。こいつ今、何て名乗った……？）

そのときだった。

「いやがったぞ！」

旧市壁の方から怒鳴り声が聞こえてきた。さらに、石畳を叩く複数の足音が続く。シオンを先頭に、数人の少女たちがこちらへと駆けてくるのを認めて、ハンティスの顔がさっと蒼ざめる。

「やばっ……」

「ま、まさか貴様っ……あの少女たちの服をも盗んだというのか!?」

少年がさらに盛大な勘違いを重ねたが、その誤解を解いている暇はない。

「何でそうなる！　ああくそっ」

ストールを素早く巻きなおすと、ハンティスは再び駆け出していた。

「あっ、待つのだ！」

「待ちやがれ！」

背後からの声を無視し、ハンティスは近くの路地へと飛び込む。

鬼ごっこは夜遅くまで続いたのだった。

「お、重い……」

深夜。ハンティスは全身の窮屈さに耐え切れず、目を覚ました。

身体——特に胸と足の辺りに強い圧迫感がある。息苦しく、そして暑苦しい。

ハンティスは横になったまま視線を下げ、

「う〜ん……姐、さん……」

こちらの身体にヂャンクが抱きついていた。

「何してんだ⁉」

強引に引き剝がし、思いきり蹴り飛ばしてやった。

ベッドから転がり落ちたヂャンクは、「ああ、もっとわいにお仕置きを……」などと、嬉しそうに涎を垂らしながら寝言を吐いている。かと思うと、今度は一緒に落下した枕を抱き締め、キスをし始めた。

あの枕は早急に廃棄処分した方がいい。

「何で俺のベッドに入ってきてるんだよ……」

ぼやきつつ、以前サヤが勝手にこちらのベッドに潜り込んできたときのことを思い出すが、天国と地獄の差があった。

(まぁ、あのときも結局は酷い目に遭ったんだけどな……)

数時間前、ハンティスはどうにか追っ手を撒くことに成功し、この宿舎まで戻ってきた。

そして部屋に帰ってくると、疲労のあまりそのままベッドに倒れ込んだのだ。そのときはまだ部屋にヂャンクの姿はなかったので、きっとアルレナたちに捕まり、かなり夜が更けてから帰ってきたのだろう。

「汚い……」

鬼ごっこで掻いた汗に加えて、ヂャンクに抱きつかれていたことで肌がやたらとベトベトしている。

ハンティスは溜息とともに起き上がると、部屋を出て浴場へと向かった。

近くに海底火山があるお陰で、ジェノバの街は温泉が盛んだった。この宿舎にも引かれており、そのためいつでも好きな時に風呂に入ることができるのである。

脱衣所で服を脱ぎ、浴室へ。

湧き立つ湯気を掻き分けるように石造りの湯船へと近付くと、桶でお湯をすくった。かけ湯をして、身体の汚れを落とす。

とそのとき、湯船の真ん中にあった大きな岩の陰から出てくる人影があった。

どうやらこんな時間にもかかわらず、先客がいたようだ。向こうもこちらに気づいたようで、互いの視線が交錯する。

「「あ」」

同時に目を瞠っていた。

それは先ほど、こちらを食い逃げ犯と勘違いして襲いかかってきたあの少年だった。

大きめのタオルを身体に巻きつけることで、彼は上気した肢体を隠していた。

しかし隠し切れていない鎖骨や四肢の部分から、随分と滑らかで綺麗な肌をしていることが分かる。中性的な顔立ちで、今はお下げにしていた髪を解いているせいか、一瞬、少女にも見えてしまった。

突然のことにしばしポカンと口を開けていた少年だったが、すぐに眦を鋭くして、

「ここで会ったが百年目! 今度こそひっ捕らえてやる!」

湯船から飛び出し、こちらへ躍りかかってきた。

「ちょっ、だから俺は犯人じゃないって!」

「犯人はみんなそう言うのだ!」

「犯人じゃなくてもそう言うだろ! お前、人の話を聞かなくて思い込みの激しい子だって、よく言われなかったかっ?」

「な、なぜそれを⁉」

「いや丸わかりだろ……」

「とにかく、覚悟——」

突然、ハンティスの鼻先を少年の足の裏が通り過ぎた。

蹴りの間合いを見誤ったのかと思ったが、どうやら足を滑らせてしまったらしい。

「——ひゃ⁉」

思いのほか可愛らしい悲鳴が響き、少年の上半身が後方へと傾ぐ。

「危ない!」

ハンティスは咄嗟に彼の手を摑んでいた。後ろへと倒れ込んでいく彼を何とか支えようとしたのだが、

「っ!?」

ハンティスも滑った。

結局、二人そろって床に倒れ込んでしまう。

「つぅ……おい、大丈夫か？」

少年は床に尻餅を突くような形で倒れ込んでおり、ハンティスは彼の股の間に顔を挟み込むような格好となっていた。

しかも転倒の拍子に、彼が身体に巻きつけていたタオルがはだけてしまっていて、

「――へ？」

ハンティスは眼前に広がっていた光景に、思わず頓狂な声を漏らしていた。

男であれば必ず付いているはずのアレがないのだ。

しかも視線を上げて見れば、胸部には決して小さくない膨らみがあって――

「……お前……女、だったのか……？」

「き、きゃあああっ！」

直後、甲高い悲鳴が浴室に響き渡った。

第二章
皇女

Irregular's Rebellion

「――僕は、皇宮を出ようと思う」
少年の突然の宣言に、少女は言葉を失った。
大陸でも随一の歴史と伝統を有し、大いなる聖霊の寵愛と加護を受けし国――聖カルローナ帝国。
その格式高い皇宮の庭で、少女は少年と向かい合っていた。
「どうして……ですか……？」
内心の驚きが震える声となって、少女の可憐な唇から零れ落ちる。
だがすぐに少年が置かれている状況に思い至って、少女は眉を伏せた。
「……やっぱり、身の危険を感じて……」
帝国の皇帝は代々、聖霊の力を行使することができると言われている。その威光は絶対で、周辺国ですら容易には逆らうことができない。聖霊は今や大陸の大半にまで広がった聖霊教の主神であるため、当然とも言えた。
しかしそんな絶大な権力を持つがゆえに、皇家の歴史は醜い骨肉の争いで彩られてきた。
少年は現皇帝の第四皇子であり、そして少女は第三皇女だ。
過去に女帝の例がない訳ではないが、基本的に男児が優先される。少年の皇位継承順位は第四位に当たっていた。
現皇帝はすでに高齢で、いつ崩御してもおかしくないと言われている。
そのため第一皇子が野盗に襲われ殺されかけたり、第三皇子が食事に毒を盛られて今でも意識不明の状態にあったりと、皇位継承の争いは年々激化。すでに生々しい殺し合いの様相すらも呈していた。
第四皇子である少年の身も、常に危険に脅かされているのである。
だが少女の推測に、少年は首を左右に振った。
「そうじゃないよ。僕は……この帝国を護らなくちゃならないんだ」
少年の瞳には強い決意があった。
「どうしてですか？　そんなこと……他の兄様たちに任せておけば良いんです」
政治も何も知らない少女にとっては、帝国のことよりも少年の方がずっと大切だった。思わず責めるような口調になってしまう。
「……聖霊さまの導きだよ」
少年は少し困った顔をしてから、ただそれだけを口にしたのだった。

行かないでほしい。少女は切実に願う。
しかし少女は知っていた。少年が一度決めたことを覆すことはないということを。
やがて、少年は皇宮を去った。

「……は、八百九十九っ……きゅ、九百……っ！」
ハンティスは悲鳴を上げる筋肉に鞭を打ち、何とか腕を伸ばし切った。
だが、まだこれで終わりではない。だというのにすでに腕は小刻みな震えが止まらず、もはや限界にきていた。
「……さ、さすがに……キツイ……」
思わず弱音を零すと、バレット教官の叱責の声が飛んでくる。
「あとまだ百回あるぞ！　それくらいでヘバってどうする！　そのあとはさらに腹筋とスクワットがそれぞれ千回ずつだ！」
「……じ、地獄だ……」
宿舎の中庭にて、早朝から強制的に筋トレをやらされているのだった。
ハンティスだけではない。
昨晩、規則を破って歓楽街に行った男子たち全員が、その処罰として腕立て千回、腹筋千回、スクワット千回の懲罰を言い渡されたのである。
「……チャンク、恨むぞ……」
「た、旅は道連れ……世は情けって、言うやろ……？」
隣で同じく息絶え絶えになっているチャンクを睨みつけると、そんな返答が返ってきた。
「ふざけろ……」
こっちはバレずに宿舎まで帰ることに成功したはずだった。
だが『ハンティスも一緒やったで』とチャンクがあっさり暴露してしまったせいで、こうして同じ処罰の憂き目に遭ってしまったのである。
「し、仕方ない、やろ……すべて正直に話せば、姐さんの……水着が……ご褒美やと言われたら……」

「それで俺を売ったのかよ⁉」

声を荒らげるハンティスだが、ヂャンクが汗に混じって、目からボタボタと雫を零したのでぎょっとした。

「……貰えへんかった……謀られたんや……」

「……」

本気で殴ってやろうかと思った。

「……も、もうあかん……」

限界がきたようで、ヂャンクはぐしゃりと崩れ落ちた。

「おい、休むな、ヂャンク＝ヂーフリック」

その頭を踏もうとしたパレットは、寸前で思い留まった。ヂャンクが疲労で顔を歪めながらも、何とも嬉しそうな顔をしていたからだ。

「……ムストリア、代われ」

「うす」

「ぎゃあああっ、死ぬ死ぬ死ぬでっ⁉」

ムストリアがヂャンクを踏みつける。体重百キロを超える巨漢だ。痛いに決まっている。

「……ムス……」

「ひゅ～」

ハンティスが裏切り者のムストリアに恨みがましい視線を向けると、彼は目を逸らして口笛を吹いた。

本気で殴ってやろうかと思った。

「……九百九十九……千っ……」

ようやく腕立てが終わって、ハンティスはどさりとその場に倒れ込む。土と草のにおいが鼻を突いた。

「あと腹筋とスクワット……」

「……身体が……重い……」

全身の激痛に顔を歪め、ハンティスは呻いていた。

合同訓練のため、少し離れた場所にあるテンプス騎士学院に向かっていた。

だが歩くだけでも辛い。というより普通に歩くこともできず、杖を突くことでどうにか身体を前に進めているという有様だった。

他の男子生徒たちも似たり寄ったりの状況で、ヂャンクに至ってはムストリアに荷物のように担がれている。

「本当にこの状態で訓練やれるのか……」

「せ、せんぱい、大丈夫ですか……？」

「マロン、放っておいていいわよ。完全にそいつの自業自得でしょ」

隣を歩くマロンが心配してくれるが、サヤがいつになく冷淡な声で突き放してくる。

「お、俺はヂャンクに無理やり連れていかれたんだよ！」

「ふーん、そう」

懸命に弁明するハンティスだったが、彼女の態度はあくまでも素っ気ない。

(……完全に裏目に出てしまったじゃないか、くそ)

ハンティスは思わず内心で悪態を突く。

しかも彼女には、顔を隠して逃げ回ったこともバレてしまったようで、

「あ、あんたのせいで、変なものを見ちゃったじゃないの……」

ストリップ劇場で見たものを思い出してしまったのか、彼女は赤面する。

「なになに？　何を見たの、サヤちゃんっ？」

ミィナが興味津々で割り込んできた。

「な、何でもいいでしょ」

無邪気な好奇心から瞳を輝かせて訊いてくるミィナを、サヤは冷たくあしらった。

「えー、だって気になるじゃん」

「あ、あなたは知らなくていいことなの！」

「うーっ、サヤちゃんのケチんぼ！」

そうこうしている内に、テンプス騎士学院に辿り着いた。

テンプス騎士学院はマーテリア騎士学院と比べれば、生徒数が三分の一ほどしかない。そのため敷地面積はだい

ぶ狭く、また建物も比較的庶民的だった。

帝都にあるスパティウム騎士学院の方がずっと格式が高く、貴族の大半はそちらに入学するからしい。

訓練棟に到着すると、他の騎士学院の出場部隊はすでに集まっていた。

「このたびは遠路はるばるお越しいただき、誠にありがとうございます。わたくしはテンプス騎士学院で教官をしております、グレンカと申します」

そう堅苦しい挨拶をしてきたのは、理知的な容貌をした女性教官だった。歳は二十代後半ほどだろう。

なかなかの美人だが、あまり笑顔がなく、厳格そうな教官という印象を受けた。

「マーテリア騎士学院のベルガリアだ。まあ、適当によろしく」

「同じくバレット＝パスカリーだ。短い間だけだが、よろしく頼む」

「ラナルであります！　よろしくお願いいたします！」

ベルガリア教官がなおざりに、バレット教官はごく普通に、ラナル教官はやたら熱血にそれぞれ挨拶を返した。

「それでは例年通り、試合形式ということでよろしいでしょうか？」

グレンカが確認し、他の教官たちがそれに頷いた。

実際に聖騎武祭に出場するのは各学院二部隊ずつの計八部隊だが、どの学院にも同じく二部隊ずつ補欠部隊がいるようだ。合計すると十六部隊になる。

そのとき、テンプス騎士学院の生徒が手を挙げて報告した。

「グレンカ教官、まだ一人来てません」

「……困りましたね」

グレンカが少しだけ眉根を寄せ、思案する。

「ま、先に始めといても問題はねぇだろ。聖騎武祭の本番じゃ、たとえ欠員が出たり隊員数が違ったりしても、いちいち人数調整は行わねぇしな」

ベルガリアがそう提案するが、グレンカは申し訳なさそうに首を振った。

「いいえ、実はたった一人だけの部隊でして」

「は？　テンプスには選抜戦があるんじゃねぇのか？」

グレンカの返答に、ベルガリアが眉をひそめる。

「そうです。ですが、彼はたった一人で最後まで勝ち抜いてしまったのです」

その場にいた誰もが驚きで目を丸くした。

「なるほど。どうやらテンプスにも骨のある生徒がいるようですね」

「はっ、テンプスにも骨のあるやつがいるみてぇじゃねぇか」

シスリーネとシオンが同時に同じことを呟き、二人は顔を見合わせた。

「マネをしないでください、姉さん」

「お、お前だろ真似したのは！」

とりあえず待っていても埒が明かないということで、マーテリア騎士学院の補欠である第06部隊が、聖騎武祭に出場する部隊の方に交じることになった。

第29部隊を含む補欠部隊は、別の訓練室へと移動する。バレットの他に、各騎士学院から教官が一人ずつ監督として付いてきた。

バレットが代表して言った。

「一応、補欠の貴様らも向こうと同じように試合形式での訓練を行うことにした。ただし奇数のため、余った部隊は筋トレ――」

「またかよ!?」

「――と言うのは冗談だ。その間は見学をしておけ」

ハンティスは胸を撫で下ろす。すでに試合すらまともにできるかどうか分からないくらいの状態なのだ。これ以上はもう勘弁してほしかった。

まずはハンティスたち第29部隊と、テンプス騎士学院の部隊――第11小隊が対戦することとなった。

「何だか、あまりやる気が感じられないわね」

対戦相手の六人組を見て、サヤが眉根を寄せる。

「……そうだな」

彼女が言う通りだった。

男性四人、女性二人で構成された小隊だ。移動してくる間中ずっとだらだらとおしゃべりをしていたり、最初の試合に呼ばれると面倒そうにしていたりと、お世辞にも真面目な雰囲気とは言い難い。

訓練室の中央で整列すると、向こうの隊長らしい短髪の少年が、身もふたもないことを言ってきた。

「ま、どうせ俺らは聖騎武祭に出場できるわけじゃない補欠だ。気楽にやろうぜ」

「でもさぁ、あっちはまだ一年生でしょ？　来年でれる可能性はあるってことじゃん？」

そこへピンク色に髪を染めた少女が横から口を挟んでくる。ウェーブのかかった髪を指で弄っており、どこか退屈そうだ。

「あー、そっかー。羨ましいな、そりゃあ」

どうやら彼らは二年生の部隊らしい。

「……なるほど。今年が聖騎武祭に出場できる最後のチャンスだったのにもかかわらず、逃してしまったと」

「そ、それで、意欲がなくなっちゃったのかな……」

シスリーネが小声で呟き、マロンが頷く。

とは言え、下手をすれば怪我をする可能性もあるため、さすがに試合中まで気を抜くことはないだろう。

やがて聖騎武祭と同じルールで練習試合が始まった。

休憩時間に入った。

「さ、さすがにこの身体だとキツいな……」

悪化する全身の痛みに、ハンティスは疲労の滲む顔で思わずそう零す。

ハンティスたち第29部隊は、全部で三試合を戦った。

正直なことを言うと、どの部隊も個々人の能力においても部隊としての総合力としても、それほどレベルの高いものではなかった。

ハンティスとチャンクがほとんど戦力にならない状態であったにもかかわらず、あっさりと勝ってしまったほどだ。

「くそ、あれで一年かよっ」

「まー、相手はマーテリアだし、仕方ないじゃん」

第11小隊の悪態を突く声が聞こえてくる。試合前はあんなことを言っていたが、やはり負けると悔しいらしい。

彼らのやり取りを聞き流しながら、ハンティスはよろよろと訓練室を出た。水飲み場で喉を潤すと、近くにベンチがあったのでどさりと座り込む。

しばらくそこで休んでいると、

「それにしても、まだ来ねぇのかよ、グレンカ教官？　たった一人で選抜戦を勝ち抜いちまったってやつ」

「申し訳ありません。後でしっかり言っておきます」

ベルガリア教官とグレンカ教官が、そんな会話をしながら傍を通り過ぎて行った。

どうやらソロ部隊の人はまだ来ていないようだ。

（……？）

ふとそこでハンティスは背後に人の気配を感じ、振り返った。

自分が座るベンチの真後ろ。そこに生えた木の陰に、怪しげな人影を発見した。

「さ、昨晩なかなか眠れなかったせいで……こんなに遅刻してしまった……。……うぅ……間違いなくグレンカに叱られる……」

震える声でそんなことを呟きながら、ベルガリアとグレンカの後ろ姿を見詰めていた。

テンプス騎士学院の男子の制服を着ていることから、恐らくここの生徒だろう。

ハンティスは声をかけた。

「何やってるんだ？」

「ひゃ⁉」

思いのほか可愛らしい悲鳴を上げたその人物に、ハンティスは見覚えがあった。

昨晩の少年――いや、少女だった。

「ち、違うのだ！　ぼくは別に寝坊したわけでは――って、貴様は昨日のっ⁉」

彼女の方もこちらに気づいたらしく、大きく目を見開く。それから何を思ったか、いきなりハンティスの手を引っ張ってきた。

「お、おいっ……？」

「す、少し話がある！　こっちに来るのだ！」

ジンジンと全身が痛むのだが、彼女はそんなことなどお構いなしだ。

そして無理やり連れて行かれたのは、人気の少ない訓練棟の裏側だった。

「い、言っておくけど、俺は本当に食い逃げ犯じゃないからな！」

「わ、分かっている……っ、貴様は確かに犯人ではなかったっ……」

「そもそも俺が犯人だっていう証拠が――え？」

「あ、あれはぼくの勘違いだったのだ……。本当の食い逃げ犯は、あの後すぐに騎士団に捕まったらしいから……」

何とも気まずそうに目を逸らしながら、少女がもにょもにょと口を動かす。

「……おい」

半眼で睨むと、彼女は少し狼狽えてから、

「だ、だからお詫びとして昨晩のことはチャラにしてやろうというのだ！」

「昨晩のって……」

そこで脳内に蘇ったのは、あの肌色の光景だった。

あんな至近距離で女性の下腹部をはっきりと見てしまったのは、ハンティスにとって初めての経験だった。それがあまりに衝撃的だったため無理やり記憶に蓋をしていたのであるが、当人を前にして頭の奥からありありと呼び起こされてしまう。

「お、思い出すな！　忘れろ！」

こちらの顔が紅潮したことでそれを察知したのか、少女は涙目になって叫んだ。

「そんなこと言われても仕方ないだろ⁉　そ、そもそも！」

ハンティスは頭を振り、どうにか脳内の映像を拭い去ろうと努力しつつ、

「あれは不可抗力だし、お前が男湯に入っていたこと自体が問題だろ！」

「し、仕方がないではないか！　ぼ、ぼくは、その……お、男のフリをしているのだから」

何か事情があるらしい少女は、バツが悪そうに呟いた。

今は強引に抑え込んでいるようで、テンプス騎士学院の男子の制服で隠された胸は、ほとんど平らになっている。髪も頭の後ろでお下げにしており、一応は少年に見えた。

「そ、それで……話と言うのは他でもない」

少女はきゅっと唇を噛み締めてから、意を決したように言う。

「ぼくが女であるということは、内緒にしておいてほしいのだ。……この学院には男として通っているから、このことが明るみに出てしまうと、その……色々と、マズイのだ……グレンカにも怒られるだろうし……」

少女が恐怖に怯えるように肩を窄めた、そのときだった。

「……一体、ここで何をしていらっしゃるのですか？」

不意に背後から声が響き、少女の身体がびくりと跳ねる。

少女は恐る恐る振り返る。そこにはまさしくそのグレンカ教官の姿があった。

「ぐ、グレンカっ……」

少女の声は震えていた。

「なぜ訓練に遅れてきたのか、教えていただけますか？」

口調こそ淡々として問い詰めるグレンカだが、有無を言わさぬ威圧感があった。

「ね……寝坊、しました……」

観念したようにしゅんと項垂れ、少女はすんなりと白状する。

「あなたにしては珍しいことですね？」

「さ、昨晩は、その……い、色々と、あって……」

「色々？」

「な、何でもない！　何でもないぞっ！」

訊き返され、少女はこればかりはと必死になって否定する。

「そうですか」

グレンカはあっさりと頷いたが、その瞳はさらに鋭さを増していた。

「では、先ほど『内緒にしておいてほしい』という言葉が聞こえてきたような気がしましたが、それは一体どういうことでしょうか？」

「っ！　い、いや、そそ、それはきっと気のせいだ！」

少女はそれでも誤魔化し通そうとする。しかしあからさまに目が泳いでおり、彼女が隠し事をしていることは誰が見てもバレバレだった。

「……本当ですか？　ではお二人で何の話をされていたのですか？」

「こ、こいつとは、その……っ！　きょ、今日はとても良い天気だなと！　そう、天気の話だ！　そうだよな⁉」

胡乱げな目を向けるグレンカに、少女は脂汗を掻きながら白を切る。ハンティスは同意を求められて「え、あ、ああ……」と曖昧に頷いたが、生憎、空を見上げると今日の天気は曇りだった。

グレンカはしばし不審そうな目で少女を窺っていたが、

「もうすぐ休憩時間が終わります。早く行ってください」

「わ、分かった！」

少女は素早く踵を返すと、急いで訓練棟の方へと走っていった。

「まったく。仕方ありませんね」
その後ろ姿を見送って、グレンカが深々と嘆息する。
それから彼女は、当惑してその場に突っ立ったままのこちらへと視線を向けてきた。
「さて、わたくしから少々お話があるのですが……よろしいでしょうか？」

グレンカ教官に連れられて、ハンティスは空き教室へとやってきた。
すでに休憩は終わって訓練時間に入っているが、バレット教官には彼女が話を通してくれている。また試合形式の訓練だそうだが、ハンティスがいなくとも残る五人で何とかやってくれるだろう。
向かい合って椅子に座る。目の前の教官の持つ冷厳な雰囲気に、ハンティスは少し緊張していた。
「単刀直入に伺いますが、あなたはあの方の秘密を知ってしまったと認識してよろしいですね？」
回りくどいことは嫌いなのか、グレンカは開口一番、そう切り出してきた。
「……は、はい」
頷くしかなかった。
「そうですか。まったく、あれほど人に知られないようにしてくださいと申し上げていたのですが……」
グレンカは嘆かわしげに大きく息を吐く。それからハンティスの目をじっと見詰めてきて、
「ぜひ他言されないよう、わたくしからもお願いいたします」
丁寧な言葉使いとは裏腹に、強い重圧を感じさせる口調だった。
「……彼女は何で性別を偽って学院に？」
ハンティスはそう問いつつも、内心で愚問だったかと思い直す。
わざわざ性別を偽るなど、きっとよほどの理由があるはずだ。会ったばかりの信用に足るかもわからない相手に、そう簡単に教えてくれるとは思えなかった。
「これもまた他言無用にしていただきたいのですが……」
しかし意外にも彼女はしばし逡巡の間を置いただけで、そう前置きしてから驚くべき事実を口にしたのだった。

「あの方はレミア＝カルローナ＝レイマール。正真正銘、第二十四代皇帝レイストロ＝カルローナ＝レイマールの第三皇女なのです」
「なっ、皇族!?」
「しっ、声が大きいです」
グレンカに叱責され、ハンティスは慌てて口を押さえた。
聖カルローナ帝国を治める皇族。カルローナというミドルネームは、彼らにしか与えられないはずのものだった。
俄かには信じられないハンティスだったが、盾に描かれた猛禽類が特徴的な家紋を示しながら素性を明かされれば、信じるほかなかった。
彼女――グレンカ＝グリムスタは、第三皇女の元選任騎士だったという。
グリムスタの家名は、ハンティスでも訊いたことがあるほどだ。公爵、そして侯爵に次ぐ階級である伯爵。名門中の名門の家柄だ。
彼女は現在、学院の教官という立場に身を置くことで、秘かに第三王女の身辺警護を務めているのだという。それにしても、まさか皇女が性別を偽り、男として騎士学院に在学しているなど、思いもよらないことだろう。
だが一体どうして皇女殿下が騎士学院に？　と不思議に思ったハンティスだが、グレンカが続けた一言によって、その疑問は一瞬にして吹き飛んだ。
「無論、偽っているのは性別だけではありません。名前もまた偽名を使われています。リース＝リガルジエント、と」
「――っ!?」
ハンティスは思わず立ち上がっていた。椅子を蹴倒してしまったらしく、背後から、がたん、という大きな音が響く。
「どうされましたか？」
グレンカが怪訝な顔で見上げてくる。ハンティスは胸の動悸を押えつつ、訊ねた。
「り、リース＝リガルジエント……今もしかして、そう言いましたか？」
「……そうですが……？」

これは果たして偶然だろうか。

だが、二人は顔も似ている。ただの偶然で片づけられるものではない。

ハンティスは自分を落ち着かせるため、椅子に座り直した。そのとき脳裏に浮かんでいたのは、ある一つの可能性だった。

「……もしかして、他にも正体を隠してどこかの騎士学院に通っている皇族がいますか？」

「いえ、わたくしの知る限りでは」

「そうですか……。俺、実は彼女と似たやつを知っているんです。それでもしかしたらと思ったんですが……」

そう告げた瞬間、彼女は何かに思い至ったのか、ハッと目を見開いた。

「まさか……レイオス様？」

彼女が零したその名は、ハンティスも聞いたことがあった。

レイオス＝カルローナ＝レイマール。

第二十四代皇帝レイストロ＝カルローナ＝レイマールの第四皇子だ。

「レイオス様は、ご兄妹だけあって、レミア様とよく似ておられます。特に輪郭や口元などでしょうか」

「っ……」

それはまさしく、ハンティスが初めて彼女に会ったときに感じた印象だった。

それからハンティスはリースの特徴をいくつか話したが、それらはすべてレイオス皇子のそれとぴたりと一致してしまった。

「……間違いありませんね」

グレンカがほとんど確信を持って頷く。

「……けど、第四皇子は確か、病弱で寝たきりだって……」

ハンティスが知る情報によれば、第四皇子は数年前より体調を崩し、ずっと皇宮で静養しているはずだった。

（いや……それはあくまでも表向きの話か……）

と、ハンティスは考え直す。

皇位の継承をめぐる争いを忌避し、皇宮を去る皇族は多いという。

無論、皇家の求心力を失わせる危険があるため、公にはされていない。そのため病気で静養中と発表されたり、もし長期にわたって行方が知れなければ病死扱いされたりしていた。

だが情報を完全に隠蔽することは不可能なのだろう。ハンティスですら皇族のそうした状況を風の噂で聞き及んでいるほどだった。

そんなこちらの思考を察したのか、彼女は神妙な顔つきで頷いた。

「……ご推察の通り、本当は失踪されたのです。今から四年ほど前のことでした。誰にも行き先も目的も告げずに、突然、皇宮を出てしまわれたのです」

「じゃあ、本当に……」

ハンティスの知るリースは、この国の皇子ということなのか。

確かに彼は一度も自らの素性を語らなかったし、学院に申請していた家柄や出身地も出鱈目だった。名前だって偽名だった可能性が高い。だとすれば、偶然にも兄妹で同じ偽名を使ってしまったということになる。

もはや疑う余地もない。

「まさかレイオス様がマーテリア騎士学院にいらっしゃったとは……。それで、レイオス様は現在どちらにいらっしゃるのでしょうか？　まだキルクルスの方に……？」

そう訪ねてくるグレンカに、ハンティスは奥歯を強く噛み締めながら、沈痛な面持ちで告げたのだった。

「……彼は、死にました」

「え……？」

ほとんど感情を表に見せないグレンカが、この時ばかりは呆気にとられたような顔をしたのだった。

「あいつは、俺たちの隊長でした」

思わず涙声になりながらも、ハンティスは彼女にすべてのことを伝えた。

同じ部隊にいたこと。

遠征中に魔人に襲われたこと。

そして、

「……俺を護って、死んだんです」

グレンカはしばし言葉を失った様子で、呆然としていた。

皇女に仕えていたということは、幼い頃からリースのことを知っていたはずだ。そう簡単に受け入れられること

ではないだろう。
思い出せば、今でも悔しさと自責の念が湧いてくる。だが、どんな詰りも非難も、甘んじて受ける覚悟はできていた。前を向くと決めたのだ。
やがて声を絞り出すように、グレンカが口を開く。
意外なことに、それは糾弾の類ではなかった。
「……お願いがあります」
「お願い？」
「このことをレミア様にはお伝えいただかないでほしいのです」
予想していなかった提案に、ハンティスは驚いた。
「……なぜですか？」
「実はレミア様は、レイオス様の後を追って皇宮を飛び出してしまわれたのです」
「そう、だったんですか……」
「ただレイオス様のときとは違い、どうにか居場所を突き止めることができました。しかしわたくしがどんなに説得しても応じてくださらず、頑なに皇宮にお戻りになることを拒まれてしまいまして……」
グレンカは痛ましげに眉を伏せ、続けた。
「あの方は、今でこそたった一人で聖騎武祭への出場権を獲得できるほどの実力を身につけられましたが……本当はとても世間知らずで臆病な、箱入りのお姫様なのです。それなのに、レイオス様に会いたい、ただその一心で、皇宮を飛び出してしまわれたのです」
「……」
「それくらいあの方にとって、レイオス様の存在は大きいのです。きっと耐えられないでしょう。少なくとも、今はまだ……」
グレンカの言葉に、ハンティスはただ無言で頷くことしかできなかった。

合同訓練の一日目が終わった後。

浴場で鉢合わせてしまった時点で分かっていたが、あの少女――レミア第三皇女は普段、ハンティスたちが泊まっている騎士団の宿舎で寝起きしているらしい。
（昨日ここに着いたときに見たのも、たぶん彼女だったんだろうな……）
グレンカから部屋番号を教えてもらったハンティスは、マーテリア騎士学院の生徒たちが泊まっている棟とは別棟にある一室を訪ねていた。
ノックするとしばらくして、ゆっくりとドアが開いた。
「な、何の用だ……？」
ドアの隙間から、彼女は軽快するようにこちらを見てくる。
「……少し、話があるんだ」
「……？」
そうして彼女を連れていったのは、誰もいない宿舎の屋上だった。
水平線の向こうに日が沈みかけ、そこから見渡せるジェノバの街は真っ赤に染まっていた。
潮風が吹き抜けていく中、ハンティスは彼女に告げる。
「グレンカ教官から聞いたよ。いや、聞きました」
急に敬うような口調に変わったせいで、彼女は訝しげに眉をひそめた。
「レミア＝カルローナ＝レイマール殿下。あなたが第三皇女であることを」
「っ……」
「勿論、誰にも話さないと約束します。……事情も理解しましたし」
皇女はしばし呆気にとられたように目を丸くしていたが、やがてどこか自嘲気味に笑声を漏らした。
「やめてくれ。今のぼくは、あくまでもこの学院の生徒なのだ」
「……そうですか」
「できれば、敬語もやめてくれると助かるが……」
「わ、分かった」
ハンティスは頷くが、相手が皇族と分かった今となっては、何とも言えない違和感があった。
とは言え、正直なところ、皇族に対して失礼のない言動などできる気がしないので、ありがたくもある。

「……それと、これもグレンカ教官から訊いたんだが……お前は、兄貴を探しているんだってな?」
ハンティスがそう切り出した途端、レミアは目の色を変えた。
「もしかして、レイオス兄様のことを知っているのかっ?」
その前のめりな反応だけでも、彼女にとって彼がどれだけ大切な人であり、どれだけ慕っていたのかが分かった。
「……残念だが、俺は知らない」
ハンティスは心苦しさを抑え込みながら、そう断言する。
「そうか……」
レミアは肩を落とし、がっかりした様子だった。
「……ごめんな」
「いや、こちらこそすまない。レイオス兄様のこととなると、どうもぼくは我を忘れてしまうようなのだ」
「……」
照れたように頬を染めるレミアに、ハンティスは後ろめたさを覚え、何と言ったらよいか分からず口を噤んでしまう。
そして沈黙に耐え切れず、ハンティスは再び口を開いた。
「……その、教えてくれないか? お前の兄貴のことを」
「え?」
「いや……皇族の話なんて、その、あまり聞く機会がないからさ……あ、無理ならいいんだけど……」
「も、もちろん、大歓迎だ!」
こちらの不躾な提案に、レミアは大袈裟なほどに喜びを露わにした。
それから彼女は、とても嬉しそうに兄のことを語って聞かせてくれた。
「レイオス兄様は幼い頃からすでにその才能の片鱗を見せていたのだ! 僅か五歳の時に聖典を暗唱してしまったばかりか、十歳の頃にはもう司祭様ですら舌を巻くほどの説教を披露していた!」
それはハンティスが今まで一度も聞いたことのなかった、リースの昔の話だった。
「それだけではないぞ! 剣の腕は師範がいつも絶賛していたし、紋章術だって兄弟の中で群を抜いていたのだ!」
ハンティスは熱心に聞き入っていた。それに気を良くしたのか、レミアはますます饒舌になっていく。

しかしもう、彼女がリースに会うことはできないのだ。
ふとそう思ったとき、ハンティスの心の中で罪悪感が急速に膨れ上がる。
(リース……教えてくれよ。俺は一体、彼女のためにどうしてあげたらいいんだ……?)
気づけば太陽は完全に水平線の向こうに沈み、辺りは暗闇に包まれていた。

「驚いたことに、リースとまったく同じ名前の方がいらっしゃったのですわ」
「本当に?」
「しかも、ちょっと、にている」
レミアと別れた後、ハンティスは宿舎のロビーで、元第00部隊のメンバーたちと話をしていた。アルレナから「ぜひお伝えしたいことがある」と呼び出されたのである。
「もしかすると同郷のご出身なのかもしれませんわね。この広い帝国内には、子供の多くが同じ名前を付けられる地域もあるそうですし」
(まぁ、当然、気になるよな……)
ハンティスは内心で苦笑するが、グレンカに口止めされているため、真実を伝える訳にはいかなかった。
もし彼女たちとレミアが接触してしまえば、かつて彼女の兄がマーテリア騎士学院にいたこと、そして殉職してしまったことを知ってしまう可能性が高い。
そのためグレンカは、残る期間はレミアを合同訓練に参加させないという方針を固めていた。すでにレミアも説得済みだそうだ。幸いなことに棟が違うため、宿舎内で遭遇する可能性は低いという。
そんなことを考えてると、サヤが怪訝そうに、
「どうしたの、ハンティス? さっきからずっと黙っているけど」
「……実は俺、すでに本人と話をしたんだよ」
「いつの間に?」
「いや、ちょっと、色々あって……。で、そのときに聞いてみたんだけど、北の田舎の方だと結構よくある名前なんだってさ」

ハンティスは咄嗟に嘘をついていた。
「あら、やはりそうでしたの」
「それにしても……」
不意にアルレナが眉間に皺を寄せ、何かを思い出そうとするように首を傾けた。
「リース＝リガルジェント……そう言えば、前々からどこかで同じ名前を聞いたことがある気がしていたのですわ」
「本当？」
「ええ……ですが、ごめんなさい。どこだったか、ちょっと思い出せませんわ」

机の上には一冊の本が置かれていた。
装丁こそ立派ではあるが、表紙の所々は擦り切れ、すでに題名は読み取ることができないほど年季が入っている。
古びたその本の上に手を添えて、レミアは小さく呟く。
「レイオス兄様……」
それは兄が好きだった本だった。
吟遊詩人によって伝わったとされる、とある異国の英雄譚。
それゆえ帝国で知る者はほとんどいない。
だが幾多の逆境を乗り越え、最後には斜陽の大国をも救ってしまうその物語を、兄は何よりも好んだのだ。
その英雄の名前こそが、リース＝リガルジェント。
さすがに皇女の名前で騎士学院に入学する訳にはいかない。だから偽名を考えたときに、咄嗟に頭に浮かんだのがそれだったのだ。
もし聖騎武祭に出場し、自分がこの名前で活躍すれば、この国のどこかにいるだろう兄に伝わるかもしれない。
そんな思惑もあった。
そうすれば、きっと――
「優勝とまではいかなくとも、できる限り勝ち上がってみせる」
そう自分に言い聞かせ、レミアは拳を固く握るのだった。

宿舎で朝食を終えたハンティスたちは、二日目の合同訓練に参加するため騎士学院へと向かっていた。
「ねぇねぇ、サヤちゃん。あそこ、何してるのかな？」
「……祭りの準備じゃないかしら。それと、ちゃん付けはやめてってば」
相変わらずのミィナに、サヤがじっとりとした半眼を向けて嘆息する。
ミィナが指差すのは、運河にボートを浮かべ、何やら忙しなく作業に没頭している人々だ。
ジェノバの都市には幾つもの運河が網の目のように張り巡らされているが、どうやら彼らはその運河の水面にランタンを等間隔に浮かべているようだった。
「お祭り？」
「ジェノバでは毎年、この時期に今年一年の豊漁を祝う祭りが開催されているのです。夜になるとあのランタンに光が灯って、高台から見ると運河が光っているように見えるそうです」
首を傾げるミィナに、シスリーネが応える。
「恋人と一緒やったら、ロマンチックやろなぁ……。よし、決めたで！　わいは祭りの日までにこの都市で恋人を――」
「無理ですね」「無理ね」「無理だよ！」
「わいにも少しくらい夢を見させてくれたってええやん!?」
そんな他愛もない会話をハンティスが適当に聞き流していると、マロンが恐る恐る声をかけてきた。
「せ、せんぱい……」
「……ん？」
考え事をしていたハンティスは、上の空で応じる。
「あ、あの……い、一緒に、お祭りを見にいきませんか……？」
「祭り？　……ああ、いいけど」
「ほ、ほんとですか？　あ、ありがとうございます……っ！」
嬉しそうに破顔するマロンの様子を後目に、ハンティスはずっとレミアのことを考えていた。

（……本当にこれでいいのか？）
彼女に真実を黙っていることに、どうにも嫌な予感が拭えないのだ。
だがレミアのことを一番よく知っているのはグレンカだ。彼女があぁ言っている以上、ハンティスとしてはそれを信頼するしかなかった。
そうこうしていると騎士学院に到着する。
ベルガリアとグレンカのやり取りが聞こえてきた。
「何だ、あの女みてぇな顔した奴、今日は休みか？」
「……申し訳ありません、ベルガリア教官。少し体調が思わしくないようでして」
「そうか。まぁ仕方ねぇな。本番で崩されるよりはまだマシだ」
レミアが不参加なため、またしても聖騎武祭に出場する部隊の数が奇数になってしまう。今日はハンティスたち第２９部隊がそちらに加わることとなった。

やがて二日目の訓練も終わり、ハンティスは宿舎へと戻ってきていた。
食堂で夕食を済ませて自室に戻ろうとしたところで、ふと近くからどこかで聞いたことのある声を耳が拾った。
「おい、あいつ今日の訓練、休んでやがったみてぇだぜ」
「ほんとか？　確か昨日は遅刻だっただろ？」
「ああ。……くそ、俺たちからレギュラーの座を奪いやがったくせに」
「それより、どうすんだよ？　明日に延期か？」
宿舎に設けられた歓談用のスペース。
そこでひそひそと話をしていたのは、テンプス騎士学院の補欠部隊、第１１小隊の生徒たちだった。
（……話題に上っているのは、レミアのことか？）
どこか不穏な空気を感じ取り、ハンティスは柱の陰に隠れて聞き耳を立てた。
「いや、どういう訳か知らねぇが、いつも通りの時間に自主トレに出て行ったぜ」
「じゃあ何で訓練を休んだんだ？」
「知るか、俺に訊くんじゃねぇよ」
「んなこと、どうでもいいじゃん。つまり、作戦通りでオッケーってわけ？」
「そうだな。おっと、そろそろ行かねぇと」
そうして、彼らは連れ立って宿舎二階に設けられた非常口から出ていく。
（……あいつら……）
胸にざわつきを覚えて、ハンティスは秘かに彼らの後を追跡した。

レミアは夜の浜辺を走っていた。
日課としている自主トレーニングである。

旧埠頭からほど近い場所にある砂浜。
傍を表参道が通っており、当然ながらそちらの方が整備された道だが、レミアはあえて足にかかる負担が大きい砂の上を走っていた。単に持久力を高めるだけでなく、足の筋力を鍛えるという目的があるからだ。
（ぼくはもっと強くなってみせる……っ！）
その想いが彼女を突き動かしていた。呼吸が荒くなり、次第に苦しくなってくるが、それでも懸命に前へと走る。
初日でいきなり遅刻してしまったものの、今回の合同訓練はレミア自身、かなり楽しみにしていた。
特に個人戦、部隊戦ともに優勝候補にも挙げられているマーテリア騎士学院を相手に、試合形式の戦いでどこまでやれるのか試してみたかったのだ。
だがどういう訳か、グレンカから「待った」が掛かった。
（本番で強敵になるマーテリアには、なるべく手の内が割れるのを避けたいというグレンカの言い分は分からないでもないが……）
正直、腑に落ちなかった。
ソロ部隊であるレミアは、どうしてもその戦術の幅が絞られてしまう。そのため対策を立てられると弱い部分があるのは確かだが、レミアとしてはやはり少しでも多くの実践を踏むことの方がより重要だと思えるのだった。
（個人部門に出場できればよかったのだが……）

残念なことに、そちらは選抜戦に参加するためには諸々の条件があり、それを満たすことができなかったため土俵にすら上がれなかったのである。
そのときどこからか悲鳴が聞こえてきて、レミアは咄嗟に足を止めた。
「……っ？　何だ？」
耳を澄ませる。波の音に混じって、再び悲鳴。声の高さから判断するに、恐らくは女性のものだ。
「こっちか！」
レミアは砂を跳ね上げ、踵を返していた。
正義感に突き動かされて砂浜を一目散に駆け抜けると、辿り着いたのは旧埠頭にある小さな倉庫だった。
中から声が漏れ聞こえてくる。男たちの蛮声に交じって、女性の呻き声。
「貴様ら何をしている！」
倉庫の重たい扉を開け放ち、レミアは怒声を轟かせた。それほど広くない倉庫内に、それがわんわんと反響した。
中はほとんど真っ暗だった。
レミアは第一階位紋章術の〈光球〉を発動すると、暗闇を照らしながら奥へと進んだ。狭い倉庫内は大量のコンテナで埋め尽くされている。
不思議なことに、先ほどまでの音は消え去り、倉庫の中は静寂に包まれていた。レミアの足音だけが不気味に響く。
突然、背後の扉が閉まった。
「っ⁉」
狼狽えるレミアが聞き取ったのは、男女の笑い声だった。
「あはははっ、マジでこんな方法で引っかかりやがったぜこいつ」
「だから言ったじゃん。絶対上手くいくってさ」
「ちょろいなぁ、おい」
コンテナの背後から出てきた彼らに、レミアは見覚えがあった。
テンプス騎士学院の生徒――第11小隊の面々だ。
「貴様ら、先ほどの女性の悲鳴は何だ⁉　ここで何をしていた⁉」

レミアは鋭い口調で問い詰めたが、彼らはケタケタと笑声を上げるだけだ。そして倉庫内に彼ら以外の誰かがいる気配はない。
「どういうことだ……？」
女性が男に暴行されていると予測していたレミアは困惑し、眉をひそめた。
「てめぇに話があるんだよ」
そのとき短髪の少年――ツェリという名前を、レミアは記憶から掘り起こす――が、前に出てきた。彼が第11小隊の隊長だったはずだ。
レミアはそこでようやく理解した。
（まさか、ぼくは誘き出されたのか？）
こちらの鈍さを冷笑するようにツェリは口端を歪めると、命令口調で告げたのだった。
「単刀直入に言うぜ。てめぇ、出場を辞退しろ」
「っ⁉」
レミアは耳を疑った。
一体どういうつもりかと訝しがりながらも、ほとんど反射的に即答していた。
「……断る。ぼくは聖騎武祭に出場しなければならないのだ」
その返答に、ツェリは鼻白んだようだった。
「おいおい、まだ状況が分かってねぇようだな」
ツェリが合図をすると、彼らは一斉に紋章武装を顕現させた。
「……脅しのつもりか？」
レミアは奥歯を強く噛み、彼らを睨みつけた。
「ああそうだ。もしてめぇがこっちの要求を呑まないってんなら、俺らは強硬手段に出るしかねぇ」
ツェリはいけしゃあしゃあと断言する。レミアは頭に血が上っていくのを感じた。
「ふざけるな！　ぼくには貴様らの要求に応える義理などない！」
こちらの怒鳴り声に、しかしツェリが怯む様子はなかった。
「……てめぇのせいで、俺たちは聖騎武祭への出場を逃したんだよ」

「っ……」

呪詛めいたその言葉に、レミアは思わず息を呑んだ。選抜戦の最終戦。彼女が聖騎武祭の出場権を勝ち取った相手は、彼ら第11小隊だったのである。

「ずっと……ずっと俺たちはそのために頑張ってきたってのによ。指導教官も俺たちなら今年は間違いなく出場権を勝ち取れるって、太鼓判を押してくれていたほどだったんだ。なのに、てめぇがしゃしゃり出てきやがったせいで、俺たちは今や惨めな敗残兵じゃねぇか」

ツェリは次第に口調を荒らげ、恨み節を吐き出していく。

「聖騎武祭に出場できることが、これからのキャリアにどれだけ重要なことか！　一年のてめぇと違って、俺たちには今回が最後のチャンスだったんだよ！」

最初から届かないものだったなら、すんなりと諦めがついたのかもしれない。

だが、それはあと一歩というところで逃してしまった成功への道だった。

だからこそ彼は、未だにその現実を受け止めることができていないのだろう。

無論、だからと言ってそんな主張を受け入れられるはずがない。

「それは選抜戦で敗北した貴様らが悪いのだろう！　ぼくにだって、出場しなければならない理由があるのだ！」

レミアは負けじと声を張り上げる。

「貴様ら、こんなことをしてまで聖騎武祭に出場したいというのか！」

そのとき、第11小隊の少女――セリーナという名前だ――がこちらを嘲笑うように告げた。

「こんなことしてまで？　それを言うならさ、性別を偽っているあんただってダメじゃん？」

「……っ！」

心臓が跳ねた。

一瞬にして喉が渇き、背筋を冷や汗が流れる。

「……何の話だ？　ぼくは男だ」

だがレミアは動揺を隠し、白を切った。

「ま、簡単には認めないだろうとは思っていたけどねー。けど、あたし見ちゃったんだ。あんたが着替えているとこ。意外とあるじゃん？　普段それどうやって押さえてんの？」

セリーナがニヤニヤと意地悪く口端を吊り上げる。

（まさか、見られていたのかっ……？）

レミアは内心で歯噛みした。

だが、単に〝見た〟というだけでは自分が女である証明にはならないはずだ。

たとえ彼らが学院側に訴え出たとしても、はっきりとした証拠がなければグレンカが上手く揉み消してくれるだろう。彼女は由緒ある貴族の家柄で、学院内でも強い影響力を持っているのだ。何よりそれが分かっているから、彼らはこんな手段を選んだのだろう。

「何を言っているか分からないな。貴様が見間違えただけではないか？」

グレンカに頼らざるを得ないのは本望ではないし、また酷く叱られることになるのかと思うと憂鬱だが、レミアは押し隠すことにした。

「本当に女じゃねぇってのなら――」

ツェリが再び口を開く。

「――今ここで確認させろ」

「な、なんだと……っ!?」

ツェリは隣にいた少年に目配せする。

その少年は頷くと、コンテナの上に置いてあった何かを持ち上げた。

四角い箱だった。人の頭部ほどの大きさがある。

「まさか、投影機……？」

それは光章霊を利用することで、目の前の光景を紙に焼きつける道具だった。

まだ一部の貴族たちの間でしか使われていない高価なもので、レミアですらかつて皇宮で一度だけ見たことがある程度だ。

セリーナがこちらを指差して嘲るように言う。

「これであんたの裸を撮影すんの。そうすればもう言い逃れはできないっしょ？」

「っ……」

彼らの剥き出しの嫉妬と憎悪、そして他人を蹴落とすためには手段を選ばないその悍ましい思考に、レミアは

怖気を覚えた。

「馬鹿なことを……っ！　恥を知れ、この痴れ者がっ！」

怒号を響かせながら、レミアは皇宮に巣くう腐敗した貴族たちのことを思い出していた。

彼らは自らの地位や名誉、そして利権のためならば、どんな汚いことにでも手を染めた。謀略を駆使し、時には暗殺によって邪魔者を消す。

皇子たちの皇位継承権争いを過熱させているのは、まさしく彼らの醜い欲望だった。

（そうか、こいつらもあの連中と同じなのだな……）

そう思うと、ふつふつと身体中からさらなる怒りが湧き上がってきた。

「やるぞ、てめぇら」

ツェリの乱暴な合図を皮切りに、彼らが動いた。

六対一。

だが先日の選抜戦で、レミアは彼らを圧倒している。数の不利など問題ではない。

レミアはその手に己の紋章武装《暁ノ明星》を出現させた。光章霊によって生み出したそれは、銃としても剣としても使用できる銃剣型だ。

後衛二人を残し、四人が一斉に躍りかかってくる。

「っ！」

その瞬間になって、レミアはようやく己が置かれた状況の深刻さを悟った。

（ここまで接近されると銃を使えない……っ！）

レミアの最大の武器は精密かつ素早い連続射撃だ。

先日の選抜戦、レミアは開始早々その己の特技を生かし、相手を遠距離から狙撃するという戦法を取った。広いフィールドを生かして距離を取りながら、詠唱する隙も、近づく暇も与えずに次々と敵を撃破していった。

最後は残った一人に接近戦へと持ち込まれたが、一対一でレミアは相手を圧倒した。結果、ものの数分で決着がついてしまったのだ。

だが今はすでに四人に近接武器が届く間合いにまで攻め込まれてしまっている。

「くっ……」

剣の腕前にも自信があり、テンプス騎士学院の中では二年生を含めても上位に食い込む力があった。一対一であれば、よほどの相手ではない限り、選抜戦でそうだったように優位に立てるだろう。だが、

（四人同時だと捌き切れない！）

完全な劣勢に立たされていた。

包囲されている上に、積まれたコンテナのせいで逃げ場がない。恐らく相手はそれを見抜いた上で、この狭い倉庫へと誘き寄せたのだろう。

その時点で相手の巣穴に飛び込んでしまったようなものだったのだ。

「はっ、どうしたよ⁉　やっぱり聖騎武祭に出場するのは、俺たちの部隊が相応しいみてぇだな！」

こちらの焦りを見て取り、ツェリが挑発してくる。

（っ……息が……）

しかも砂浜を走っている最中だったせいで、すでに体力を消耗していた。疲労した足の動きが嫌になるほど遅い。

「出場を辞退すると約束するんなら許してやるぜ？」

「そんなことはしない！　貴様らなどに、ぼくは負けない！」

ツェリの提案を強気に一蹴するが、レミアは右腿に鋭い痛みを感じて顔を歪めた。

槍の切っ先に右腿を斬り裂かれていた。血飛沫が舞い、倉庫の床に黒い斑点が散る。

よろめくレミア。彼らはその隙を見逃さなかった。

「おらっ！」

「しまっ――」

ツェリが振るった剣に、銃剣を弾かれてしまう。

即座に再顕現させようとするが、背後から体当たりを受け、レミアは前のめりに地面に倒れ込んだ。

すぐに起き上がろうとするも、背中に飛び乗られ、「がはっ」と口から苦鳴が漏れる。

「離せ！　くそっ！　――あああっ⁉」

全身を激しい痛みが駆け巡った。

（い、いまのは……）

電撃を浴びせられたと分かったのは、嗜虐的な笑みを浮かべてこちらを見下ろしているセリーナが、雷系の紋章

術を得意としていたことを思い出したからだ。
「……く……」
手足が麻痺し、力が出なかった。そのまま仰向けにされると、鉄系の紋章術で生み出された枷によって手足を拘束されてしまう。
「おい、貸せ。俺が撮る」
ツェリは仲間から投影機を奪い取ると、身動きを封じられたレミアの前でそれを構えた。
「それじゃ、ストリップタイムといこうじゃん」
セリーナがおどけたように言いながら、レミアのズボンに手をかける。
屈辱だった。
だがそれ以上に恥辱心がレミアの心を支配し、気づけば自分でも情けなくなるような声で必死に懇願していた。
「や、やめろ！　やめてくれっ！　お願いだから！」
「だったら今ここで出場を取りやめると約束しろ」
そのツェリの言葉は、事ここに至ってレミアには救いにすら思えた。
約束するしかない。
「ぼ、ぼくは――」
レミアが涙を呑んで言いかけたとき、
「でもさ、ここで約束したって、後から破る可能性もあるじゃん？」
セリーナが相変わらず唇に嗜虐的な笑みを湛えたまま、そんなことを言った。
「ここで出場を取りやめるとか言っておいて、後でこのこと教官にチクるかもよ。だからちゃんと写しといた方が絶対いいって。ゆするための手札にもなるしねー」
「な……なに、を……」
心臓が凍りつくような心地がした。
「確かに、セリーナの言う通りだな」
ツェリが頷く。
「まぁ、もし本当に男だったりしたら、あたしらマジで退学もんだけどねー」

「い、嫌なこと言うんじゃねぇよ」
「けど、たぶん大丈夫そうじゃん？」
こちらの恐怖に引き攣った顔を見て、セリーナはこちらが女であるということに確信を持っているのだろう。
「や、やめ……やめてくれ……」
レミアはもはや呻くように嘆願することしかできなかった。
セリーナがズボンを掴む手に力を込める。
ごくり、とツェリが唾液を嚥下する音が聞こえてきた。
「え？　あんたなに緊張してんの？　まさか女のアレ見るの初めて？」
「う、うっせぇよ！」
セリーナに小馬鹿にされ、ツェリが声を荒らげる。
「じゃ～、今度こそいくねぇ～」
腹立たしいほど暢気な口調で宣言するセリーナ。
（た、助けてくれっ……レイオス兄様……っ！）
レミアは思わず心の中で叫んでいた。だが無情にも、セリーナの手がレミアのズボンをずり下ろしていく。
「がっ⁉」
悲鳴が上がったのはそのときだった。
何事かと目を瞠るレミア。
後衛の少年が一人、木造のコンテナを破壊して内部に頭部を突っ込んでいた。
「何だてめぇ！」
いきなり乱入してきたその人物に、ツェリが鋭い罵声をぶつける。
（兄、様……？）
まさか本当に兄が助けに来てくれたのか。
だが視線を転じたレミアが見たのは、紅い髪の少年だった。
マーテリア騎士学院に所属する彼の名前は確か、ハンティス＝ハーミリオン。今回の合同訓練には、補欠として参加しているとレミアは聞いていた。

「……お前ら何しているんだ、こんなところで」
ツェリの恫喝に動じる様子もなく、彼は押し殺した声で問う。
「こ、こいつ、マーテリア騎士学院のやつだぜ？」
「くそっ、何でここに……」
ツェリを初めとする第１１小隊のメンバーたちは、突然の予期せぬ闖入者に狼狽えた。
セリーナが苛立ったような視線を向ける。
「あんたこいつの何なの？　部外者には関係ないでしょ？」
「……関係ないだと？」
彼は眉をしかめ、ピンク色の髪の少女を睨みつけた。
「馬鹿を言え。こんなことやっている奴らを見過ごせるわけないだろ。早く彼を解放しろ」
「ちっ、マジ面倒なやつ」
セリーナが舌打ちし、それから仲間たちに訊いた。
「こんなところ見られちゃって、このまだとあたしらマジでヤバくない？　ねぇ、どうすんの？」
「どうするって……」
戸惑うツェリたちに、セリーナはまたあの嗜虐的な笑みを浮かべて、とんでもないことを口にした。
「んなの、簡単じゃん。二人とも殺っちゃえばいい」
「な……」
さすがに彼女のその発言にはツェリたちも言葉を失ったようだった。しかしセリーナは畳みかけるように主張する。
「わざわざ女であることを確かめて脅すとかさー、正直、回りくどいって思ってたんだよねー。それより、消してしまう方がずっと楽じゃん？　どうせこの時間にこんなところに来るやつなんていないし。海に沈めちゃえばバレやしないって。行方不明でお終い」
「……け、けどセリーナ……それはさすがに……」
「あーもう、迷ってる暇なんてないっての、ほら早くしてよ！　ぐずぐずすんな！」
最後はヒステリックに捲し立てられ、ツェリたちも覚悟を決めたようだった。

紋章武装を構え、第１１小隊はハンティスを包囲した。
「……とことん下衆だな、お前ら」
「うるせぇよ。それより自分の心配をしたらどうだ？　考えてみたら昨日の練習試合、てめぇは隊長のくせに大したことなかったよな。英雄気取りか知らねぇが、たった一人で来たことを後悔させてやるよ」
「に、逃げろっ……っ！」
レミアは思わず叫んでいた。彼の実力は知らないが、ツェリの言う通りであれば、この数を相手取るのは難しいだろう。
（ぼくのせいでっ……彼まで巻き込んでしまって……っ！）
しかしこちらの不安とは裏腹に、彼は平然と言った。
「安心しろ。俺はこんな奴らに負けはしない。……筋肉痛もだいぶマシになってきたしな」
「てめぇ、なに余裕ぶってやがんだよ！」
ツェリが怒鳴り声を上げる。だがハンティスは顔色一つ変えることなく、
「〈発火（ファイアリング）〉」
そう小さな声で呟いた次の瞬間、ツェリのすぐ隣にいた少年の身体が燃え上がっていた。
「ぎゃああっ……」
絶叫が狭い倉庫内に反響する。少年は火を消そうと、ごろごろと床を転げ回った。
レミアは愕然とする。
（い、今のはただの〈発火（ファイアリング）〉……？　だが第一階位で、あれだけの炎を生み出すなんて……？）
「くそがっ！」
仲間を放置し、ツェリを含む三人が一斉に躍りかかった。
左右と背後から同時、三つの斬撃がハンティスに迫る。
回避不可能な、本気で命を刈り取らんとするその攻撃に、しかしハンティスはやはり余裕を崩さなかった。
「こい、《獄炎剣（パーガトリー）》」
またも小さな呟きを零したかと思うと、身体を捻って回転を加えつつ、その腕を大きく横に薙いだ。
赤い斬閃が美しい弧を描いた。

パリィィィン、という破砕音が連響し、その場にいた誰もが慄然とする。
三人の紋章武装が、たったの一振りで破壊されてしまったのだ。
呆然と立ち竦む彼らに、ハンティスは息一つ乱さずに問う。
「おい。まだやるつもりか？」
「こ、こいつなら防げないでしょ！　——唸れ、天の怒り。轟け、空の猛り。そして穿つは、大地の過ち」
後衛のセリーナがいつになく焦燥した声で叫び、雷系第三階位紋章術〈迅雷〉を発動した。
雷鳴が轟き、激しい雷撃が宙を走った。
だがそれはハンティスの背後にあるコンテナに直撃し、木製のそれが黒焦げになるだけに終わってしまう。
「うそ……剣で反らした……？」
唖然とするセリーナに、雷撃を剣の腹で容易く受け流してしまったハンティスは、さも当然のように告げた。
「お前、発動のときに狙ってる場所を凝視し過ぎなんだよ。まぁ、熟練者でもよくやる癖だけどな」
「なっ……」
上から目線で指摘され、プライドの高いセリーナは忌々しげに顔を歪める。だが、さすがの彼女も何も言い返せないようだった。
「もう分かっただろ。言っておくけど、今までのはほんの挨拶代わりだぞ？」
ハンティスは溜息交じりに言い、そして、
「——俺をこれ以上、怒らせるんじゃねぇよ」
突然、声色と口調が変わった。
「ひぃっ」
倉庫内に暴風が吹き荒れたと錯覚してしまうほどの、凄まじい威圧だった。
強烈な覇気に貫かれ、第11小隊の全員が完全に戦意を失ってへなへなと腰を折った。
——それで決着だった。
「大丈夫か？」
不意に声をかけられて、レミアはハッとした。いつの間にか手足を拘束していた枷が外れている。彼が破壊してくれたようだ。

「あ、ああ……」
と曖昧に答えたところで、途中までズボンを下ろされて下着が半分見えていることに気づき、レミアは慌てて引き上げた。
幸い、すでに電流による身体の痺れはほとんど残っていない。
だが立ち上がろうとすると、腰が抜けてしまったらしく、力が入らなかった。
「っ……」
「おっと」
倒れそうになり、抱き止められた。
「無理するなよ」
「……あ、う、うん……」
レミアは自分の頬が熱くなっていることを認識して、慌てて顔を俯けた。
「それより悪かったな。こいつらを途中で見失ってしまって、探すのに時間がかかったんだ。本当ならもっと早く助けにこれたはずなんだけど」
そう言われて初めて気づいたが、よく見ると彼はかなり汗を掻いていた。今の攻防でこんなに汗だくになることはあり得ないので、相当走り回っていたのだろう。
兄のように強くなりたい。
そう願ってこの学院に来たというのに、今日のこの失態だ。レミアは自分のことが情けなくて、悔しさが込み上げてくる。
だが、
（ぼくのために、こんなに必死になってくれたのか……）
なぜだか悔しさ以上に、不思議なくらい胸が高鳴っていた。

「ふぅ……どうにかバレずに済んでよかった……」
宿舎の自室に戻ってきたレミアは、疲労の滲む息を吐きながらベッドに倒れ込んだ。

あの後、第11小隊は自分たちが仕出かしたことを教官たちに白状した。驚くほど従順に事情聴取に応じてくれたのは、彼がよほど怖かったせいだろう。

さらにグレンカのフォローもあって、皇女であるという正体はもちろんのこと、性別についても無事に隠し通すことができたのだった。

レミアは枕に顔を埋めながら、あのときのことを思い出す。

——俺をこれ以上、怒らせるんじゃねぇよ。

——大丈夫か？

——無理するなよ。

「あああああああっ！」

レミアは顔を真っ赤にして、思わず喉の奥底から絶叫していた。

「ど、ど、どうしてぼくは、あいつのことばかり考えているのだ⁉」

身体は疲れているはずなのに、なぜか興奮して目が冴えてしまっている。あの赤い髪の少年のことが何度も脳裏を過るのだ。

……ちなみに彼女の頭の中では、少年の顔と声が三割増しほど美化されている。

「ぼ、ぼくは……おかしくなってしまったのだろうか……」

ぼそりと呟いてから、レミアは首を振った。

「……いや」

考えてみれば、絶体絶命のピンチを助けてもらった相手なのである。

感謝しているし、あの第11小隊を歯牙にもかけなかった強さに尊敬の念を抱いてしまうのは、決しておかしなことではない。

「そうだ、そうだな。きっと、それが原因だ。うん」

それに——

彼とは一昨日の夜に初めて会ったばかりだというのに、なぜだか懐かしさを覚えてしまうのだった。

「レイオス兄様に、似ている気がするのだ」

そう言葉にすると、ますますそんなふうに思えてくる。

「……見た目や性格は全然、違うというのに……」

そこでふと、思い立ったことがあった。

そうなると居ても立っても居られなくなってしまう。

レミアは覚悟を決めたように息を吐くと、ベッドから起き上がって部屋を出た。

宿舎に戻ってきたハンティスは、食堂で少し遅い晩飯を取っていた。

騎士学院の生徒の数は少なく、年齢層が高い。その大半は残業などがあった騎士団の人たちだと思われる。

あれからテンプス騎士学院に行き、第11小隊を突き出した。

グレンカ教官もいたので後は彼女に任せることにしたが、きっと上手くやってくれていることだろう。

第11小隊には厳しい処分が下されるに違いない。補欠登録も抹消されるはずだ。もしかすると卒業後の騎士団への入隊も難しくなるかもしれなかった。

「ま、自業自得だけどな。……にしても、どこの学院にも同じような奴がいるんだな、ほんと」

ハンティスは嘆息を零す。以前、盗賊団に扮した部隊に襲われたことを思い出してしまったのだった。

それから食事を終え、部屋に戻ろうとしたハンティスだったが、ふと背後に気配を感じて後ろを振り返った。

「っ……」

さっと柱の陰に隠れる怪しい人影。

しかし後ろ髪の一部が少し見えていて、誰だかすぐに分かった。

「何やってんだ？」

「あ、う……」

声をかけると、何ともバツが悪そうに柱から出てきた。

予想通りレミアだった。どうやら事情聴取が終わり、彼女も帰ってきたようだ。

「大丈夫だったか？」

「えっと、その……」

彼女はわたわたと顔の前で手を動かし、それから「う、うん……」と頬を赤く染めて頷いた。

ここだとリースのことを知る者に遭遇してしまう可能性もある。ハンティスはとりあえず彼女の部屋のある棟へと移動することにした。

歓談用のスペース。周囲に誰の気配もないことを確認してから、彼女は口を開いた。

「き、貴様のお陰だっ。……その……た、助けてくれて……か、感謝しているぞ」

礼を言うのが気恥ずかしいのか、こちらとは視線を合わせない。

(……あれくらいじゃ償いにもならないんだけどな)

一方でハンティスはそんな後ろめたい想いに捉われていた。

それに、かつて自分は彼女の兄からどれだけ助けてもらったことか。

「もし何か困ったことがあれば、いつでも言ってくれ。できる限り力になるから」

今できることはただそれくらいのことしかない。

そう思って提案したのだったが、レミアは驚いたように目を見開いた。

(……あ、ちょっと不自然だったか?)

彼女から見れば、赤の他人がいきなり自分に優しくしてくれているのだから、不審に思われても当然のことかもしれなかった。

だが彼女はしばしば口をぱくぱくさせていたが、やがて意を決したように、

「そ、それなら、その……お、お願いがあるのだ」

「……?」

「ぼ、ぼくを、鍛えてくれないか?」

早朝。東の空がようやく白み始めてきた頃。

ハンティスはレミアとともに、人気のない旧埠頭を訪れていた。

長い年月にわたって波に晒された岸壁は所々が崩れ、大量のフジツボに侵食されている。近く整理されるようで、現在は封鎖されている場所だった。

「こ、こんな時間にすまない。貴様には今日も合同訓練があるというのに……」

「いや、気にしなくていいって。どうせ俺の部隊は補欠だし、気楽なもんだよ」

申し訳なさそうに言う彼女に、ハンティスは苦笑を返す。

「それにキルクルスにいるときは俺も毎朝やってたから、この時間に起きるのは慣れているんだよ」

昨晩、彼女から頼まれたのは、早朝の訓練に付き合ってほしいということだった。

それをハンティスは二つ返事で引き受け、こうしてまだ街が寝静まっている時間に出てきたのである。さすがに漁師たちの朝はもっと早く、すでに漁に出ているようだが。

「ぼくも合同訓練に参加したかったのだが……なぜかグレンカから止められてしまったのだ。だから、少しでもその分を補いたいのだ」

レミアは何とも残念そうに嘆息する。

その事情を知っているハンティスは、少し反応に困りつつ、

「それで、どんなふうにやればいいんだ?」

訊くと、彼女は紋章武装を顕現させた。

リースと同じ銃剣型、それも光章霊の紋章武装だった。

「ぼくは昨晩の一件を通して、今まで自分がかなり射撃に依存していたのだと悟った。だからぜひ剣の指導をお願いしたいのだ」

「分かった。じゃあ、まずお前の現状を把握しておきたいし、とりあえず実戦形式でやってみようか?」

「頼む」

レミアはこくりと頷き、ゆっくりと構えた。

応じて、ハンティスもまた《獄炎剣》を手にして構える。

レミアが地面を蹴った。

一気に間合いを詰めてきた彼女は気迫の一声で早朝の空気を震わせながら、上段から鋭い斬撃を放ってくる。

それをハンティスは《獄炎剣》で受け止め、いなす。

綺麗に斬撃を流されたレミアだが、そこから即座に刃を返した。二撃目が迫る。

ハンティスは上半身の動きだけでそれを避け、後方へ飛んだ。

レミアはすぐにまた距離を詰めてきた。

横薙ぎの一撃から袈裟斬り、逆袈裟、上段斬りと次々と流れるように剣を振るうレミア。
それらをハンティスは的確に捌き、躱していく。
「ぜ、ぜんぜん当たらないっ！」
「いや、悪くはないぞ」
「だが貴様、手を抜いているだろうっ？」
大抵の場合、数度剣を打ち合わせただけで相手の実力はほぼ分かる。
彼女の剣術は、騎士学院の中でもかなり高いレベルに達しているだろう。
ほとんど無駄のない、まるで教本のような流麗な動き。力強さには欠けているが、それでも斬撃は鋭くて剣速もなかなかのものだ。
だが、
（お手本通り過ぎるんだよな……）
似ているとすれば、ミィナだろう。彼女の場合、何も考えていないせいだったが、レミアはその真面目な性格のせいか基本に忠実過ぎるため、やはり攻撃が単調なのだ。
そこでハンティスは攻めに転じてみることにした。
下段から斬り上げる初動を見せておいて、急停止。
「っ⁉」
こちらのフェイントに見事に引っかかった彼女は、予想に反して放たれたこちらの刺突に対応できなかった。ハンティスが剣速を落としていたお陰で、頬を掠めるだけで済む。
さらにハンティスは、あえて相手の予測を裏切るような斬撃を繰り出していった。
時には拳や蹴りを交ぜてみたり、突きを放つと見せかけてそのままタックルしてみたり。
レミアはその型破りな攻撃に苦戦し、なかなか対応しきれない。
「ひ、卑怯だぞ！」
「いや、これくらいのことは普通だって。ルールで禁止されている訳じゃないんだから、もっとセコイ手を使ってくる相手は幾らでもいるぞ」
「うっ……」

こちらの指摘に、レミアは引き攣ったように喉を鳴らした。
「それと攻撃を受けるときに、ちょっと上半身に頼り過ぎだ。もっと全身を使って対処しろ」
「わ、分かった！」
素直に頷き、レミアは必死に応戦してくる。
暁の陽光を浴びて、彼女が散らす汗がキラキラと星屑のように辺りを舞っていた。

朝の清廉な空気を切り裂いて、心地よい音が波止場に響き渡る。
二人の間で交わされる幾重もの剣閃。
恐らく常人には、その残像を捉えることで精一杯だろう。どちらが優勢であるかなど、判別できるはずもない。
だが表情を見るならば、一人は必死で、もう一方にはかなり余裕がある。
「どうした？　まだ一発も当たってないぞ」
「こっ、これからだ！」
ハンティスが軽く挑発すると、彼女はムキになったように宣言する。だがやはりその斬撃がハンティスを捉えることはない。
しかし彼女も決して手をこまねいているばかりではなかった。
自分に足りないものを察したのか、次第にこちらの予想を覆すような動きも見せてくれるようになっていた。ハンティスも何度かヒヤリとさせられている。
根が純粋なのか、彼女はこちらの言ったことに忠実で、そして愚直なまでに習得しようという熱意があった。お陰で訓練を開始してまだ一時間ほどだというのに、はっきりと変化が見て取れるようになってきていた。
（これは指導のし甲斐があるな……）
呑み込みの早い彼女に、ハンティスは内心で舌を巻く。
「だいぶ良くなってきたな」
「ほ、本当か！」
こちらが褒めてやると、レミアは瞳を輝かせた。

しかしそれが一瞬の隙を生み、ハンティスの剣腹が少女の右腿を叩いた。

「つぅっ！」

「気を抜くからだ」

足を押さえて膝を突くレミア。

「ま、まだまだっ……」

それでも威勢よく自分を叱咤し、懸命に立ち上がる。

ハンティスは彼女の気迫に応え、再び剣を構えようとしたが、

「……いや、そろそろ時間か」

これ以上やると合同訓練に遅刻してしまう、と思い直した。旧埠頭には陸釣りにやってきた人の姿が、ちらほらと見受けられるようになっていた。

「今日はここまでにしよう」

「……わ、分かった」

大人しく頷くレミアだったが、その表情を見るにまだまだ物足りなさそうだ。

それからぼそりと零す。

「……やはり、貴様は強いな……もう少し、勝負になるかと思っていたのだが……」

「メインが銃だと考えれば、十分過ぎるくらいだと思うけどな」

悔しげに唇を噛むレミアに、ハンティスはそうフォローした。

「だ、だが！　レイオス兄様は剣術でも超一流だったのだ！」

「……あいつ？」

「それはあいつが異常なだけで……」

思わず口を突いて出た言葉に、レミアは不思議そうに首を傾げた。

「あ、いや、何でもない」

ハンティスは慌てて誤魔化す。

「……もし貴様と兄様が戦ったら、どっちが勝つのだろう？」

レミアのその呟きに、ハンティスは思わずどきりとした。

「いや、いくら貴様が強いと言っても、さすがに勝つのは兄様の方だろう」

「そ、そうか……」

「なんたって兄様は、百年に一度の逸材なのだからな！」

レミアは自信満々にそう結論づけ、勝ち誇ったような笑みをこちらに向けてきた。

だが不意に、その表情が曇る。

「……だけどそんなレイオス兄様と違い、ぼくは何もできない弱い人間だった」

その言葉には自嘲にも似た響きが籠っていた。

「だからレイオス兄様は、ぼくを置いていったのだ。兄様は……何か目的がある様子だった。もっと……ぼくがもっと強ければ。兄様に認めてもらえるだけの強さがあれば……ぼくも連れて行ってもらえたかもしれないのに」

「……だから皇宮を出たのか？」

レミアは頷いた。

そして正体を偽ってまで、彼女は騎士学院に入学した。

もっと強くなることができれば。そうすれば、いつかまた兄と再会したとき、今度こそ兄の力になることができる。そう思ったのだという。

「だけど、ぼくは聖騎武祭に出場する権利を勝ち取った。そしてもしこの名前で活躍することができれば、レイオス兄様がぼくのことに気づいてくれるかもしれない」

そんなふうに力強く目標を語る彼女は、いつになく真剣で。

「……そうだな。俺も少しでも力になれるよう頑張るよ」

「そ、それならっ……その……あ、明日も付き合ってくれるかっ？」

「ああ」

ハンティスがすんなり頷くと、レミアは嬉しそうに頬を緩めた。

「……そ、そうかっ……」

朝焼けのせいか、彼女の横顔は赤く染まっていた。

旧埠頭から戻ってきたハンティスは、食堂で朝食を掻き込んでいた。のんびりしていると遅刻しそうな時間帯だ。そのときアルレナとムストリアが入ってくるのが見えた。制服に着替えており、すでに訓練に向かう準備はできているようだ。

二人はこちらに気づき、近づいてくる。

「聞きましたわ。昨晩は大変だったようですわね」

どこかからあの一件の情報が伝わったのだろう、彼女は労いの声をかけてきた。

「誰から聞いたんだ？」

「パレット教官ですわ」

「そう言えば昨日の夜、騎士学院に教官陣が集まってたな。最終日の打ち合わせをしているって言ってたけど」

最終日に何か特別な訓練でもする予定なのかもしれないとハンティスは思っていが、アルレナが苦笑気味に教えてくれた。

「お祭りをどういう順序で楽しもうか、という打ち合わせだったそうですわ」

「そっちかよ」

ハンティスは思わず突っ込みを入れていた。

ジェノバではもうすぐ豊漁を祝う祭りが開催される。

合同訓練は五日間あり、そのちょうど最終日が祭りの初日だ。

その五日目の訓練は午前中で終わる予定で、帝都に発つのはその翌日だという。どうやら祭りに参加したいという教官たちの希望でそのような日程になったらしい。そこは生徒のためという理由であってほしかった。

「おらも、まつり、いきたい」

不意にムストリアが口を開いた。

「そうですわね。昨年は日程の問題で、行くことができませんでしたし」

「あ、あるれな……ええと、その……」

ムストリアはもじもじしながら、アルレナに何かを言おうとしている。大男にはまるで似合わない仕草だ。

「どうされましたの？」

「お、お、お、お……」

「……？」

「お、おらと、いっしょに……い、いかない？」

ついに彼が口にした一言に、「おお」とハンティスは内心で感嘆した。

ああ見えて彼は小心者だ。そのためずっと尻込みしていたというのに、今ついにアルレナとの関係を進展させようとしているのだ。

それを告げるのに、どれほどの勇気を振り絞ったのだろう。ムストリアは顎から滴るほど、びっしょりと汗を掻いていた。

彼の一世一代の提案に、アルレナは――

「いいですわよ」

何ともあっさりと頷いたのだった。

表情筋が緊張から解き放たれ、ムストリアの顔がぱぁっと明るくなった。しかしその直後、

「ぜひ部隊の皆で行きましょう」

ムストリアは一瞬にしてこの世の終わりみたいな表情になった。

（……可哀想なムス……だがここはあえて、ザマアミロと言わせてもらおうか）

ハンティスの脳裏を、先日の裏切りの記憶が過る。彼が教官たちにチクったせいで酷い目に遭ったのだ。

とは言え、彼はかつての戦友。最近は早朝訓練に付き合ってもらったりもしており、恩もあった。

ハンティスは仕方なく一計を案じることにした。

「……なぁ、久しぶりに四人で行かないか？　サヤも誘って」

「あら、それは妙案ですわね」

思っていた以上の好反応が返ってきた。

「サヤが学院に戻ってきてからもそれぞれ色々と忙しくて、四人だけで話す機会はあまりなかったですものね」

（これで、途中で二人ずつに分かれれば……）

アルレナとムストリアが二人きりになる。

ムストリアはその意図を察してか、尊敬と感謝の眼差しでこちらを見詰めてきた。

だが無論、ハンティスには下心があった。

この方法ならハンティスもまた、サヤと二人きりになることができるのだ。
(ムスに負けてられないしな)
ハンティスは対抗意識を燃やす。そしてデャンクに言われたことも、癪ではあるが実はずっと頭に引っかかっていたのだ。
(あれ……? けど、何か忘れている気が……?)

「いいですか、マロン。ついに勝負をかけるときがきたのです!」
どんっ、と机を手のひらで叩き、銀髪の少女が声を荒らげた。
宿舎の一室。もうすぐ合同訓練のため出なければならない時間だったが、マロンはシスリーネと作戦会議を行っていた。
「今回はあの雌犬に先駆け、デートの約束を取りつけることに成功したのです。まさに千載一遇の逆転のチャンス!」
「う、うん……」
「何より、お祭りと言えば、誰もが浮かれ、羽目を外してしまう非日常のひとときです。加えて、聖騎武祭に出場する必要のない、補欠部隊としての今回の遠征。どうしても気持ちは緩んでしまいがち。だからこそ、そこにつけ込むのですよ!」
鼻息荒く主張する彼女に、マロンはおどおどしながら口を開いた。
「……あの、シスちゃん? あたしね、その、思うんだけど……」
「何でしょうか?」
「シスちゃんの考える作戦って……あの……い、いつも、お色気だよね……?」
「っ!?」
シスリーネは頭を金槌でぶたれたかのように、大きく身体を仰け反らせたのだった。
「……それに……ぜんぜん……効果ない、気がするし……」
「がっ!」

吐血するシスリーネ。
「というより、むしろ逆効果……?」
「ぐはっ」
今度は頭を抱えてその場に蹲った。
「し、シスちゃん……? あの、大丈夫……?」
「は、はい……」
マロンが心配して声をかけると、彼女は随分と憔悴した顔でよろよろと立ち上がった。
「そう、ですね……じ、実は私も少し……ほんの少し、方向性を間違えていたような気がしていました」
「そ、そうなんだ……」
「で、ですが……そうですね……何か他の……お色気以外の作戦……お色気以外の……」
先ほどまでの勢いはどこへやら、シスリーネは難しい顔をして悩み始めた。
マロンはおずおずと言う。
「あの……作戦、というほどじゃ、ないんだけど……。あたし、一つ、やりたいなって、思っていることがあって……」
「な、何でしょう?」
シスリーネは縋るような目でこちらを見詰めてきた。
「あのね……この都市って、運河がたくさん、走ってるよね……」
「ええ、そうですね。まるで迷路のようです」
「あたし、偶然、噂で聞いたんだけど……。えっと、祭りの期間中にね、この運河で……その、男女が二人きりでボートに乗ると……か、必ず結ばれるって……話を……」
「必ず結ばれる、ですか……? ボートに乗っただけで……」
シスリーネは何とも胡乱げな顔になった。どうやら完全な眉唾だと思っている様子だ。

「と、都市伝説みたいなものだしっ……そ、そんな風に上手くいくわけないと、あたしも思うけど……。で、でも、単純に、せんぱいと一緒に、二人きりでボートに乗れたら……その、た、楽しいかなって……」

「……」

マロンが懸命に伝えるが、シスリーネはとても退屈そうな顔つきをしていた。しかし、急に何かに思い至ったらしく、

「なるほど！　ボートで二人きりになって誰にも邪魔されない状況を作り出し！　そして……そこでヤるんですね！」

「しないよ!?」

マロンは思わず脊髄反射で否定していた。だいたいボートの中とは言え、完全な野外だ。

「あの……シスちゃんが、あたしのことを応援してくれるのは、その、すごくありがたいよ……。でも、あ、あたしは……その、もっと、ゆっくり……じ、自分のペースで、せんぱいと親しくなって、いきたいなって……」

とつとつとマロンは自分の想いを吐露する。

「ま、まぁ……マロンがそれでいいと言うのなら……」

こちらの気持ちを理解してくれたのか、シスリーネはしぶしぶと言った様子ながらも頷いてくれた。

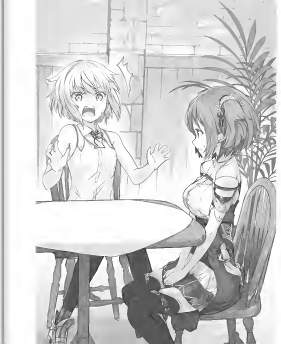
マロンは瞳を潤ませて、

「シスちゃん……ありが——」

「では、ぜひ三人で一緒にボートに乗りましょう」

「……」

何だかあまり理解してくれていない気がした。



第三章
祭り

Irregular's Rebellion

普段は主に港周辺に展開されている屋台や露店だが、それが今や表参道を完全に埋め尽くしていた。

ジェノバの住民だけではない。近隣の都市や街から集まってきた人たち、さらには異国の商人たちをも取り込んで、港町は凄まじい活況を見せている。

祭りの初日だった。

空は茜色に染まり、街中に飾られたランタンもぽつぽつと灯り始めている。

そんな中、合同訓練を終えたハンティスとムストリアは、そわそわと落ち着きなく少女たちの到着を待っていた。

「はんていす、おら、きんちょうしてきた」

「俺もだ」

「……といれ」

「またかよ。何回行ってんだよ。……いや待て、俺ももう一回、行っておくことにする」

やがて連れションから戻ってくると、ちょうどサヤとアルレナがやってきた。

ハンティスとムストリアは二人揃って仲良く息を呑んだ。

彼女たちは変わった衣装に身を包んでいた。

上下が一続きになった、目にも鮮やかな花柄の織物。素肌の上に羽織ったそれを、幅の広いひも状の装身具を腰に巻きつけることで身体に固定しているらしい。その装身具もまた美しい色合いで、さらなる華やかさを加えていた。

ハンティスは聞いたことがあった。確か、東方に伝わる〝浴衣〟という衣服だ。

「……借りてきたの。異人街で」

どうかな、とサヤが窺うような視線を向けてくる。

「すごく良いと思う」

ハンティスは即答していた。

サヤは一瞬、驚いたように目を瞬ってから、はにかむように俯いた。

「あ、ありがと……」

「東方の伝統衣装ですし、やっぱりサヤの方が似合いますわね」

アルレナが自分とサヤを見比べながら、少しだけ残念そうに言う。どちらも花柄だが、サヤが水色を基調としているのに対し、アルレナは赤を基調としていた。

「あ、あるれなだって、にあって、いる！」

「そうかしら？　でしたら嬉しいですわ」

ムストリアが断言すると、アルレナは満更でもない様子で笑みを浮かべた。

（ムス、お前やるじゃないか）

と、視線で賞賛すると、ムストリアから「おらだって、やるときは、やる」と決意に漲った視線が返ってくる。

「じゃ、じゃあ行こうか」

ハンティスが促し、四人は並んで歩き出した。

ここからの手筈は打ち合わせ済みだった。

まず、ハンティスがサヤと会話を盛り上げつつ、彼女を誘導する。

同時にムストリアがアルレナと会話を盛り上げつつ、彼女を誘導する。

そして、「あれ？　もしかして逸れてしまった？　まぁでもこの人混みの中で探すのは大変だし、合流は諦めよう！」となる。

（よし、どう考えても完璧だ！）

我ながら見事な作戦だと、ハンティスは内心で自賛する。

早速とばかりに、サヤに話しかけた。

「……そ、それにしても、すごい人だかりだなぁ、サヤ」

「そうね。あ、ねぇ、アルレナ、あの髪飾り、あなたに似合いそう」

「あら、綺麗ですわね。だけど、ちょっとわたくしには派手過ぎないかしら？」

「そんなことないわよ。あなたならむしろ少しくらい派手な方が合うと思うわ」

「……あ、あるれななら、どんなものでも、にあう」

「そうかしら。でもサヤが言うなら」

「あー、でもこっちのも良いかも」

「そうですわね。わたくし的にはこちらの方が趣味かもしれませんわ」

「……さ、サヤ、これとかお前に似合うんじゃないか？」

「うーん、わたしはあんまりごてごてしたのは好きじゃないのよね」
「あ、見てください、サヤ。これ、カンザシですわ。この浴衣と言い、さすがは外国との貿易が盛んな都市ですわね」
「ほんと」
「これすごくサヤに似合いそうですわ」
「そう？」
「絶対、似合いますわ。あ、ではこれ、サヤの再入学祝いとしてプレゼントしますわ。今さらですけど」
「じゃあ、わたしもさっきのやつ、アルレナにプレゼントしてあげるわ。いつも色々世話になってばかりだし」
「……そ、それなら俺も——」
「でしたら、プレゼント交換ですわね。せっかくですし、もっと色々探してサヤにぴったしのものを見つけてみせますわ」
「わたしも」
「……お、おらも、あるれ——」
「ふふふ、では、どっちがより素敵な装身具を見つけてくるか勝負ですわね」
「そうね。負けないわよ」
（全然まったく会話に割って入れないんだけど!?）
ハンティスは思わず胸の奥で叫んでいた。
正直、女子二人の会話がここまで盛り上がるとは予想していなかったのである。
「……ムス、俺たち完全にミスったな……」
「おふ……」
ハンティスとムストリアは二人揃って仲良く頭を抱えた。最初から二人で回ろうと誘っておけばよかったと思うも、すでに後の祭りだ。
だがそのときだった。
「という訳で、ハンティス、手伝ってもらうわよ」
「ムストリア、あなたはわたくしを手伝ってくださいな」

「「へ？」」
どういう訳か、サヤとアルレナが別々の方向へと歩いていく。
ハンティスはムストリアと顔を見合わせた。
「昨日、夜遅くまで考えた作戦が」
「まったく、いみ、なかった……」
とは言え、結果オーライである。
「行きますわよ、ムストリア」
「う、うん」
アルレナに連れられ、ムストリアは雑踏の中へと消えていった。正確には彼の頭だけは見えているが。
二人を見送ってから、ハンティスはサヤの方へと向き直った。
「じゃ、じゃあ、俺たちも行こうか」
「……うん」
「まぁ、手伝うって言っても、正直、俺そういうのかなり疎いし、何の役にも立たないと思うけど」
「大丈夫。……………………………本当は、ただの口実だし」
「え？」
「ううん、何でもない」
とりあえずアルレナたちとは逆方向、港の方へと向かいつつ、屋台や露店を見ていくことにした。
「にしても、ほんとに人が多いな」
港へと近づくにつれ、さらに賑わいを増していく。
少しでも距離が離れるとすぐに間に割り込まれてしまい、逸れてしまいそうだった。
今も無遠慮なおばさんが二人の間を強引に通っていく。
ハンティスは思わず手を伸ばした。それを咄嗟にという感じで、サヤが握り返してくる。
お互い引き寄せると、勢い余ってぶつかってしまった。
「ご、ごめん」
「……こ、こっちこそ」

顔を見合わせ、それから気まずくなって二人揃って顔を逸らす。だがハンティスは彼女の手を離しはしなかった。
「は、逸れるといけないしな」
もっと気の利いた台詞があるだろうとは思うが、口を突いて出たのはそんな言葉だった。
「……うん」
サヤは頷いてくれた。
そのままぎこちなく歩き出す。
日々の鍛錬のせいか、彼女の手には幾つものマメができていた。思いのほか小さくて、こんな手であの美しい剣舞を演じているのかと思うと、不思議な感動が湧き上がってくる。
そして時折肩が擦れ合い、彼女の艶やかな黒髪がこちらの肩を撫でる度に、ハンティスの胸の動悸は強くなっていった。
割り込まれることはなくなったものの、移動するだけでも困難なほどの人だかりであることには変わりなかった。
しばらく色々な露店を見て回って、ハンティスは提案した。
「……ちょっとあっちで休憩しないか？」
「そうね。確かに、これはちょっと疲れるわね」
人混みが苦手なせいか、サヤはその言葉通り少し表情に疲労感を滲ませていた。
ハンティスは彼女の手を引いて横道へと入った。
やがて運河へと突き当たる。すでに日が沈んでしまっていたが、運河の端に浮かぶ無数のランタンのお陰で辺りはそれなりに明るかった。
その運河を普段より多くのボートが行き交っている。男女のカップルの率がやたらと多い気がした。
二人は運河の脇の石段に腰かける。
「アルレナにプレゼントするやつ、良さそうなのはあったか？」
「う〜ん、そうね……」
ハンティスの問いに、サヤは曖昧に頷いた。
（……勝負とか言っていた割にはそんなに熱心じゃないような？）
負けず嫌いな彼女は勝負事だと絶対に手を抜かないのに、とハンティスは首を傾げる。

（まあ、あんまり勝負っていう雰囲気じゃなかったけど……）
と心の中で思案していたそのとき、闇に覆われた空を縦に切り裂くように、二人の頭上で幾つもの光が走った。
爆音が夜空に轟き、炎と橙色の輝きが弾けた。続いて、青、黄、紫の光が瞬く。
「花火だ」
真っ黒なキャンバスに描かれるそれは、火章霊と光章霊の多彩な共演だった。様々な色、大きさ、形状の花火が、夜空を美しく彩っては消えていく。
ふと隣を見ると、サヤがいつになく感動した様子で魅入っていた。
「きれい……」
「……ああ、綺麗だ」
頷くハンティス。だがその視線は、花火ではなく彼女の横顔に向けられていた。
「え？」
「……あ、いや」
気づかれてしまったかもしれない。ハンティスは慌てて視線を逸らした。
「いま……う、ううん……何でもない」
サヤが何かを言いかけて、それから首を振って俯いた。心なしか、項やうなじの辺りが少し赤くなっている気がした。
視線を戻したハンティスは、再びそんな彼女をじっと見つめてしまう。普段は下ろした髪の毛で隠されている首筋が何とも色っぽくて、目を離すことができなかった。
少しして、サヤが恐る恐るといった様子でこちらを見てきた。
目が合う。
「……」
「……」
お互い何も言わず、ただ見つめ合うだけの不思議な時間が過ぎていく。
『本当はね。女の子だって、もっと男の子に積極的になってほしいって思っているものなのよ』
そのときハンティスの脳裏を過ったのは、先日の歓楽街での言葉だった。

確かに相手が好きな男であれば、女の子も積極的にアプローチされたいと思うだろう。
問題はそうではないケースが圧倒的に多いということだ。
けれども――
ハンティスは離すタイミングが分からず、ずっと握ったままだったサヤの手を優しく引いた。
距離がゆっくりと縮まっていく。
それを彼女は嫌がらなかった。
（……もしかして……本当に……）
思い起こされるサヤとアルレナのやり取り。
あのときも違和感を覚えてはいたのだ。
（……誘われたのは……むしろ……）
気づけば思考は完全に停止していた。ただただ目の前の少女が愛おしくて、その感情に突き動かされるように、ハンティスは身体を寄せていく。
彼女が僅かに顎を上げ、目を瞑った。
互いの顔が近い。
吐息がかかるくらい、彼女の可憐な唇はすぐ目の前にあった。
それでもまだハンティスはその距離を詰めていき、やがて――
「ハンティス！　ようやく見つけたぞ！」
「っ！」
いきなり割り込んできた声に、二人は弾かれるように身体を離した。
暗がりから姿を現したのは、シオンだった。銀色の長髪が花火の光に照らされ、色とりどりに輝いている。
「……し、シオン？　ど、ど、どうしたんだ？」
ハンティスの全身から汗が噴き出す。今のを見られていたかもしれない。
しかし返ってきたのは予想外の言葉だった。
「お、お、オレと一緒にっ……ボートに乗ってくれっ！」
どーん、と夜空で花火が弾けた。

「へ？」
「遠慮なんていらねぇ！　すでに準備はできている！」
彼女が指差す先、運河の上に小さなボートがぷかぷかと浮かんでいた。
「ど、どういう……？」
「そうはさせませんよ、姉さん」
ハンティスが大いに戸惑っていると、そこに割り込んでくる声がもう一つ。
シオンとよく似た銀の髪が夜陰に煌めく。今度はシスリーネだった。マロンを引き連れた彼女は、シオンに向かって断言した。
「この男はこれから私たちと一緒にボートに乗る予定です。姉さんは引っ込んでいてください」
「……いやいや、何ですでに決まってるみたいに言うんだよ？」
ハンティスは半眼で呻いた。
「こいつはオレとボートに乗るんだ！」
「姉さんには渡しません」
「だから俺の意志は……」
「見ろ、嫌がってるじゃねぇか！」
「それはどう見ても姉さんがウザいせいでしょう」
ハンティスの問いなど完全にスルーして、姉妹は互いに一歩も譲らず睨み合う。
「あ、あの……えっと……」
マロンはおろおろしている。
「ハンティス、来やがれ！」
「お、おいっ……」
シオンが強硬手段に出た。腕を引っ張られ、ハンティスは彼女が準備したボートへと無理やり連れていかれそうになる。
「させません！　〈氷結〉！」
すかさずシスリーネが紋章術を発動。しかも難易度の高い無詠唱だ。

「にょっ⁉」

足元の地面が凍り、頓狂な悲鳴とともに足を滑らせるシオン。何とか体勢を整えようとしたが、しかしそれも虚しく――ぼちゃんっ！

運河に落下してしまった。

「お、おい大丈夫かっ？」

幸い巻き添えを回避していたハンティスは、運河の縁からシオンが落ちた水面を覗き込む。そんなに深くはないはずだが、なかなか上がってこない。

シスリーネに腕をがしっと摑まれた。

「さて、それでは行きましょうか。姉さんは泳げませんが、まぁ大丈夫でしょう」

「それマズイだろ⁉」

「……どこに行くつもり？」

ハンティスを連行しようとするシスリーネの前に、サヤが立ち塞がった。

「今日はわたしと一緒に祭りを見て回る約束をしていたの。そうよね、ハンティス？」

口調こそ淡々としているが全身から隠し切れない憤りのオーラが立ち昇っていた。口元がぴくぴくと痙攣したように動いている。

「そ、そうです」

ハンティスは蒼い顔で頷いた。正確には四人で、だったが。

「何を言っているのですか。私たちだって約束していました」

だが、シスリーネもまたそうきっぱりと主張した。

「ですよね、マロン」

「は、はい……あの……先日の、朝に……」

マロンが消え入りそうな声で証言した。

（そ、そう言えば……そんな約束を、していたような……）

そう思い至り、血の気が引いていく。

マズイ。あのときは確かレミアのことで悩んでいて、適当に対応してしまった。そのせいで、完全に失念していたらしい。

頬を伝って、汗が流れ落ちた。

「あー、えっと……その……」

「ちょっと、どういうことよハンティス？」

「どういうことですか？」

「せ、せんぱい……」

「あ、いや、これは、えっと……」

両陣営から問い詰められ、しどろもどろになるハンティス。

直後、遁走した。

「あっ！　待ちなさい！」

「どこに行くつもりですか！」

「せ、せんぱい……っ！」

「ごめんっ、完全に忘れていたあああっ！」

思わず夜空に向かって謝罪する。それに呼応するように、どんどんと夜空に重低音が響き渡る。どうやら花火はクライマックスを迎えたようで、さらに迫力を増していた。

「何で逃げるのよ！　別に怒ってないわよ！」

「本当にっ？」

「ええ、まったく怒ってないわ！　《雙水簾》っ！」

「完全に怒ってるよな⁉」

「安心してください。そこの雌犬とは違って、私の方はそれほど怒っていませんから。《凍結姫》！」

「いやいやいや怒ってる！　絶対に怒ってる！」

「せ、せんぱいっ……あ、あたしはっ……」

「マロン、お前だけはいつだって俺の味方――」

「――それは天の裁き。薙ぎ倒せ、愚かなる軍勢に神風の鉄槌を」

「一番怒ってたぁぁぁぁっ⁉」

ハンティスは運河に沿う道を全速力で走った。

（なんか、この間も同じようなことしたよなっ!?）

彼女たちを撒くため、できる限り人混みに紛れるように逃走する。それでも彼女たちはしつこくついてきた。

「こっちだ！」

と、そのとき突然、路地から手が伸びてきて、何者かに腕を引っ張られる。

転がるように飛び込んだそこは、狭い路地だった。

店の看板の陰に隠れているせいか、通りからは分かり辛い場所だ。

そのお陰でサヤたちはハンティスに気づくことなく、目の前を通り過ぎていく。

自分を助けてくれた人物に、ハンティスは目を丸くした。

「……レミア？　どうしたんだ、その格好？」

「……た、たまには、女の格好もしてみたいと思って……」

レミアはもごもごと恥ずかしそうに口を動かす。

どういうわけか、いつもと違って彼女は髪を解いていたのだ。服装もちゃんと女物で、しかも少しおめかししているようにも見える。元より端正な顔立ちをしていることもあって、どこからどう見ても女の子だ。

いや、むしろ美少女と言っても過言ではないだろう。お陰で最初は誰だか分からなかった。

それにハンティスが驚いていると、

「まったく、どこに行ったのよ！」

「まだ近くにいる可能性はあります。不自然にいなくなりましたので」

憤怒の籠った声が聞こえてきてギクリとする。

サヤたちは路地の近くをウロウロしていた。いきなり姿が消えたことから、不審に思ってこの付近を捜しているようだった。

「こ、こっちだ」

レミアに促され、ハンティスは路地の奥へと進んでいく。すぐに運河に行き当たった。

そこにはボートが一艘浮かんでいた。どうやら彼女が乗ってきたものらしい。

「……なんか流行ってるのか、ボート？」

疑問を覚えつつも、レミアに続いてボートに乗り込んだ。

レミアがオールを漕ぎ、岸から離れていく。

さすがの彼女たちも、ここまでは追ってこないだろう。ハンティスは胸を撫で下ろした。

「助かったよ」

「……いや、ぼ、ぼくの方こそ……貴様には……その、世話になりっぱなしだし……」

ハンティスが礼を言うと、レミアは俯きがちにぼそぼそと呟く。

「……こ、この数日だけだったが……き、貴様のお陰で……す、すごく、有意義な特訓ができた……と、思う……」

「そうか。役に立てたなら良かったよ」

「……う、うん……」

オールを手放してボートを水の流れに任せた彼女は、なぜか指先と指先をくっつけたり離したりしていて、やけに落ち着かない。

（どうしたんだ？　なんか、いつもと違うような……）

ハンティスは困惑しつつも、彼女に代わってオールを手に取った。

思いきり漕ぐと、思ったよりも速度が出る。他のボートを追い越しながら、都市中に迷路のように張り巡らされた運河を進んでいく。

「にしても、カップルが多いな……」

家族連れもときどき見かけるが、ボートに乗っている大半は男女の二人組だった。

「……は、ハンティス」

ハンティスが周囲を見渡していると、レミアがおずおずと口を開いた。

「……ぼ、ぼくはこれまで、レイオス兄様以外の男性と……あ、あまり、親しく話をしたことがないのだ……」

「まあ、そうだろうな。仮にも皇女なんだし……」

「……だ、だから、その……こ、こういうことは……は、初めてで……」

「こういうこと……？」

ハンティスが怪訝に眉をひそめると、レミアは暗がりでも分かるほど顔を真っ赤にしながら言った。

「つ、つまりっ……お、男と二人きりで、こんなふうに〝でーと〟などというものをしたことはっ……い、い、一

度もないのだ……っ！」
一瞬、彼女が何を言っているのか分からなかった。
「って、これは別にデートとか、そんなんじゃ……」
「だ、だが！　ほ、本でなら読んだことがあるぞ……っ！」
慌てるハンティスの言葉を遮って、レミアは力強く告げたのだった。
「そ、その……〝でーと〟なるものは……き、き、〝きす〟なるものをしなければならないということを……っ！」
「ちょ、レミアっ？」
「は、恥ずかしいが、致し方がない！　これが庶民のしきたりというのならば……っ！」
「相変わらず勘違いが激しいなお前は!?」
そう声を上げるハンティスなど意に介さず、レミアはいきなり腰を上げたかと思うと、ぐっと身を乗り出してきた。
「や、や、優しく……してくれ……」
ぎこちなく目を瞑り、小さく唇を突き出してくるレミア。
その唇は艶やかで、まるで花びらのように清楚だった。
（ど、ど、どういう状況だよこれは！　まさか先ほどの続き!?　途中で邪魔が入ったからな……って、そもそも人が違うだろ、人が！）
狼狽えるハンティスは、混乱のあまり頭の中で意味不明なことを叫んでしまう。
そのときふと、周囲がやたらと騒がしいことに気がついた。
「え、なに!?」「うわっ」「なんだなんだっ？」「人っ？」「すげぇ跳躍力っ！」
連鎖する驚きの声が、徐々にこちらへと近づいてきている。
ボートからボートへと飛び移っていく人影があった。
（サヤ!?）
まるで軽業師のような身軽さで、彼女は運河の上を舞っていた。浴衣をたくし上げているせいで、白い太腿が露わになっている。
「何をやってるのよ!?　しかも誰よその女っ！」

運河に怒号が響く。
さらに、猛スピードでこちらに迫りくるボートがあった。
「見つけましたよ！」
「せ、せんぱいっ……」
シスリーネとマロンだ。彼女たちが発生させる波の勢いは凄まじく、付近を通過したボートが転覆しそうになるほどだった。
そのとき、ハンティスたちが乗るボートの縁を掴む手があった。
水中から何者かが躍り出てきた。
「見〜つ〜け〜た〜ぞ〜」
おどろおどろしい声で姿を現したのは、シオンだった。長い髪が顔に張りついていて、まるで水死した女性の幽霊のようだ。
「もう逃がさないわ！」
サヤが近くのボートを踏み台に、こちら目がけて跳躍してきた。
「マロン、あの雌犬に負けてはいけません！」
直後、シスリーネとマロンは乗ってきたボートを半ば体当たり気味に接近させ、そこから飛び移ろうとしてくる。
加えて、シオンが水中からボートに上がって来ようとして――
「おい、そんなに乗ったら、ボートがっ……」
言い終わる前に、ぐらりと大きくボートが傾いだ。
「ぬおっ」「へっ？」「きゃっ」「うおっ」「ひえっ」「マロンっ！」
ざぶーんと盛大な水飛沫を立て、ボートは盛大にひっくり返ってしまったのだった。

「びしょ濡れになってしまったな……」
水を多分に含んだ服を絞りながら、レミアは薄暗い路地で一人溜息を漏らしていた。
濡れた髪が顔や首に張りついて気持ち悪い。

目を瞑っていたら、いきなり水中へと落ちてしまったのだ。

どうやらボートが転覆してしまったらしい。

近くではハンティスや、先ほど彼を追い駆けていた少女たちが、同じように運河の中に落下していた。彼が一体何を仕出かしたのかは知らないが、どうやら彼女らはハンティスを強く責め立てているようだった。

女であることを隠しているレミアは、彼女たちにあまり顔を見られるわけにもいかず、一人ひっそりとその場から立ち去ったのである。

今は服を着替えるため、宿舎へと戻ろうとしているところだ。

この濡れそぼった姿を見て、周囲から好奇の視線が集まってくるので、レミアはできる限り人気の少ない道を選んで歩くことにした。

そのときふと、もしかして自分は先ほどとても恥ずかしいことをしてしまったのではないか、という想いが湧いてきた。

「も、もしかして、いきなり〝きす〟というのはいささか早急だったのではないかっ⁉」

レミアが過去に読んだ本の中では、ほんの挨拶のように描かれていたが、それはあくまで物語の中でのことだ。

かあああああ、と顔が赤くなる。

そもそも考えてみれば、唇と唇を触れ合わせる行為が、出会って数日の間柄で行われるというのもおかしい。

男性とは、普通に手が触れ合ってしまうだけでも恥ずかしいのだから。

「わ、わ、ど、どうしようっ……へ、変な奴だと思われたかもしれないぞっ！　うわあああああっ」

ごんごん、とレミアは思わず近くの家の壁に額を打ちつけた。

頭から振り払おうとしても、彼のことが思い浮かんでしまう。

こんな気持ちは初めてだ。

（あいつのことを考えるだけで、何でこんなに胸が苦しくなるのだ……）

背後に気配を感じたのはそのときだった。

「誰だ⁉」

レミアは咄嗟に振り返ると、鋭い声で誰何した。

だが隠れるつもりなどないのか、かつん、と石畳を叩く靴音が鳴ったかと思うと、すぐに暗がりから人影が姿を現す。

「貴様は……」

「ほんと、信じられない」

「まったくです。二人の女性と同じときにデートの約束をするなど」

「面目ない……」

二人の少女から同時に睨まれ、ハンティスは小さくなっていた。

宿舎のロビー。濡れた服を着替えてきたハンティスは、サヤたちからこっぴどく説教を受けていた。

「しかもその後、別の女の子と会うなんて」

「そもそもあれは一体、誰なのですか？」

「いや、彼女は、その……」

二人にはレミアの正体を明かすことができない。ハンティスはどうにか誤魔化そうとするも、上手い言い訳が思いつかなかった。

要領を得ないこちらに呆れたように、シスリーネは盛大に溜息を吐いてから、

「マロンも何か言ってやってください」

「え？　あ、うん……そうだね……」

水を向けられたマロンだったが、彼女は曖昧な返事を返すだけだった。

「……マロン？」

「ミィナ、もうお腹いっぱい！」

そこへ場違いな声が響いた。ミィナが宿舎のエントランスを入ってくる。屋台で買ってきたらしい食べ物やお菓子を大量に抱えていた。

「あとこれだけしか食べらんないよ！」

「むしろそんなに食えるんかい」

とどこか力のない突っ込みを入れたのは、ちょうど同じタイミングで帰ってきたチャンクだ。彼は無念そうに

項垂れて、
「……収穫なしや……今のわいなら、百発百中間違いなしやと思ったんやけどなぁ……」
どうやらナンパが上手くいかなかったようだ。いつものことである。
さらに、祭りに行っていた生徒がぞろぞろと戻ってくる。祭りは朝まで続くらしいが、さすがに連日の訓練で、彼らにもそんな体力は残されていないようだった。
ちょうどアルレナとムストリアも戻ってきた。
ムストリアがこちらにドヤ顔を向けてくる。
(え、なに、上手くいったの？　マジで？　こっちは大失敗だってのによ……っ！)
「ねぇハンティス、話はまだ終わってないんだけど？」
「はい!?」
サヤの凍てつくような声に、ハンティスは慌てて背筋を伸ばしたのだった。

こんこん、と扉をノックする音が聞こえてきたのは、こってり絞られたハンティスが部屋に戻ってきてすぐのことだった。
「なはは……けんかは、あかんで……じゅんばん……じゅんばんやからな……」
チャンクはすでに鼾をかいて寝ている。幸せな夢を見ているのだろう、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。気持ち悪い。
(誰だろ？)
「あの……せんぱい……」
扉を開けると、そこにいたのはマロンだった。
「どうしたんだ？」
「その……お、お話があるんです」
「……？」
彼女と一緒にハンティスは宿舎の屋上へと移動した。

そこからは都市がほぼ一望でき、深夜だというのに無数の灯りで満たされている。特にランタンによって彩られた運河が光の川のように煌めいて、幻想的な美しさを演出していた。
「ごめんな、完全に忘れてて……」
とりあえずハンティスは、今日のことを謝った。
「いえ……」
マロンはふるふると小さく首を振る。
「シスちゃんはああ言っていたけれど……でも、あたしは、気にしてないです……」
「ほんとに？」
「……はい、ぜんぜん…………ちょっと海に沈めてしまいたいと思ったくらいで……」
「それ完全に殺意湧いてるよな!?」
女の恨みは怖いと、戦慄を覚えるハンティスだった。
「でも……むしろ、あたしの方こそ、申し訳なくて……」
マロンは俯きがちに呟いた。
「……あたしは、分かっているんです。せんぱいはやっぱり、サヤさんのことが好きで……。シスちゃんはあたしのために頑張ってくれているけれど……でも、きっとこの想いは叶わないものだって……」
「……マロン」
「それでも、あたしは――」
彼女は決意したように顔を上げた。

「――せんぱいのことを好きでいようと思います」

いつもはおどおどしているマロンが、真剣な瞳でこちらを見つめてきている。
(本当に、お前はすごいよ。俺なんて、未だに躊躇してるってのに……)
そう内心で感嘆するハンティス。
「あの……だ、だめ、ですか……？」

「い、いや、だめなわけ、ないだろ……？」
上目づかいで律儀に確認してくるマロンに、ハンティスはぎこちなく答えた。
「あ、ありがとうございますっ」
マロンがほっと安堵したように口元を綻ばせ、それから顔いっぱいに笑みを浮かべる。
「では、運河に沈めるだけで許すことにします……っ！」
「やっぱりかなり根に持ってる⁉」
「……あの女の人……すごく綺麗な人でしたよね……？」
「あ、あれはその、えっと……た、たまたま、会っただけで……」
「……せんぱい、初対面の人と一緒にボートに乗ったんですか……？」
「いや、その……」
じっとりとした昏い瞳で睨まれ、たじたじになるハンティス。
と、そのときだった。
「……見つけたぞ」
低く押し殺した声が、宿舎の屋上に響いた。
振り返ると、レミアの姿があった。着替えたらしく、いつものようにテンプス騎士学院の男子生徒の制服を着ている。
「レミア……？」
先ほど会った時はまるで異なる雰囲気に、ハンティスは大きな違和感を覚えた。
「……どうしたんだ？」
眉をひそめて問うが、彼女は無言で、ゆっくりとこちらへ歩いてくる。前髪に隠され、顔色が窺えない。
「……ぼくは、貴様を許さない」
獣が唸るような声が、彼女の唇から零れた。
彼女の全身から立ち昇るのは、濃密な怒気。
そして――
殺気？

「――っ！」
ハンティスは咄嗟に後方へと飛び退っていた。
すぐ目の前を鋭い斬閃が擦過。風圧が顔を叩いた。
レミアが紋章武装を顕現させ、いきなり斬りかかってきたのだ。
「どうしたんだよ⁉」
「……覚悟しろっ！」
ハンティスの問いには応えず、レミアは踏み込んで追撃してくる。
「マロン、離れてろ！」
「は、はい……っ」
ハンティスは素早く《獄炎剣》を顕現させ、彼女の斬撃を受け止めた。それは細身の身体から繰り出されたとは思えないほど重たく、ハンティスの腕にまで響くほどだった。
「おい、何があったんだ……？」
戸惑うハンティス。レミアは容赦なく攻め立ててくる。
休む暇もなく繰り出される斬撃の嵐を、ハンティスはどうにか防いでいった。
（何があったか知らないけど、この殺気……っ！　完全に俺を殺しにかかってきている！）
ハンティスは相手の剣を大きく弾くと、思いきり後方に跳んで距離を取った。
その瞬間、彼女は剣の切っ先をこちらへと向けてきた。
直後、剣先――いや、銃口から光弾が放たれた。
「っ！」
ハンティスは咄嗟に剣の腹を盾にし、それを逸らす。背後の地面に大きな穴が穿たれ、溶けた石から蒸気が上がった。
間髪入れず、レミアは次弾を撃ってくる。
ハンティスは弾道を見切り、それも剣で受け流しながら、
「待てよ、レミア！　こんなところで戦ったら罰則ものだぞ！　お前は聖騎武祭に出場できなくなってもいいのかよ！」

「そんなことはどうでもいい」
「なっ……」
先日、聖騎武祭で活躍したいのだと語っていた当人であるとは思えない発言に、ハンティスは絶句する。そして彼女の拒絶の意志を表すかのように、光弾が次々と降ってきた。
（なんて連射速度だよっ！）
ハンティスは驚嘆しながらも、何とか躱していく。
（くそ、まずいな……こんなところを誰かに見られでもしたら、本当に聖騎武祭に出られなくなるぞ……っ）
「くっ……」
だがそのときレミアに異変が起こった。突然よろめいたかと思うと、地面に膝を突いたのだ。
（っ？　何が起こった……？）
彼女は何かに耐えるように必死に顔を歪めていたが、やがて限界がきたのか、そのままがくりと倒れ込んだ。
「レミア、大丈夫かっ？」
すぐさま駆けつけようとしたハンティスだが、そこにいきなり漆黒の刃が飛来してきた。反射的に飛び退ると、すぐ目の前の地面に突き刺さる。
「……まったく、これではせっかくの作戦が台無しですねぇ」
聞き慣れない声がした。
転落防止用の手すりの上。そこに白髪の男が立っていた。
歳は二十歳前後といったところ。容姿にはこれと言った特徴がなく、柔和な笑みを浮かべる優男だ。しかしハンティスには、その微笑みがどこか作り物じみて見えて、とても不気味なものに思えた。
「……お前、レミアに何をした？」
「ご心配には及びません。少し眠っていただいただけですよ」
ハンティスが睨みつけると、その男は手すりから飛び降り、レミアのすぐ傍に着地した。
「おっと、近づかないでください」
意識を失っている彼女に、手にしていた剣の切っ先を突きつける。ハンティスは足を止めざるを得なかった。
「こ、こっちです！」

「一体、どうしたっていうのっ？」
そのとき息を切らせて屋上にサヤ、シスリーネ、そしてミィナが駆け込んできた。どうやらマロンが助けを呼びにいってくれたらしい。
騒ぎを聞きつけたのか、テンプス騎士学院の教官や生徒たちも屋上に姿を現す。
だが男は余裕の笑みを崩さない。
「単刀直入に申し上げましょう。この子を返してほしければ、明日の夜明けまでにここに五億リブラを持ってきてください。いわゆる身代金というやつですね」
白髪の男はそう一方的に告げて、受け渡し場所を記していると思しき折り畳んだ紙片を放り投げてきた。
「それと、運び手にはあなたをご指名させてください。ハンティス＝ハーミリオンくん」
「お前、何で俺の名前を知っている……？」
「さて、なぜでしょうねぇ？」
男は意味深に微笑んでこちらの問いを軽く受け流すと、レミアを抱え上げた。
そのとき突然、男の足元にまるで空間を切り取ったかのような四角い影が出現する。すでに夜の帳が降りた中にあってなお、その影は不気味なほどに黒かった。
「それではお待ちしていますよ」
「なっ……」
それだけ言い残して、男はレミアとともにその影の中へと沈んでいった。
すぐに駆け寄ったハンティスだが、そこにあるのはただの何の変哲もない地面で、もはや影も形も残っていなかった。
「くそっ……」
テンプス騎士学院の生徒が何者かに誘拐された。その事実に、屋上にやってきた者たちが騒然となった。
確かに彼らから見れば、身代金を目的とした単なる誘拐事件にしか思えないだろう。
しかし先ほどのレミアの異変を目の当たりにしたハンティスは、胸中を支配する大きな不安を拭うことができなかった。
（レミア……もしかして、お前はあのことを……）

第四章
海底迷宮

Irregular's Rebellion

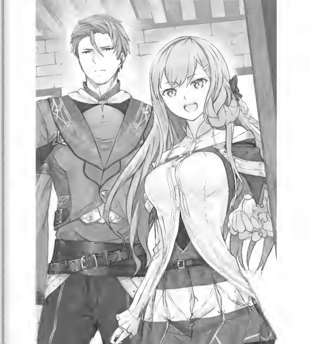
「わたくしが行きます」
そう主張したのは、グレンカ教官だった。
彼女の同僚である男性教官が目を瞠り、それに反論する。
「で、ですが、相手が指定してきた場所は、あの海底迷宮の中にあるんですよ……？」
「分かっています。それでも、絶対に彼を助けなければならないのです」
「っ……」
その揺るがぬ決意を察して、男性教官は口を噤んだ。
宿舎内の会議室だった。
今ここにいるのは、マーテリア、テンプスの両騎士学院の教官陣に、ちょうど誘拐の現場に居合わせたハンティスたち第29部隊だ。
「……ジェノバの港から、およそ二キロの沖合に浮かぶ無人島にある、レベル4の迷宮。かつてジェノバ騎士団の精鋭たちが探索に乗り出したが、大きな損失を被り、今はもう調査を完全に打ち切っている、か」
バレットが忌々しげに眉根を寄せながら、改めて状況を確認した。
ベルガリアが吐き捨てるように応じる。
「……ったく、随分と物騒なところを受け取り場所に指定してきやがったな。しかも要求は五億リブラ。どう考えてもすぐに用意できるような金額じゃねぇだろ。渡すふりをして人質を奪還するという方法しかねぇんじゃないか？」
だがその提案に、グレンカが首を振った。
「いいえ。身代金については、わたくしが用意させていただきます」
誰もが目を剝いて驚いた。
聞けば、グレンカは伯爵家の令嬢だという。だが、五億リブラもの大金を一人の生徒を助けるためだけに簡単に準備するなど、さすがに普通ではない。レミアが皇女殿下であることを知らない者からすれば、奇異に映っても仕方ないだろう。
「それよりも、問題は――」
グレンカがこちらへ視線を向けてくる。

先ほどから一人思案に耽っていたハンティスは、それに気づいて顔を上げた。
「どういう訳か、相手があなたを身代金の運び手として要求したとのこと。ですが、レベル4の迷宮に立ち入るのは、非常に大きな危険が伴います。加えて、誘拐犯の正体も定かではありません」
グレンカの言う通り、あの白髪の男が何者なのか、まったく情報がない状態だった。仲間がいる可能性もあるだろう。
「まだ騎士学院の生徒であるあなたにこのようなことをお願いするのは心苦しいですが……どうか、お願いいたします。あの方……彼を助け出すため、お力をお貸しください」
そう救いを求めてくるグレンカに、ハンティスは即答した。
「もちろんです。俺だって、あいつを助けたい」
「あ、ありがとうございます」
グレンカが深々と頭を下げてくる。冷厳な彼女が意外にも目尻に涙を滲ませていた。
「せ、生徒をあんな危険な迷宮に連れていくのは、さすがに……」
「ここは騎士団に任せるべきであります！」
何人かの教官が口々に反論を並べ立ててきたが、ハンティスはきっぱりと告げた。
「大丈夫です。そもそも今はちょうど祭り中で、騎士団は都市の警備のために人手不足でしょう。それに場所がレベル4の迷宮ともなれば、人員を派遣するのに時間がかかる。朝までに間に合わない可能性が高いです」
人一人を救出するためだけに、騎士を危険にさらすことはできない。そう判断されてしまうかもしれなかった。
事実、すでに騎士団に打診してはいるが、その反応は芳しくなかったという。彼女が皇女殿下であることを明らかにすれば話は別だろうが……。
「心配はいらない。こいつの実力は私が保証する。たとえレベル4の迷宮に出没する魔物だろうと、後れは取らないはずだ」
そう援護してくれたのはバレットだった。
大半の教官たちはまだ不安気にしていたが、それでも先方の要求でもあるため、それ以上の口出しはなかった。
「だが二人だけでは心許ないし、逆に大人数では相手を警戒させてしまいかねない。……多くてもせいぜい四、五人といったところか」

「では、わたくしと彼は決定として、後は……」
グレンカが同僚を見渡す。だが、テンプス騎士学院の教官たちは一人残らず目を逸らしてしまった。海底迷宮に入って、無事に戻ってくる自信がないのだろう。
「ならば、ラナルにお任せくださいであります！」
いきなり手を上げたのはラナル教官だった。
「……で、ですが、誘拐されたのは我々の生徒……さすがに、マーテリアの先生の手を借りるなど……」
テンプス騎士学院の教官の一人が、慌てた様子で口を挟む。しかしラナルは「遠慮は無用であります！」と叫んで、
「生徒が戦地に赴くというのに、教官が指を咥えて待っているなどできないであります！」
「「……」」
暗に非難されたテンプスの教官たちが微妙な顔になった。ラナル自身にはそんな意図はなかっただろうが、気まずい雰囲気がその場を満たす。
「ふん、そこまで言われては仕方ないな」
そんな空気を払拭するように、鼻を鳴らしたのはバレットだった。
「私も行こう。レベル4の迷宮なら何度か挑戦したことがある」
「……ちっ、面倒だが、俺もじっとしている訳にはいかねぇか」
さらに、ベルガリアが舌打ち交じりに参加を表明する。
「ま、待ってください……っ！　せ、せんぱいが行くというのなら、あ、あたしたちだって……っ！」
だがそこでマロンが手を上げ、勇敢にもそう主張した。
「確かに急造の部隊より、普段から訓練をともにしている部隊の方が連携が優れているかと」
「海底迷宮って、なんか楽しそう！」
シスリーネもそれに同意する。ミィナはたぶん何も考えていない。
「こ、ここはわいも行く言うといた方がええんかな……？」
と、ヂャンクがこわごわと口にしたそのときだった。
「いいえ。ここはわたくしたちにお任せいただきたいですわ」

いきなり会議室に入ってきたのは、金髪の少女と二メートルを超す巨漢。
アルレナとムストリアだった。

闇に呑み込まれた夜の海を、小型の船が進んでいた。
港の漁師に頼んで借り受けた漁船に乗っているのは、五人の男女。
喧々諤々の議論の末、レミア救助のため海底迷宮に赴くこととなったのは、ハンティスにサヤ、アルレナ、ムストリア、そして、グレンカ教官だった。
「しかし、本当によろしいのですか？　生きて帰ってこられるという保証はできません。わたくしはすでに覚悟はできておりますが……」
グレンカの不安はもっともなことだった。
正規の騎士団ですら容易には立ち入ることのできない迷宮に、まだ紋章騎士の候補生に過ぎない者たちが挑戦するのだ。
「無論、ベルガリア教官やバレット教官が、あなた方なら大丈夫であると太鼓判を押しておられましたので、それを疑うわけではないのですが……」
「心配は要らないわ」
彼女の心配をサヤが一蹴した。
「正直言って、あの場にいた誰よりも私たちの方が強いから。それが分かっているから、教官たちも認めてくれたのよ」
「あ、あなた方は、一体……」
グレンカは驚いたように目を瞠る。
「けどそうは言っても、お前たちが危険を冒す必要はなかったんじゃないか？」
ハンティスが問うと、三人から同時に冷淡な視線を向けられた。
「な、何か俺、マズイこと言ったか……？」
戸惑うハンティスに、アルレナが溜息交じりに言った。
「いい加減、わたくしたちに隠し事はやめていただけませんの？」
「な、何の話だ……？」
ぎくりとして、ハンティスは視線を逸らした。



「わたくし、ようやく思い出したのですわ。リース＝リガルジェント。それは帝国北方によくある名前などではなく、『メルカト救国史』に出てくる異国の英雄の名前ですわね？」

「いや……」

訊かれても分からない。そんな書物があることすら、ハンティスは知らなかったからだ。

「きっと二人ともそこから拝借したのでしょう。ですが、世間一般にはほとんど知られていない本ですし、偶然にも被ってしまったと考えるのは無理があるかと思いますわ。……ハンティス。あの少年は、リースとは決して無関係ではありませんわね？」

ほとんど確信を持って問われて、ハンティスは返答に窮した。

「……えっと……」

ハンティスは窺うようにグレンカへ視線を向けた。

「……お伝えいただいて構いません」

彼女が頷いてくれたので、ハンティスは三人にすべてを話すことにした。

当然ながら、三人とも大いに驚いた様子だった。

「いくら伯爵家の令嬢とは言え、グレンカ教官がいとも簡単に五億リブラをご用意されたことを考えると、普通の身分だとは思っておりませんでしたが……」

「びっくり」

「だけど、どうして今まで黙っていたのよ？」

「それは……」

「ハンティスさんは悪くありません。わたくしがそのようにお願いしたからです」

サヤから睨まれて怯むハンティスを、グレンカが擁護してくれる。

「確かに大っぴらにはできない話ですわね。ですが、教えていただいて助かりますわ」

「いえ。皆様を危険な目に遭わせてしまう以上、むしろ先に話しておくべきでした」

グレンカは少し恐縮したように言う。

「それともう一つ、みんなに伝えておきたいことがある」

それからハンティスは、彼女たちに屋上でのレミアとのやり取りについて話をした。

「明らかに様子がおかしかったんだ」

「操られていたんじゃないの？　例えば、〈幻惑〉とか……」

「いや、そんな感じじゃなかった」

サヤの意見に、ハンティスは首を振る。

チャンクが使うのを何度も見ているため、〈幻惑〉にかかった状態の人間の様子はよく知っていた。それとは明らかに印象が違ったのだ。

やがて船は目的地へと辿り着いた。

思ったよりも小さな島だが、どうやらこの島の中に入り口があるだけで、広大な迷宮は海の中に広がっているらしい。

浜辺に降り立った五人は、木々を掻き分けて島の奥へと進んでいく。

「ここです」

先頭を歩いていたグレンカが立ち止まり、強張った声で告げた。

鬱蒼と茂る樹木や雑草に半ば埋もれてしまってはいるが、そこには神殿を思わせる石造りの建造物があった。

「これが入り口だな」

一帯を覆い尽くす巨木の根っこの陰に、複雑な紋様が彫られた石扉を発見する。

力を入れて押すと、思いのほか簡単に開いた。扉の向こう側には、薄闇に支配された洞窟めいた空間が広がっている。

「それにしても久しぶりですわね。このメンバーで迷宮に入るのは」

「そうね」

「なつかし、しい」

第００部隊で最後に迷宮に潜ったのは、もう一年以上も前のことだった。

（……一時再結成、といったところか）

一瞬、この場にいない少年のことを思い出して胸に寂寥の想いが湧くが、ハンティスは頭を揺らしてそれを振り払った。

「行くぞ」

ヒヒイイイン！

嘶きが轟き、薄暗い迷宮内に反響した。半馬半魚の魔物・シーホースが足元に溜まった水を跳ね上げ、こちらへと突進してくる。

ハンティスは身を翻してその巨体を躱すと、右手を一閃。シーホースの首が血飛沫を上げて宙を舞った。一瞬遅れ、泣き別れた頭部と胴体が燃え上がる。

さらに返す刀で、ハンティスは別の一体の胸に剣先を突き入れた。心臓を的確に貫き、どうっと大きな身体が勢いよく倒れ込む。

しかしそのとき、背後からまた別のシーホースが迫っていた。

太い前脚に押し潰される——

その寸前、二筋の剣閃が躍った。

サヤが振るった双剣が、シーホースの前脚を刎ね飛ばしていた。馬の上半身が飛沫を散らして水中に倒れ伏す。

「サヤ、助かった」

「もう、あと一歩遅れていたら危なかったわよ」

と、苦言を呈してくるサヤだが、「後ろにサヤがいるの分かってたから」と、ハンティスは軽く返して、

「それより——」

「分かってる」

そのやり取りが終わる前に、オロボンという名の四足を有する怪魚が、大口を開けてサヤに喰らいつかんとしていた。

「ぐおー」

だがその胴をムストリアの大剣が切り裂き、オロボンは苦悶の雄叫びを上げる。素早く反転したサヤが双剣で止めを刺した。

そのとき、ハンティスたちの頭上を激しい風が吹き抜ける。

アルレナが射放った矢だ。

それは上から迫っていた体長一メートルを超す巨大蝙蝠・アフールに直撃し、吹き飛ばした。

彼女は弓型の紋章武装《殲滅弓》を構え、叫ぶ。

「上にも気をつけてくださいな！」

直後、五、六匹ものアフールが、さながら獲物を狙う猛禽類のごとく次々と滑空してくる。

「うおー」

ムストリアが豪快に跳躍。身を回転させつつ大剣を振るい、それだけで三体のアフールを仕留めてしまうと、アルレナが矢を連射し、撃ち漏らしたアフールを始末する。

二人がアフールに対応している間、ハンティスとサヤは周囲にいたシーホースやオロボンを相手取っていた。連携し、瞬く間に打ち倒していく。

気づけば、大量にいた魔物は一掃されていた。

「……意外と忘れてないもんだな」

「そうですわね。もっとも、わたくしとムストリアはずっと同じ部隊におりましたし、ハンティスとサヤも今は同じ部隊ですけれど」

一年ぶりとは思えないほど、四人の呼吸はぴったりだった。

それに、リースが抜けた穴も感じられない。

「……驚きました。まさか、これほどとは」

その光景を呆然と見つめていたグレンカが、感嘆の声を漏らす。

今のところ、身代金を運んでいる彼女が戦闘に加わることもなく、順調に迷宮を進んでいた。

迷宮の壁面は洞窟のようなごつごつした岩肌だが、その表面が淡い青色に輝いている。それが何とも言えない幻想的な美しさを醸し出していた。

だがその絶景とは裏腹に、迷宮内には数多くの危険な魔物が徘徊していた。数分も経たないうちに、再び大量の群れに遭遇してしまう。

「さすがに簡単には行かせてくれないか……」

剣を構え、交戦に備えるハンティスだったが、突然、ムストリアが前に出た。

「おらに、まかせて」

そう頼もしく宣言してから、彼は口ずさむ。

「――貪欲なる大蛇よ。呑み込み、押し潰し、破壊の限りを尽くせ」

発生したのは土砂の波濤だった。濁流のごとくうねり狂い、前方に現れた魔物の群れを一気に呑み込んだ。地系第三階位紋章術の〈土崩〉だ。

「えっ、ムストリアって詠唱できたの⁉」

「おらも、せいちょう、してる」

驚くサヤに、ムストリアはふふんと胸を張った。

ムストリアは詠唱が大の苦手だった。紋章詞がなかなか覚えられなかったせいだが、最近は頑張って挑戦しているようなのである。

今ので大半の魔物が圧殺されたが、中には土砂から這い出して襲いかかってくるものもいた。

ハンティスたちがそれらに対応していると、突然、迷宮の脇道から巨体が躍り出てきた。

ベヒーモス。短足で、ずんぐりとした丸みのある体軀。一見すると愛らしくも思える姿だが、その実、狂暴で獰猛な魔物だ。

己の頭部をも呑み込めそうなほど大きく顎を開くことができ、その長く鋭い牙と恐るべき咬噛力は、ドラゴンの鱗にさえ穴を開けるとまで言われている。

そのベヒーモスは一番後方にいたアルレナとグレンカに躍りかかった。

グレンカが応戦しようと身構えるが、

「〈氷盾〉」

アルレナが無詠唱で生み出した氷の壁が、ベヒーモスの強烈な突進を受け止めた。

さらに彼女はその手に透明な短刀を出現させると、ベヒーモスの太い猪首に突き立てた。鮮血が弾け、一瞬でベヒーモスの意識を刈り取る。巨体が飛沫を上げて倒伏した。

別の魔物を斬り捨てたところだったサヤが、目を丸くしながら訊いた。

「アルレナ、それは？」

「わたくしの二つ目の紋章武装ですわ」

そう言って、アルレナは氷の短刀――《氷狗牙》を血ぶるいさせた。

「いつの間に……」

「……後衛だからと言って、護られているばかりではいきませんから」

アルレナの声には、何か強い覚悟のようなものが籠っているように感じられた。

やがて五人はだだっ広い空間に出た。

「なんて数だよ⁉」

そこに広がっていた光景に、ハンティスは思わず叫んでいた。

天井におびただしい数のアフールが止まっていたのだ。

どうやらここは彼らの巣になっているらしい。本来なら青色であるはずの天井が真っ黒に染まっているのは、アフールが埋め尽くしているせいだ。

こちらの存在に気づき、狂暴な巨大蝙蝠たちが一斉に襲いかかってきた。

「ここはわたくしに任せてください」

そう言って、今度はアルレナが前に進み出た。

「おい、あの数だぞ？」

「ちょっと、アルレナ⁉」

「だいじょうぶ」

驚くハンティスとサヤだったが、それをムストリアが自信ありげに制してくる。

「さて……ハンティスとサヤにはまだ見せていませんでしたわね。それでは、お披露目といきますわよ、スレイプニル！」

アルレナの呼びかけに応じて、彼女の周囲に峻烈な風が巻き起こった。

姿を現したのは八本足の馬だった。サイズはフェニックスと同じくらいで、見事に均整のとれた馬体を、一切の瑕疵のない純白の毛並みが覆っている。豊かな鬣は白金で、神々しいまでの美しさ。

「〝天駆ける女王〟、力を貸しなさい！」

アルレナは毅然と、高位の風章霊と思しきその白馬に命じた。

『はぁ？　何でアタシがそんなことしなくちゃなんないわけ？』

しかし返ってきたのはやたらと不遜な返事だった。

気品あふれる姿とは裏腹に、白馬は何ともダルそうに言う。
『ちょーめんどーなんですけど？　そもそもアタシ、あんたの奴隷じゃないんですけどー？』
「我儘を言わないでくださいな。今は急いでいるのですわ」
そこで殺到する蝙蝠の集団に気づいた白馬は、思いきり顔をしかめた。
『――って、うっわー、あれなに、ちょーきもいんですけど？　人間とかふつーに喰いそうじゃん。けどアタシは章霊だし、別に食べられたりなんかしないから問題ないしー』
「……スレイプニル、もう一度言いますわ。わたくしに力を貸しなさい」
アルレナの声に苛立ちが混じる。すでに蝙蝠の群れはすぐ近くまで迫ってきている。
『だ～か～ら～、今日はそんな気分じゃな――』
「い　い　か　ら　黙　っ　て　力　を　貸　せ」
アルレナがキレた。
『いたたたた!?　ちょっ、尻尾は反則でしょ!?　痛い痛い痛いわよマジで！　あーもうっ、貸せばいいんでしょ貸せば!?　だからアタシの自慢の尻尾を引っ張るのだけはやめて！　ちょー痛いから！』
「次は最初からそうしてくださいな。でなければ引き千切って差し上げますわ」
そんな脅し文句を投げつけながら、アルレナは矢を番えた。
一本だけではない。
無数の矢を同時に番え、そして一斉に放った。
「紋章弓技――〈矢時雨〉」
まるで雨が逆さまに降ったかのようだった。
その一本一本が螺旋を描く峻烈な風を纏い、襲来するアフールを次々と殲滅していく。幾つもの甲高い鳴き声が連鎖し、辺りに響き渡った。
気づけばあれだけいた巨大蝙蝠が、一匹残らず物言わぬ肉塊と化していた。
「すごい……それに、いつの間に眷属章霊を……？」
その圧倒的な破壊力に、サヤが目を剥いて感嘆する。
アルレナの左手の掌には、確かに風章霊の契約紋章が刻まれていた。

「ふふふ、少しお転婆な子で、扱いが難しいんですけれど」
『……こいつ、マジ鬼なんだけど……』
スレイプニルが震える声で悪態をついたそのとき。
オオオオオオンッ！
迷宮の奥から、耳を劈する破壊的な雄叫びが響き渡った。
ズシンズシンと地響きを鳴らしながら、頭部に三本の角を有する巨大な魔物が姿を現す。
オドントティラヌスだった。
しかし以前、氷竜湖で遭遇した個体よりも一回り以上も大きい。五、六メートル級だ。
オドントティラヌスはその巨大な腕で、地面を掬い上げるように叩いた。
それだけで硬い岩盤が大きく抉れ、無数の岩石がこちらへと飛来してくる。雨のように降り注ぐそれらを、ハンティスたちはどうにか回避。
「こんどは、おらが、みせる、ばん。きゅくろぷす」
ムストリアの呼びかけに応じて、彼の足元に人型の何かが現れた。
高位の地章霊と思われる、筋骨隆々の一つ目の小人だった。
「ちからを、かして」
『ついにおいらの出番っスね！』
地章霊が意気揚々と叫ぶと、ムストリアの大剣が巨大化した。
元から大きかったが、もはやそれは剣と定義するのも憚られるほどに著大だった。刀身の長さがゆうに三メートルを超えている。
人間の力では到底、持ち上げることができないであろうそれを、しかしムストリアは血管がはち切れんほどに筋肉を隆起させて豪快に振り上げると、
「ぐおおおおおおおっ！」
魔物すらも怯ませるド迫力の怒号を張り上げ、オドントティラヌス目がけて振り下ろした。
『紋章剣技――〈大地破砕〉っス！』
斬るというより叩き潰すと評した方が良いだろう一撃が、オドントティラヌスの頭部にめり込み、そして粉砕し

た。

オオオオオオオッ!?

魔物の断末魔の声が響き渡った。巨大な魔物が呆気なく撃沈する。

ムストリアの剣は、たった一撃でオドントティラヌスの巨体を討伐してしまったのだった。

「ムスまで眷属章霊を使えるようになってたのかよ……」

「おらも、せいちょう、してる」

ムストリアは先ほどと同じ台詞を繰り返すと、出し抜けに胸元をはだけさせ、どうだとばかりに見せてきた。

確かに、地章霊のものと思しき紋章が刻まれている。

「ちなみに、うごく」

「いや胸筋ピクピクさせんな気持ち悪いから」

「やめてよ……」

ハンティスは思わず突っ込み、サヤが半眼で呻いた。

ムストリアの眷属章霊は一つしかない目をこちらに向けてくると、野太い声で名乗った。

『どもっス。自分、〝独眼の巨人〟っス。キューちゃんと呼んでくれたらマジ喜ぶっス！　以後、よろしくっス！』

「軽いな!?」

高位の章霊はどいつもこいつも個性豊かだが、これまた変わった奴だった。

迷宮内で快進撃を続ける少年少女たちを、その後方から秘かに見つめている大小二つの影があった。

『全員やるじゃねーか。あんな連中がまとめて付いてきちまうなんて、オマエもついてねーな』

その一つ、空中を浮遊する小さな影が、ケケケ、と不気味に笑いながら声をかける。

「彼女が暴走してしまったせいで、色々と予定が狂ってしまいましたねぇ」

応じたのは、大きな方の影だ。

『ケケケ、こりゃー、さっそく任務失敗かもなー？』

「いいえ、まったく問題ありませんよ」

茶化すように言う相棒の言葉を、彼は不敵に唇を歪めて一蹴する。

「いくら強くとも、所詮は子供。アレを相手にできるのは、帝都騎士団の精鋭部隊くらいですからね」

「……ここか」

やがてハンティスたちは、指定された身代金の受け渡し場所へと辿り着いた。

そこは先ほどよりもさらに広大な地下空間だった。

その半分近くを巨大な地底湖が占めている。

深さは分からないが、恐らく海と繋がっているのだろう。コバルトブルーの水面は美しく、まるで聖地に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚えた。

「皆様、ありがとうございます。こんなに早くここまで辿り着けるとは思いませんでした」

「お礼をいただくのはまだ早いですわ。……彼女の無事を確認し、身代金との交換を終えるまでは気を抜くことはできません。こちらは相手の人数すらも分かっていない状況ですし」

恐縮したように礼を言ってくるグレンカに、アルレナが周囲を警戒しながら返答する。

「……そうでしたね」

グレンカは五億リブラ相当の金貨を詰めたバッグを大事そうに抱えて頷いた。

湖の真ん中には古代の神殿めいた建造物があった。

湖上に架けられた橋を渡り、その建造物のある島へ。

そこにレミアの姿があった。

石段に腰かけていた彼女はこちらを認めて、ゆっくりと立ち上がる。

近くにあの白髪の姿は見当たらない。それどころか、彼女以外に誰一人としてそこにいなかった。加えて、彼女が拘束されている様子もなかった。

「……待っていたぞ」

重々しい声が響いた。その言葉通り、彼女は自分自身の意志でこちらを待ち構えていたようだった。

ハンティスは宿舎の屋上での攻防を思い起こす。

「……一体、何があったんだ？」
「何があった、だと……？」
ハンティスの問いに、レミアは昏く澱んだ瞳を細め、叫んだ。

「貴様らがレイオス兄様を殺したのだろう！」

空気が凍ったような心地がした。
「な……何を、言っているんだ？」
ハンティスはどうにかその問いを絞り出した。気づけば口内がからからに乾き、そのせいか声が掠れている。
「しらばっくれるな！　この人殺しめ！」
「ま、待ってくれ……あいつが死んだのは──」
その言葉を聞いた瞬間、レミアは激憤したように片眉を跳ね上げた。
「あいつだと……？　やはり、貴様は兄様のことを知っていたのだな！」
「っ！」
ハンティスの全身から血の気が引いていく。足元が揺らぎ、眩暈すら覚えた。
「貴様は確かに兄様のことを知らないと言った！　どうしてだ!?　もし貴様が兄様を殺した訳ではないと言うのなら、なぜそんな嘘をついたのだ！」
「それは、グレンカ教官からそうした方がいいとお願いされて……」
言いながら、ハンティスは助けを求めるように視線を後ろに向ける。
だがそこにグレンカの姿はなかった。
「ど、どこに……？」
「貴様らは兄の才能を妬み、死へと追いやったのだろう!?　結局、あのぼくを襲った小隊の連中と同じだったのだ！　皇宮の貴族たちもそうだ！　なぜ貴様らはそんなにも醜いことができるのだ！」
狼狽えるこちらなど意に介さず、レミアはなおも言い募ってくる。
「信じてくれ、レミア！　俺たちは、あいつを殺してなんかっ……」

「黙れ！　貴様の言うことなど信じられるか！　ぼくはっ……貴様のことをっ……」
不意に哀しげな表情を見せたレミアだったが、すぐに怒気で上塗りした。
「ぼくは兄様に成り替わり、貴様たちを断罪する！」
そう断言して、彼女は紋章武装を顕現させた。
「……」
きっと今の彼女にいくら真相を語っても無駄だろう。
そうと悟ったハンティスは、説得を諦めて単独で歩み出た。
驚くサヤたちを制し、ハンティスはレミアと対峙する。
「……分かったよ。俺に復讐したいというのなら、そうすればいい」

小さなボートが夜の海を進んでいた。
静寂の中に、水を切る音と荒い呼吸音が響いている。
「うー、やっぱりオールで漕ぐの大変だよぉ～。腕がパンパン……」
「仕方ないではありませんか。漁船を借りることができなかったのですから」
「こんな小さなボートやと、魔物に襲われたら一溜りもないで？」
「大丈夫です。一般的に港の近くにあまり魔物は出没しませんから。……それよりマロン、大丈夫ですか？」
「う、うん……お花畑が見えるけど……きっと、だいじょうぶ……」
「マロン!?　マロン、帰ってきてください!?」
ボートは完全に人数オーバーだった。すし詰め状態でそれに乗っているのは、ハンティスとサヤを除く第２９部隊のメンバーたちだ。
「それより、ほんまに行く気なんか？　しかも姐さんらに内緒で……」
「今さら何を言っているのですか。それに、たとえ説得したところで許可を貰えるとは思えません」
不安げに問うチャンクを、船酔いで苦しむマロンを介抱しながらシスリーネが睨んだ。
「……嫌な、予感がするんです……」

顔を真っ青にしながら、マロンが主張した。
「ミィナは何も感じないよ！」
「能天気なあなたはそうでしょう」
四人は海底迷宮のある無人島へと向かっていた。
さらわれたテンプス騎士学院の生徒を助けるため、無人島に向かったハンティスたち。彼らの実力は確かだ。レベル4の迷宮と言えど、きっと危なげなく踏破してしまうだろう。
だが、マロンには不安があった。
あのとき、あの少年は明らかにハンティスを殺す気だった。
怨念めいた感情で凝った目。
それがマロンの頭から離れないのだ。
無論、レベル4の危険な迷宮にこのメンバーだけで入ることはできない。だがせめて無人島で、彼らが帰ってくるのを待とうと考えていた。
「まだ着かんのかな……？　夜の海って、ほんま怖いな……」
チャンクがびくびくしながら呻いた、ちょうどそのときだった。
突然、大きな水飛沫が上がったかと思うと、月明かりに照らされて体長一・五メートルほどの影が夜陰に躍る。
全身が鱗に覆われた半人半魚の怪物だった。海面から飛び出し、ボート目がけて襲いかかってくる。
「マーマンっ⁉」
「やっぱ魔物が出るやんかぁぁぁっ！」
「どりゃあぁっ！」
ミィナが咄嗟に鉄拳型の紋章武装を顕現させ、マーマンの顔面を殴り飛ばした。吹き飛んだマーマンは近くの水面に落下し、巻き起こった波でボートが大きく揺れる。
「仕留めたか⁉」
「ううんっ、たぶん致命傷じゃないよ！」
ミィナが言う通り、再びマーマンが水中から跳び上がってきた。
「《凍結姫》！」

シスリーネがレイピア型の紋章武装を顕現させ、全力で投擲。空中でマーマンを串刺しにし、今度こそ息の根を止めて海に沈めた。
「「「っ⁉」」」
だがその直後、激しい衝撃とともにボートが弾かれたように海の上を滑った。彼女たちは海に落下しそうになったが、どうにか堪える。
何かが体当たりしてきたのだ。
「……どうやら、一匹だけではなかったようですね」
シスリーネが強張った声で呟く。
しかし月明かりがあるとは言え、辺りはほとんど真っ暗。加えて敵は水中に潜んでいる。どこにいるか分からない。
「──聖なる光よ、闇を照らせ。うぷっ……」
マロンが吐きそうになりながらも、第一階位の〈光球〉を発動した。
周囲一帯が明るくなった。
「け、けっこうおるで⁉」
チャンクの悲鳴が夜空に響く。
海上から判別できる背びれや影だけを数えても、少なくとも四、五匹はいるようだ。
その内の一匹が高速でボートへと迫ってきたかと思うと、再び体当たりを見舞ってきた。
慌ててボートにしがみ付いて耐えるが、今にもボートごと引っくり返りそうだ。
「くっ……水中の敵とはやはり戦い辛いですね……」
シスリーネが歯噛みする。
先ほどのように海中から飛び出してくるならまだしも、ボートを狙われると対処しようがない。万が一このボートが転覆させられでもしたら、一巻の終わりだろう。それにこの強度では、何度も体当たりを喰らえば破壊されてしまうかもしれない。
「あっ、そうだ！」
いきなりミィナが瞳を輝かせた。

「海に電撃をぶつければいいんだよ！」

どうやら先日、シオンが湖でオドントティラヌスを呼び覚ましたときのことを思い出したらしい。確かにそれなら、海にいる魔物にもある程度のダメージを与えられるかもしれない。

「ミィナにしては良いアイデアですね」

「ほんまや！　ミィナにしてはな！」

「わぁいミィナ、褒められちゃった！　じゃあ、行っくよー」

ミィナが軽快な掛け声とともに、ボートから大きく身を乗り出した。

しかしそのせいでボートの重心が大きく傾ぎ――ひっくり返った。

「この馬鹿ミィナ！」

「ごっめーん！」

四人の絶叫が海上に轟き、水音が連響する。

マロンは宙を舞い、それから真っ暗な海へと叩き落とされた。視界が澱み、全身にねっとりとした水が纏わりつく。本日二度目の強制素潜りだった。

「ぶはっ」

マロンはどうにか水面に浮かび上がると、肺一杯に空気を吸い込んだ。すぐ近くでシスリーネも顔を出した。

「マロン、大丈夫ですか⁉」

「う、うんっ……」

「こ、このままやと喰われるで！」

「ミィナは美味しくないよ⁉　自分で食べたことないから分からないけど！」

すでに周囲をマーマンに完全包囲されていた。

しかし先ほど仲間の一体を仕留めたことで警戒しているのか、すぐには襲いかかってこない。確実に獲物を捕らえるため、体力が失われるのを待っているのかもしれなかった。

ぐるぐると旋回しながら、ゆっくりとその包囲網を縮めてきている。

「み、水の中だとっ……攻撃ができないっ……」

「ねぇねぇ、ここでビリビリさせたらダメかな？」

「私たちまで巻き込むつもりですか！」

絶体絶命のピンチだ。

「……ああ、女の子とイチャイチャしたいだけの人生やったわ……」

ヂャンクが最悪過ぎる辞世の言葉を呟いたそのとき、頭上を何かが横切った。

槍だ。驚くべきことにそれは、今まさにこちらに迫りつつあったマーマンの背中を見事に貫いていた。絶命した魔物がプカリと海面に浮かぶ。

「これに捕まれ、馬鹿どもが！」

聞き慣れた怒号が轟き、漁獲用の網が頭上から降ってきた。

マロンたちはそれに必死にしがみついた。

獲物を逃がすまいとマーマンが殺到してきたが、彼らに氷の矢が降り注いだ。

何体かは直撃したようだが、その多くは慌てて水中へと逃げ込んでいった。

その隙に、マロンたちは漁船と思しき船に引き上げられる。それほど大きなものではないが、さすがにボートと比べればずっと広い。

「まったく、何をしているんだ、貴様らは！」

甲板に立ち、強い叱責の声を飛ばしてきたのはバレットだった。どうやら先ほどの槍は彼女が投擲したものらしい。

いつにない剣幕にマロンたちが慄いていると、彼女は深々と溜息を吐き出して、

「宿舎から出ていくところを見たという生徒がいたから、まさかとは思っていたが……。もし航路がズレていたり、私たちが通りかかるのが遅かったりしたら、今頃は奴らの餌になっていたぞ？」

船の上にはベルガリアやラナル、さらにはテンプス騎士学院など他の騎士学院の教官たちの姿もあった。

「ど、どうしてここに……？」

「生徒らが危険を冒して迷宮に潜ってんだ。大人しく宿舎で待ってられっか。それにもし連中が戻ってこなかった場合、第二陣として迷宮に入る必要もあるだろうしな」

マロンが訊くと、ベルガリアからはそんな答えが返ってきた。

「あ、あたしたちも、せんぱいたちのことが心配なんです……っ！　つ、連れて行ってくださいっ……っ！」

マロンは必死に嘆願する。だがベルガリアは視線を明後日の方向へと向けた。
「連れていくも何も、もうそこじゃねぇか」
「……っ？」
彼の見ている先を追うと、いつの間にか暗闇の中に島影が浮かび上がっていた。

レミアが放った光弾がハンティスの頬を掠め、遥か後方の石壁を穿孔した。
焼けつくような痛み。頬の皮膚は火傷を負っていた。
それでも顔色一つ変えず、ハンティスは静かに目の前の少女を見つめる。
「……貴様、どういうつもりだ？」
レミアが獣のように眼光を鋭く細め、こちらをねめつけてきた。
ハンティスは丸腰だった。
それどころか、ただ無防備にその場に立ち尽くすだけ。
レミアは屈辱を覚えたのか、ぎりぎりと音が鳴るほど歯を噛み締め、唸るように言った。
「次は外さないぞ」
再び撃ち出される光弾。宣言通り、今度はハンティスの右肩に直撃した。
それなりに高い強度を誇る制服が容易く破け、全身を駆け抜けた激痛にハンティスはさすがに顔を歪めた。
さらにレミアは追弾を放つ。今度は左の太腿に浴びた。
「っ……」
よろめくが、それでもハンティスはどうにか踏み止まった。やはり太腿の制服は焼け焦げ、爛れた肌が露出している。
「ハンティス！」
「何をしているんですの⁉」
「……大丈夫だ」
背後からの悲鳴を、しかしハンティスは痛む右腕を水平に上げて黙らせる。

「……貴様が何を考えているのか知らないが、関係ない。ぼくは必ず、レイオス兄様の無念を晴らしてやる」
復讐に燃えるレミアはその言葉通り、まるで容赦しなかった。
ハンティスの胸に、腹に、足に、腕に、次々と光弾が着弾し、その度に地獄のような痛みが襲いかかる。
それでもハンティスは倒れなかった。それどころか己の血を浴びた顔で凄惨に微笑み、レミアを挑発する。
「どうした？　それじゃあ、俺は殺せないぞ？」
レミアは鋭く目を細めた。
「……これなら、どうだ」
銃剣の先端が煌々と輝いた。その光は見る見るうちに強さを増していき、まともに目を開けていられない。
充填しているのだ。
「喰らえ。紋章銃技――〈暁ノ彗星〉」
網膜を灼く閃耀が弾け、光が虚空を貫いた。
次の瞬間、それは真っ直ぐハンティスの胸を撃ち抜いていた。
「がっ」
血を吐くような苦鳴を上げながら、ハンティスは凄まじい衝撃と激痛を受けて後方へと吹き飛ぶ。サヤたちのすぐ足元まで地面を転がった。
「何をやっているの⁉」
「す、すぐに治療をっ……」
慄くサヤたち。だが地面に伏したままハンティスは首を振った。
「……大丈夫だ」
歯を食い縛り、立ち上がる。唖然とする彼女たちを後目に、ふらつく足で一歩一歩、レミアに向かっていく。
「な……ば、馬鹿なのか、貴様は……？」
「さぁな」
当惑した顔のレミアに、ハンティスは口端を吊り上げ、不敵に笑ってみせた。
レミアは眉をしかめ、
「……ぼくの〈暁ノ彗星〉に耐えたことは褒めてやろう。だが、先ほどのはまだまだ序の口だ。……次は本気でい

くぞ」

「なんだ、今のは本気じゃなかったのか？　仇を前に案外悠長だな」

「っ……黙れ！」

レミアは怒声を上げ、再び銃口に光を充填していく。

「……今度は、確実に殺す」

「ああ。お前がそうしたいというのなら、俺は甘んじて受ける」

こちらを憤怒に凝った瞳で睨みつけてくるレミアに、ハンティスはすべてを受け入れたような顔で頷いた。背後でサヤたちが息を呑む音が聞こえてくる。

銃口がこちらへ向けられた。

先ほどのそれを凌駕する、燦々たる輝き。しかし圧倒的な殺傷力を秘めた死神の刃を突きつけられても、ハンティスは動じなかった。

「――けど、最後に一つだけ聞かせてくれ」

「……この期に及んで、命乞いか？」

びくりと片眉を上げ、レミアが恫喝じみた声を出す。

「そうじゃない」

と、ハンティスはきっぱり否定してから、

「何でお前は、さっきからそんなに辛そうなんだ？」

「っ……」

レミアは目を瞠った。ハンティスはもう一度その疑問を繰り返した。

「何で俺に攻撃しようとする度に、そんなに苦しそうな顔をするんだ？」

「……ち、違う！　ぼ、ぼくはっ……」

咄嗟に反論しようとしてくるレミアだったが、しかしその目は混乱したように泳ぎ、言葉が出てこない。

「違わないだろ。それだけ必死になって隠していたら、誰だって分かる」

ハンティスは気づいていた。

彼女の憤りの奥に隠された、苦悶の表情に。

「ぼくはっ……兄様のっ……兄様の仇を取るのだ……っ！」

そう頑なに主張するレミアだったが、その瞳は揺れていた。

「……けれど……」

一筋の雫が頬を伝う。

「……相手が、お前じゃあ……できる訳がないではないか……っ！」

彼女の声には嗚咽が混じっていた。

「レミア……」

「だって……兄様以外に……初めて心を許すことのできる男……だったのだ……」

顔をくしゃくしゃに歪めながら、彼女は告白した。

「……お前が……もっと嫌な奴だったら……どんなに良かったか……」

肩が震え、堰を切ったように涙が滂沱と零れていく。

「……」

ハンティスはボロボロの身体に鞭を打って、足を前に進めた。

無防備に晒された隙。レミアがその気になれば、いつでも簡単に止めを刺すことができるだろう。

だが、彼女はそうしなかった。

やがてハンティスはそっと彼女を抱き締めていた。

「っ……」

レミアは身体を強張らせたが、拒絶しようとはしなかった。

「レミア、もしかしたら信じてくれないかもしれない。……けど、それでも、俺は……俺たちは――」

自分がリースを殺したのではないか。

以前はずっとその罪悪感に苛まれていた。

だが、そんなことを彼が望んでいるはずがないのだ。

「――お前の兄貴を殺してなんかいない」

だからハンティスは断言した。
「その言葉を……信じて……いいのだな……？」
恐る恐る、レミアが訊いてくる。
「ああ、俺を信じてくれ」
「……」
二人の間に沈黙が落ちる。そして——

「……嘘だ」

怨念の籠った呟きがレミアの唇から零れた。
「レミア……？」
「ハンティス！　何かいますわ！」
アルレナの声にハッとして顔を跳ね上げたハンティスは、頭上で浮遊している不気味なモノに気づいた。
『ケケケケ、そうはさせねーよ』
それは真っ黒い猫だった。
フェニックスと同じくらいの大きさ。目が三つあり、口からは肉食獣のような鋭い牙が覗いている。背中には一対の翼が生え、お尻には先端の尖った尾が伸びていた。
「まさか、堕章霊っ……？」
『こいつの心ん中、愛憎でぐっちゃぐちゃになってて、すげぇおいしいんだ。そう簡単には譲れねーぜ、ケケケ』
それはくるくると虚空を回り、嘲るような声を漏らす。
途端、レミアの全身からどす黒いオーラ——邪気が立ち昇った。
「……殺す。殺してやる……」
「レミアっ！　負の感情に呑まれるな！」
「兄様の仇……兄様の仇……貴様は、兄様の仇だ……」
ぶつぶつと、地の底から湧き出してくるような怨嗟が吐き出される。その瞳は憤りに燃え盛りながらも、どこか虚ろで、こちらの声が届く様子はない。
「くそ！」
ハンティスは咄嗟にレミアを押し倒していた。馬乗りになり、武器を使えないよう、両腕を押さえ込む。
「正気に戻れ、レミア！」
「——それは闇を照らす閃き」
「っ！」
ハンティスが必死に訴えるも、突然、レミアが紋章詞を唱え始めた。
（これは、まさか……）
一度だけ、リースが発動したのを見たことがある。
光系第四階位紋章術〈灼閃耀〉。
戦慄するハンティスの頭上に、著大な立体図形が出現した。
光章霊の立体紋章。だが信じがたいことに、それが煌々と放射する光は夜の闇よりもなお濃い漆黒に染まっていた。
しかもレミアはこの場所——自分自身に照準を合わせている。
——刺し違えてでも貴様を殺してやる。
彼女の瞳がそう語っていた。
ハンティスは彼女から離れようと、押さえていた腕を手放す。
だがその瞬間、逆にこちらの腕を掴まれた。
すぐに振り解こうとするが、
「っ!?」
全身に違和感。傷のせいではない。まるで身体が鉛と化したかのように、思うように動かなくなったのだ。
（なんだ、これは……？）
「——それは魔を滅する耀き」
感情を押し殺したような淡々とした声音で、詠唱が続いていく。その文言とは裏腹に、魔に染まった光が一帯を眩く照らした。

「ハンティス、何やってるのよ⁉」
「まずいですわ！」
サヤたちがすぐさま駆けつけてこようとするが、
「っ！　身体がっ……」
「これは……〈影縛〉っ……？」
彼女たちもまた何かに身体を束縛されたかのように、突然その動きを鈍らせた。
（くそっ、どうする⁉　このままだと二人揃って……いや、こいつはサヤたちまで巻き込むつもりだっ！）
ハンティスの背筋を戦慄が貫く。
「――それは天地を貫く絶対の灼矢」
詠唱が最終段階に入った。
すでに二人の頭上では、膨大な威力を秘めた黒い光が収束している。
（どうすれば……っ）
焦燥が募る。だがそのとき、この状況を打破することができるかもしれない唯一の方法がハンティスの脳裏に閃いた。
（けど、さすがにそれは――いや、迷っている暇はない！）
ハンティスは一瞬躊躇したものの、すぐに覚悟を決めた。
「レミアっ！　すまない！」
先んじて謝罪し、ハンティスはそれを決行した。
「――往け。その先にあるは、永遠の楽……むぐっ⁉」
レミアの詠唱が強制的に途切れる。

ハンティスは自分の口で彼女の口を塞いだのだ。
何とも言えない柔らかな感触と熱が、唇を通して伝わってくる。
「〜〜〜〜っ!?」
レミアは眦が裂けんばかりに目を見開いた。
ハンティスは唇を離す。
「な、な、な、なっ……」
抜け落ちていた理性の光がレミアの瞳に戻ってくる。と同時に、見る見るうちに顔が真っ赤になっていった。
「っ……悪いな、こうするしかなかったんだ……」
どうにか術の発動を防ぐことに成功したハンティスは、安堵しつつそう謝罪した。
対照的に涙目になっているレミアからは、いつの間にか剣呑な気配が消え去っていた。
だがそれと入れ替わるように、ハンティスの背後で強烈な殺気が渦を巻いていた。
「ねぇ、ハンティス……今、何をしたの……？」
その声に、ハンティスはゼンマイ人形よろしく首をぎこちなく回した。
鬼の形相をしたサヤがそこにいた。
「い、今のはそれ以外に方法がなかったんだよ！　仕方ないだろ!?」
「……変態、死ねばいいのに」
ハンティスは懸命に訴えるが、ばっさりと切り捨てられた。
「と、とにかく」
未だ顔を赤くして俯いていたレミアを、ハンティスは抱き起こした。先ほどまでいた堕章霊はどこかに行ってしまっている。
「レミア、俺たちはお前の兄貴を殺してなんかいない。絶対にだ」
「だ、だが……」
「そもそもお前は一体、誰からその話を聞いたんだ？　あの変な白髪の男か？」
「……い、いや、そうではない」
レミアは戸惑いながらも首を振って否定する。まだ呆然とした様子ではあるが、どうにか会話は成立しそうだ。

「じゃあ、誰なんだ……？」
「ぼくは、グレン――」
レミアが言いかけた、そのときだった。
ハンティスの腹部に焼けた鉄を押しつけられたような灼熱の痛みが走った。
「な……」
恐る恐る視線を下げる。
レミアの胸部から漆黒の刃が生えていた。それは彼女の身体を完全に貫通しており、その先端がハンティスの腹部に刺さっている。
「がっ……」
レミアが口から吐き出した大量の血が、ハンティスの顔にかかった。
彼女の背後にいたのは、あの白髪の男だった。
（い、いつの間に……？）
だが次の瞬間、男の身体が陽炎のように揺らいだかと思うと、その姿が別人に変貌していた。
ハンティスはその人物を認めて我が目を疑った。
「グレンカ、教官……？　まさか……」
そこにいたのはテンプス騎士学院の教官だった。
彼女は臭白んだ様にこちらを見下ろしながら、手にしていた漆黒の剣を無造作に引いた。
ハンティスの腹部、そしてレミアの胸から刃が抜け、大量の血が辺りにぶちまけられる。
二人は揃って地面に倒れ込んだ。
「は、ハンティス！　大丈夫ですのっ？」
「俺は、大丈夫だ……それより、先にレミアを……」
「っ！」
すぐに駆けつけてきたアルレナが、レミアの傷を見て息を呑む。
それでも彼女は表情を引き締めると、すぐに〈治療〉をかけ始めた。緑色の光がレミアの患部を包み込む。
「お前、だったのか……レミアに、偽りの情報を教えたのは……」

顔を歪め、ハンティスは自分に第一階位の《癒し》をかける。だが、焼け石に水程度の効果しかない。
「ええ、そうです。相変わらずの世間知らずで、騙すのはとても簡単なことでしたよ」
グレンカはあっさりと白状した。その態度からは、躊躇いや罪悪感といった感情を一切覗うことができなかった。
「き、貴様……な、なぜ……」
真っ青な顔で口端から血を垂らしながら、レミアがグレンカを睨みつける。
グレンカは羽虫でも見るかのような目をして、言った。
「あなたのせいですよ、レミア様。あなたが手前勝手な理由で、皇宮を飛び出してしまわれたせいです」
「っ……」
息を呑むレミアに、グレンカは淡々とした声で続けた。
「分かりませんか？　仕えていた主人が勝手に皇宮を出てしまったのですよ？　お陰で選任騎士であったわたくしは皇帝陛下の怒りを買い、皇宮から追放されてしまいました」
「……ま、待て……。き、貴様は、自分の意志で……皇宮を、離れたと……」
「そんなわけがないでしょう？　誰が自ら皇族の地位を捨てるような愚かな小娘のために、好き好んで騎士学院の教官などという立場にまで落ちぶれたりしますか？」
「グ、グレン、カ……」
信頼していた相手が明かす本音に、レミアは愕然と目を見開く。
「あ、あなたには忠誠むというものがないの!?」
「ええ、ありませんね。そんなもの、何の意味があるのでしょうか？　それに、わたくしはあくまで皇女殿下であるから従っていただけです。皇家をお離れになった時点で、レミア様はもうわたくしの主人ではないでしょう？」
声を荒らげるサヤの指摘を、グレンカはさも当然とばかりに一蹴する。
「そして自分にとって価値がなくなった相手を切り捨てるのは、人として当たり前の行為でしょう。要らなくなった物を捨てるのと同じです。ですから彼らに協力させていただくことにしたのですよ」
（こいつは……）
その彼女の回答に、ハンティスはうすら寒いものを感じてしまう。彼女の口振りから察するに、自分の考えを何一つとして疑っている様子はない。

『ケケケ、オイラのご主人様はなかなか壊れてるだろー？』
そのとき突然、彼女の傍に先ほどの堕章霊が姿を現した。
「そうでしょうか。わたくしとしては至って正常のつもりですが」
小首を傾げて、グレンカは平然と応じる。
『かつての主君を何の躊躇もなく背後から刃物で刺せるなんて、どう考えても正常じゃねーよ、ケケケ』
「そうですか。ちなみに〝異界の楽園〟に加入し、あなたとの契約を結んだのも、あくまでも利益があると踏んだからです。もしそうでないと分かったときは、手を切らせていただきますので」
『分かってるって、ケケケケ』
「異界の楽園……？」
彼女の口から出た聞き慣れない言葉に、ハンティスは眉をひそめた。
「あなたが知る必要はありませんよ。どのみちここで死んでいただくのですから」
「何だと……？」
「勘違いされているかもしれませんが、わたくしの目的は別にそこの頭の悪い皇女様を殺すことではありません。あなたを始末することです」
「っ……俺を……？」
ハンティスは息を呑み、表情を険しくする。
しかしグレンカは、あくまでも淡々として、
「もっとも、この場にいる全員まとめて死んでいただくことになるかと思いますが」
「……随分と余裕じゃねぇか！　お前一人で何が──っ……」
怒声を発したハンティスだが、そのとき腹部に負った傷の痛みが全身を貫き、途中で継ぎ句を呑み込んだ。
「……ハンティス、あなたは下がっていて」
「ゆる、さない」
サヤとムストリアが前に出た。
だがグレンカはまるで動じる様子もなく、至って冷静に紋章詞を唱えた。
「──開キ給ヘ暗黒ノ大扉。全テハソノ深淵ノ最奥ヘト消エ去リテ無トナル」

彼女の足元に四角い影が生まれた。その中に潜り込み、姿が完全に消える。
「またこの紋章術っ……」
「どこに？」
サヤとムストリアは足を止めて周囲を見渡した。
「こっちですよ」
「っ！」
グレンカの姿は神殿の上にあった。
「闇系第三階位紋章術の〈影界〉。なかなか便利な術でしょう？」
恐らく先ほどもそれを使って、レミアの背後に回ったのだろう。
「わたくしは戦闘そのものはあまり得意ではありません。ですので、代わりにこんなものをご用意させていただきました」
グレンカの言葉に、ハンティスたちは嫌な予感を覚えて身構えた。
「湖の中に何かいるわ！」
サヤが叫んだその直後、水中から巨大な影が浮かび上がってくる。
最初に顔を出したのは、無数の吸盤を持つ紫黒色の触腕だった。
「クラーケン……？」
次の瞬間、水面が丘陵のごとく盛り上がった。
「違うわ……これは……」
一帯に凄まじい水飛沫が四散し、遅れて大量の水がさながら滝と化して水面に叩きつけられる。それが大きな波を生み出し、ハンティスたちのところまで押し寄せてきた。
激しい水流に足を取られそうになりながらも、四人は頭上を仰ぎ見なければならなかった。
「でかい……」
と、ムストリアが思わず零してしまうほどに、それはあまりにも巨大だった。
見た目は蛇。だが、海上に現れた頭部だけでも軽く十メートルを超えている。
大きく裂けた口には鋭い牙が並び、それら一本一本が人間の大人の身長にも匹敵するほど。硬質の鱗に覆われ、禍々しい突起物が頭のあちこちから飛び出している。
そして信じられないことに、その牙の隙間から何本もの太い触腕がだらりと垂れていた。
クラーケンが呑み込まれているのだ。
はみ出していた触腕が、洞窟めいた口腔の奥へと完全に消えていく。
クラーケンすらも捕食してしまうと言われているその怪物を、ハンティスは文献で見たことがあった。
「……海竜、ラハブ……？」
オオオオオオオオオオオオオオッ！
海のドラゴンが吐き出した凄まじい雄叫びが、ハンティスたちの鼓膜を震わせた。
その圧倒的なまでの迫力に、ハンティスたちは気圧されたようにその場に立ち竦む。
そのとき、アルレナが血相を変えて叫んだ。
「……だめですわ！　傷が深過ぎます！　わたくしの〈治療〉だけでは、維持するのが精いっぱいですっ……。数人で重ねがけしなければ……」
すでにレミアは意識を失っていた。顔は蒼白で、血の気が感じられない。
ハンティスは即座に決断する。
今はドラゴンとやり合っている余裕などない。
「すぐにここを脱出するぞ！」
「分かったわ」
「りょうかい」
ムストリアがレミアを抱きかかえる。ラハブに警戒しつつ、四人は背を向けて走り出した。地底湖にかけられた橋を渡っていく。
「申し上げたでしょう？　この場にいる全員まとめて死んでいただくと」
だが橋を渡り切ったその先にグレンカが待ち構えていた。また〈影界〉を使ったのだろう。
「邪魔よ！」
サヤが加速し、グレンカに肉薄する。
しかしどういう訳か、グレンカは不気味なほどに落ち着いていた。それどころか、口端をこちらを嘲弄するかの

ように吊り上げて――

「っ!」

サヤは寸前で足を止め、咄嗟に自身の頭上に迫っていた影に対応した。

水の太刀が閃く。胴体を両断されて落下したのは、巨大な蝙蝠――アフールだった。

一匹だけではない。次々と飛来し、サヤに襲いかかる。

「なっ……」

二刀を振るって応戦しながら、彼女は愕然として声を漏らす。

この地下空間に通じる道という道から、魔物の大群が押し寄せてきたのだ。

迷宮中の魔物が集まってきたのではないか。

そう思ってしまうほどの数だった。

「すべての魔物を支配下に置いている余裕はありませんでしたので、魔物が好む特殊なニオイの元をこの辺りに大量に撒いておきました。人間の鼻では嗅ぎ取ることができないものなので、気がつかなかったでしょう?」

そう明かすグレンカは、またも〈影界〉を発動し、すでに足元に現れた影の中へと半身を埋めていた。

逃げるつもりなのだ。

そうはさせまいと、サヤとムストリアが彼女に迫るが、

「それでは、わたくしはこれで失礼させていただきます」

それだけ言い残して、彼女の姿は影の中に消えてしまう。

直後、寸前まで彼女がいた空間を魔物が次々と駆け抜けた。

「ここに海底迷宮が……」

無人島へと上陸したマロンは、ごくりと喉を鳴らしていた。

辺りは真っ暗で視界が悪い。いつ魔物が襲ってくるか分からない状況に、緊張で身体が硬くなる。

「心配はいりません、マロン。原因は分かっていませんが、基本的に迷宮内の魔物が迷宮の外に出てくることはありませんから」

「さっきじぶんが似たようなこと言った直後に、マーマンに襲われてもうたけどな……」

「死ぬかと思ったよね!」

「あ、あれは運が悪かっただけですっ……」

そんな言い合いをしながら島の奥へと進み、やがて鬱蒼とした木々に覆われた遺跡が姿を現した。

出入り口の門扉を発見する。

中を覗き込むと、薄暗い空間がずっと奥まで続いていた。

「ここであいつらの帰りを待とう」

パレットが崩れかけた壁にもたれかかる。それに倣って、マロンたちも思い思いに近くの段差や太い木の根っこなどの上に腰かけた。

そのときだった。

オオオオオオオオオオオオオオオッ!

どこからか地鳴りのような音が響いてきた。

「……おいおい、何だってんだよ、今のは?」

いつも飄々としているベルガリアが珍しく焦ったような声を出す。

「め、迷宮の中から、聞こえてきたような……」

「私にもそう聞こえました」

マロンの胸に不安が湧き起こり、石扉の奥へと視線を向けた。

扉を潜った先は緩やかな下り坂になっており、見ているとこれは地獄にまで通じているのではないかという錯覚に陥ってしまう。

そのとき、薄闇の中で何かが動いたのが見えた。

「何者だ!?」

叫んだのはパレットだ。辺りに彼女の声が反響した。

「わたくしです」

返ってきたのは、聞き覚えのある声。

洞窟の奥から、テンプス騎士学院の教官服を着た女性が姿を現した。

グレンカ教官だった。

「戻ってきたか」

ほっとしたように、バレットが息を吐く。

グレンカは見たところ負傷している様子もない。さすがに少し疲弊しているようではあるが、それでも毅然として頭を下げてきた。

「受け渡しは成功いたしました。皆様のお陰です。ありがとうございました」

それから、こちらの懸念に応えるように、

「彼らは少し遅れていますが、すぐに戻ってくるはずです」

良かった、とマロンも安心して息を吐く。どうやら不安はただの杞憂に終わったようだ。

しかし、ふと違和感を覚える。

（……でも、どうして別々に戻ってきたのだろう？　それに、なんだか変なにおいが……これは……血……？）

くらり、と突然の眩暈に襲われたのはそのときだった。

マロンは咄嗟に唇を噛んだ。皮膚が破け、痛みとともに鉄の味が口内に広がる。

気づけば、シスリーネやミィナ、教官たちがバタバタと倒れていた。

「……まさか、〈催眠〉っ……？」

襲いくる強烈な眠気に耐えながら、マロンはこの現象の正体を察して叫んだ。

「意外と察しがいいようですね」

そんな中、グレンカだけが平然として、冷ややかな視線をマロンに向けてきていた。

第五章
海竜

Irregular's Rebellion

ハンティスたちは魔物の大群と交戦を繰り広げていた。
襲いくるシーホースやオロボン。ハンティスは《獄炎剣》を振るいながら、腹部に走った激痛に顔をしかめた。
「くっ……」
「ハンティス、大丈夫っ⁉」
負傷した腹部にかけたのは、第一階位の〈癒し〉だけだ。辛うじて皮膚が塞がる程度までは治したものの、また傷口が開いてしまったようだった。制服に滲んだ赤い染みが、徐々に広がり続けている。
「――貪欲なる大蛇よ。呑み込み、押し潰し、破壊の限りを尽くせ」
ムストリアが〈土崩〉を放ち、殺到する魔物を土砂の波濤で押し返す。
それで一時的に魔物の攻勢を途切れさせたが、しかしそこへ頭上から巨大な影が降ってきた。
ラハブだ。
ハンティスたちは咄嗟に左右に分かれて跳び、牙撃を回避する。
破城鎚を何倍にもしたような咢が地面を抉り、それだけでクレーターじみた陥没ができあがった。
あれほどの巨体だ。動きこそは緩慢だが、まともに喰らったら最後、一瞬にして物言わぬ肉片と化すだろう。
「サヤ、俺たちでラハブを食い止めるぞ！　ムス！　お前はどうにか退路を切り開いてくれ！」
「了解よ！」
「りょうかい」
ハンティスたちは一斉に動いた。
「――轟く飛瀑の響動めき。穿て大地を、鑿のごとく」
サヤが〈瀑布〉を巨軀に叩きつけて、ラハブの意識を引きつける。
迫りくる巨大な咢。彼女はそれを紙一重で躱すと、ラハブの頭部に着地。巨大な蛇身の上を駆けながら、双剣で鱗を斬りつけた。
「硬……っ！」
だが彼女の鋭い斬撃を持ってしても、ドラゴンの硬質な鱗に与えられたダメージは些細なものだ。
「――爆散けろ、焔の圓毬。それは、容赦なき破砕」
ハンティスは第三階位の〈爆炎〉を発動。ラハブの頸下で激しい爆発が巻き起こった。

「……あの程度かよっ！」
少し焦げついただけのラハブの顎を見て、ハンティスは思わず悪態をついた。
直後、ラハブが苛立ったように身を捩った。その頭部に乗っていたサヤが振り落とされる。彼女は空中で体勢を整え、ハンティスのすぐ近くに着地した。
ラハブが口腔を大きく開いた。
――――――――――――――――――――ッ‼
「っ⁉」
もはや音とすら認識できないほどの凄まじい咆哮だった。
それは衝撃波と化し、ハンティスとサヤに襲いかかる。
二人は咄嗟に両腕を交差して身を護ったが、激烈な衝撃を受けて木端のごとく吹き飛ばされた。壁面に強かに叩きつけられてしまう。
「く、そ……さすがにドラゴンはやばいな……」
崩れた瓦礫から這い出しながら、ハンティスはこの絶望的な状況にさすがに心が折れそうになる。すぐ傍では、同じように半身を石塊に埋めていたサヤが立ち上がったところだった。
ハンティスはちらりと視線を転じる。
この地下空間の入り口では、ムストリアが次々と現れる魔物を辛うじて喰い止めていた。
アルレナはレミアの治療に徹しているが、しかし彼女の険しい表情から察するに、厳しい状況に変わりはなさそうだった。
力を温存している場合ではない。
サヤと頷き合い、二人は同時に己の眷属を呼ぶ。
「来てくれ、フェニックス」
「レヴィアタン、力を貸して」
『了解なの！』
『あいさー』
すぐさま威勢のいい声とともに二体の高位章霊が姿を現す。

ハンティスの背に火炎の翼が燃え上がり、サヤの周囲に螺旋状の水流が巻き起こった。
「グレンカ、教官……？」
「この紋章術の弱点は警戒している相手には効きにくいという点ですが……やはり、一人だけで迷宮から出てきたのがいけませんでしたか」
「……ど、どうして、こんなことを……？」
マロンはどうにか眠気を堪えながら、彼女を睨みつける。
「それをあなたに説明する必要などないと思いますが？」
淡々と応じ、グレンカはその手に漆黒の剣を出現させた。
「っ！」
月明かりを反射して黒光りする鋭利な刃物に身の危険を感じ、マロンは躊躇なく紋章詞を詠唱する。
「――それは天の裁き。薙ぎ倒……」
「遅いですね」
グレンカが地面を蹴った。三メートル近くあった距離をほとんど一歩で詰められ、詠唱が間に合わない。マロンは咄嗟に腰に下げていた護身用のナイフを抜くと、彼女の斬撃を辛くも受け止めた。
だがナイフは簡単に弾かれ、宙を舞う。数メートル先の草むらに消えてしまった。
「せめて苦しまずに逝かせて差し上げましょう」
無防備になったマロンへ、グレンカは情け容赦なく漆黒の剣を振り下ろしてくる。
金属音が響いた。
「っ……チャンク、さん……っ？」
「危ないとこやったな、マロン」
グレンカの剣を受け止めていたのは、チャンクのサーベルだった。
「ナハハハ、闇系の紋章術はわいの十八番や！　いち早く闇章霊の気配に気づいたお陰で、効果が薄かったん――おぐっ⁉」
言い終わる前に、グレンカの蹴りがチャンクの腹部を打っていた。
吹き飛んだチャンクは、さらに石段の上を転げ落ちて悶絶する。かっこよく現れた割に、何とも呆気ない退場の仕方だった。
「――大地に大気に満ちる水よ、集え」
だが彼が作ってくれた隙が明暗を分けた。
マロンが発動したのは〈集水〉。第一階位の初歩的な紋章術だが、全力で霊力を込めれば、かなりの量の水を発生させることができる。
大量の水が降り注いだのは、近くで眠っていたシスリーネやパレット教官たちだった。
「がはっ……」
「な、何がっ……」
「また溺れちゃった⁉」
さすがに水で呼吸を止められれば、深い眠りに落ちていても目を覚ます。彼らを叩き起こすつもりで、マロンはグレンカを指差しながら大声で叫んだ。
「き、気をつけてください！　彼女は敵です！」
「なんだとっ……？」
すぐさま起き上ったパレットが、訝しげにグレンカを注視する。その手に握られた漆黒の剣を認めて、
「……グレンカ教官、これはどういうことだ？」
威圧的に詰問されたグレンカは、しかし平然とした様子で呟いた。
「これはさすがに分が悪いですね。ですが、今さらあなた方が助けに行ったところで無駄でしょう」
「おい、てめぇ、何を言ってやがる？」
さらにベルガリアが恫喝じみた声でグレンカを睨みつけた。
「知りたければ、ご自分でご確認ください。……では」
直後、彼女の足元に闇よりもなお濃い影が生まれる。
グレンカはその影の中に姿を消した。
「……ちっ、逃げやがったか」

ペルガリアが忌々しげに吐き捨てた。それからすぐに迷宮への入口へと視線を転じる。
「嫌な予感がする。急ぐぜ」
それだけ言い残して、迷宮へと突入していくペルガリア。
パレットとラナルがそれに続く。
「あたしも行きます！」
マロンも躊躇わずに門の中へ飛び込んだ。
「マロン！」
「わーいっ、突撃だーっ！」
「お、おい君たち……っ！」
テンプス騎士学院の教官たちの制止を振り切って、シスリーネ、ミィナが追随する。
他の教官たちは逡巡したものの、互いに顔を見合わせて頷き合った後、すぐに覚悟を決めて走り出した。
「いっつ……あ、あれ？」
石畳の上に倒れていたチャンクが身を起こしたときにはもう、最後尾の教官の背中が迷宮の薄闇の中に消えていくところだった。
「わ、わい一人を置いていかんでえなっ！」
情けない声を上げながら、チャンクは慌てて後を追い駆けたのだった。

アルレナはレミアの治癒に徹していた。
胸部を刃物で貫かれた彼女の心臓は、完全に機能を停止している。
そのためアルレナは先ほどからずっと、心臓の代わりに全身に血液を巡らせることだけに〈治療〉を集中させざるを得ない状況だった。
（心臓の修復に力を回す余裕がありません……っ！　このままだと、いつまで彼女の体力が持つか……）
焦燥が募る。今すぐにでも街に戻り、高位の命系紋章術を使える優秀な医術師たちで治療に当たらなければならないというのに。

「っ……」
そのとき意識を取り戻したのか、レミアの唇から微かな呻き声が漏れた。瞼が緩慢に開く。
「しっかり！　きっと大丈夫ですわ！」
自分自身にも言い聞かせるように、アルレナは強気の声をかける。
「ぼ、ぼくを……放っておいてくれ……このままだと……」
だが返ってきたのは、そんな弱々しい言葉だった。
「そんなこと、できる訳がありませんわ！」
アルレナは思わず叫んでいた。
「わたくしは、もう二度とあんな想いをしたくはありませんの！」
思い出すのは、リースの死だった。
あのときアルレナは魔人に手も足も出ず、呆気なく意識を刈り取られてしまった。
そして目を覚ましたときには、下半身を失って事切れたリースと、その傍で泣き崩れるハンティスの姿があった。
眠っている間に、すべてが終わっていた。
後悔してもしきれない。
「わたくしはあなたのお兄様を助けることができなかった！　部隊の命を預かる身でありながら、彼に治療を施すことすらできなかったのですわ！　もうあんな思い、絶対にしたくはありません！」
だから、とアルレナは続けた。
「今度こそ絶対に助けてみせますわ！　あなたがリースの妹だというのなら、なおさらここで死なせるわけにはいきません！」
アルレナは力強くその決意を露わにする。
きっとその想いは他の者たちも同じはずだ。
「……き、貴様たちは……本当に……兄様のことを……」
それが伝わったのか、レミアの唇が震え、その目尻には涙が溜まっていく。
だがそのとき、どうにか保っていた均衡が崩れてしまう。
一体のシーホースがムストリアを突破してしまったのだ。

「っ……まずいですわっ……」

ムストリアはすぐさま追い駆けようとするが、途切れることのない魔物の襲来に対応するだけで精一杯だった。ラハブ相手にギリギリの戦いをしているハンティスとサヤにも、こちらに駆けつけてくる余裕などない。

一瞬だけ〈治療〉を止め、無詠唱の一撃で魔物を倒す。それ以外に思いつく方法はなかった。だが、果たしてレミアが耐え切れるだろうか。

逡巡している暇はない。やるしかない。だがアルレナが覚悟を決めたそのときだった。

突然、魔物のそれとは違う、不思議な雄叫びが聞こえてきた。

「どりゃあああああああっ！」

ムストリアのすぐ脇を駆け抜け、こちらへ迫ってきていたシーホースに追いついた彼女は、巨体の臀部に電撃を帯びた拳を叩きつけた。

予期せぬ衝撃に、シーホースは頭から地面に突っ込んだ。顔面を硬い岩盤に擦りつけ、苦悶の嘶きを上げる。

「ミィナ参上だよ！」

そう高らかに名乗ったのは、ハンティスと同じ部隊に所属するいつも元気な少女――ミィナ＝ミクランだった。

シーホースはすぐに起き上がると、狂暴な咢を剥き出しにして彼女に襲いかかる。

氷の雨が降り注いだ。

それはシーホースに直撃。全身から血の飛沫が上がり、完全に絶命した。

「ミィナ、勝ち誇るのは最後まで止めを刺してからにしてください」

そう冷たく注意しながら、銀髪の少女――シスリーネ＝シルベルストがこちらへ駆け寄ってくる。

彼女たちだけではない。

「無事か貴様ら！」

「おいちょっと待て、何だあの化けモンはっ……」

「まさか、ドラゴンでありますか⁉」

バレット、ベルガリア、ラナル、さらには他の騎士学院の教官たちが、遅れてこの広大な地下空間に駆け込んでくる。

援軍だった。

「……まだ、聖霊はわたくしたちを見捨ててはおられないようですわね」

アルレナがそう零したとき、頭の両側で髪の毛を結んだ少女――マロン＝マーマードがこちらへと走ってきた。

彼女はレミアの傷を見て、驚いたように息を呑む。状況の酷さを瞬時に察したようだ。

「あ、あたしに任せてください！」

すぐにそう力強く宣言すると、彼女は地面に膝を突いた。

マロンがどれだけ命系の紋章術を使えるのか、アルレナは知らない。だが、レミアの体力は底を突きかけており、今は一刻を争う。バレットやベルガリアは命系の紋章術は得意ではないし、頼れるのは彼女しかいなかった。

「わたくしが血を巡らせています。あなたは心臓の修復を！」

「は、はい！」

そう緊張を感じさせる声で返事し、彼女はレミアの胸部に手を添えた。

「――それは慈悲の煌めき。それは愛の輝き。それは命の光」

先ほどからアルレナが発動しているのと同じ〈治療〉だ。

紋章が虚空に浮かび上がり、強烈な黄緑色の輝きが弾けた。その瞬間、アルレナは我が目を疑った。

（これはっ……）

驚くべき速さで、レミアの心臓が修復されていったのだ。煌々と輝く命章霊の光は、アルレナのそれと遜色のない――いや、それすらも上回るほどの力強さだ。

（まさかこの子に、これほどの力が……？）

アルレナは驚愕する。気づけばもう、心臓はほとんど元の形へと戻っており、今はその周辺の血管や胸部の骨や肉の修復が始まっていた。

「お、終わりました……」

やがて彼女が額の汗を拭ったときには、もはや傷痕すら残っていなかった。

苦悶に歪んでいたレミアの表情も、今は安らかなものへと落ち着いている。

しかしマロンはそれで満足することなく、すぐに立ち上がった。

「せんぱいっ……」

慌てた様子で駆け出す彼女の行く先には、地面に倒れ伏すハンティスの姿。どうやら休む間もなく、彼の治療に

向かったらしい。

「……驚きましたわ」

彼女の後ろ姿を見つめながら、アルレナは感嘆の溜息を吐いたのだった。

「っ……」

目を覚ましたハンティスは、すぐに自分がひび割れた石床の上にうつ伏せで倒れ込んでいることを悟った。

ハンティスの意識は朦朧としていた。

グレンカにやられた傷口は完全に開いてしまっており、ドクドクと血が流れ続けている。ボロ雑巾のようになった制服ばかりか、地面まで真っ赤に染まっていた。

「くそ……」

霞む視界の先では、サヤがたった一人でラハブと交戦している。自分もすぐに加勢しなければ。そう思うが、身体が動かない。

全身に優しい光が降り注いだのはそのときだった。

「せ、せんぱい、しばらくじっとしていてください……っ！　すぐに治しますから……っ！」

聞き慣れた声が耳元で響き、ハンティスは視線を上げる。

「……マロン？」

彼女はこちらの傍で座り、懸命に〈治療〉をかけてくれていた。そのお陰で、腹部の傷が瞬く間に塞がっていく。

「な、何でここに……？」

「あたしだけじゃありません」

ハンティスはそう言われて、視線を転じた。

「教官……？　お前らまで……」

騎士学院の教官たちに加え、置いてきたはずの第29部隊のメンバーたちが、サヤとともにラハブと応戦していた。

「た、助けにきたんです……っ！」

「そうか……」

「俺たちも救助されてぇくらいだけどな！　こいつ、まるで攻撃が効きやがらねぇ！」

叫んだのはベルガリアだった。

彼が弓型の紋章武装から放った燃え盛る矢がラハブに命中するが、ドラゴンの硬質な鱗にささやかな裂傷をつけるだけだ。

「――それは天の裁き。薙ぎ倒せ、愚かなる軍勢に神風の鉄槌を」

バレットが〈暴風〉を発動するも、それもラハブ相手には効果が薄い。

「――断罪の白き煌めきよ、かの咎人を凍てつく氷矢にて天上へと葬送れ」

「――唸れ、天の怒り。轟け、空の猛り。そして穿つは、大地の過ち」

シスリーネが放つ〈氷嵐〉、ミィナの〈迅雷〉も右に同じだった。

「これがドラゴンですか……」

「こんなのどうやって倒すの!?」

そのとき、サヤが高々と空を飛んだ。足元に〈水圧〉を放つことで、信じられないほどの飛距離を実現したのだ。

十メートル以上も跳躍し、他の人間に気を取られていたラハブの頭上から迫る。

「紋章剣技――〈十二天将〉ッ！」

刹那に都合十二もの斬閃が走った。

水の太刀が次々とラハブの鱗を切り裂き、ついにそれに保護されていた肉すらも切断する。

ラハブの頭部から血の飛沫が上がった。

サヤはラハブの頭部を蹴って空中で身を翻し、着地する。

「……ダメージ自体は、確実に与えているはずなんだけど……」

サヤはいつになく焦燥した声で呟く。

彼女が言う通り、決して攻撃が効いていない訳ではない。硬質な鱗も無敵という訳にはいかず、あちこち損傷して中の肉が覗いている。

しかしやはりあの巨体だ。その生命力は尋常ではない。

（このままじゃ、先に根を上げるのは俺たち……）
さすがのサヤも呼吸が荒く、それに眷属章霊の力を借り続けているせいで、霊力が枯渇するのも時間の問題だろう。
（……一気に決めるしかない）
マロンのお陰で回復したハンティスは、ベルガリアとパレットの元へと走った。
「ベルガリア教官、パレット教官！　教官たちだけで、しばらくの間、ラハブを引きつけておいてもらえませんか？　三分……いえ、五分ほど。できますか？」
ハンティスの言葉に、二人は一瞬、驚いたような顔を向けてきたが、返ってきたのは頼もしい返事だった。
「随分と無茶を言うじゃねぇか、おい。……ま、できねぇとは言わねぇけどよ」
「おい、私を誰だと思っている。それくらい訳もない」
さらにハンティスは第29部隊のメンバーたちに声をかける。
「シスリーネ、ミィナ、マロン、チャンク！　お前たちはムスに代わって、あの魔物の群れを押し留めていてくれ！」

目を覚ましたレミアは、自分がまだ生きていることに驚いた。
一瞬ここはもしかして死後の世界なのではないかと疑ってしまうが、しかしそれにしては硬い地面の感触といい、頭の奥から響いてくる疼痛といい、感覚がリアル過ぎる。
「あ、き、気がつきましたか……っ？」
そう声をかけてきたのは、見たことのある少女だった。
「ぼ、ぼくは、一体……っ!?　き、傷が……？」
胸に手をやってみると、驚くべきことに一切の傷も残っていなかった。
「もう、だいじょうぶなはずです！」
こちらを護るように立つ彼女の向こう側には、魔物の群れと交戦する少女たちがいた。
レミアから見ても彼らの実力は確かなものだが、しかしこの迷宮に出没する魔物はいずれも狂暴で凶悪だ。かなり苦戦している。

レミアは視線を転じた。
数人の教官たちが、総がかりで巨大なドラゴンと戦っていた。
地底湖から現れた海竜・ラハブだ。
巨体ゆえに動きこそ緩慢だが、その鱗は絶望的なほどの防御力を誇っていた。さらに口から吐き出される衝撃波は、人間を紙屑のように薙ぎ払うほどの威力。
きっと彼らは救助に来てくれたのだろう。
だが、このままでは――
「……ぼくが、騙されていたせいだ……」
自分の犯してしまった過ちに気づき、レミアの胸を急速に罪悪感の靄が覆っていく。
「……ぼくのせいで、彼らは……」
だがその呟きが聞こえたのか、先ほどの少女がきっぱりと首を振った。
「いいえ、だいじょうぶです」
ハッとして顔を上げたレミアは、彼女の瞳に絶対の信頼を垣間見て、息を呑んだ。
「せんぱいたちなら、きっと何とかしてくれるはずですから」

ラハブの前方、教官たちが懸命に交戦する様子を見つめながら、ハンティスは大きく息を吸って深呼吸した。
万全とまではいかないが、マロンに治してもらったお陰で傷の大半は癒えている。霊力もどうにか持つだろう。
「フェニックス、準備はいいか？」
『いつでもオッケーなの！』
こちらの呼びかけに力強く応じると、眷属章霊はぐるぐると虚空を回転した。
彼女の動きに呼応するかのように、ハンティスの全身から濃密な炎が噴き上がる。
ハンティスは力強い口調で紋章詞を口にした。
「――焼け、灼け、焦け。秩序も混沌も、その劫火を前にすればただただ紅き無へと帰す他になし」

ラハブの右方、サヤは半身を地底湖につけながら構えていた。
『だいじょうぶー？』
「ええ、なんとかね」
レヴィアタンが心配してくれるが、体力も霊力も限界が近い。恐らくこれが最後の一撃になりそうだった。
「行くわよ、レヴィアタン」
『あいさー、ぼく、がんばるー』
彼女の声に応え、半人半魚の男の子が空中を舞う。それに合わせて、サヤの周囲に躍るような水流が巻き起こった。
サヤは鋭く切り裂くような声で紋章詞を紡いだ。
「――それは終わり告げし神代の大災害。殲滅の豪雨よ、破滅の海嘯よ、壊滅の氾濫よ」

ラハブの後方、アルレナは地底湖にかかった橋の上に立ち、己の眷属に命じた。
「スレイプニル、力を貸しなさい」
『分かったから尻尾を引っ張らないでよ!?』
半ば強制的に主人から命じられた白馬は、美しい馬体を躍らせて空を駆けた。
『マジで章霊使いの荒いヤツ！』
荒々しい風の渦が起こり、アルレナの長い金髪が大きく煽られる。
彼女は凛とした声で詠唱した。
「――轟く冽冽。切り裂く狂飆。巻き上がる飄風。破壊の蜷局」

ラハブの左方、ムストリアは両足を地底湖の水で濡らしながら悠然と立っていた。
「きゅくろぷす」

『りょうかいっス！』
呼びかけに応じて、一つ目の眷属章霊が出現した。
――水の中に。
『がぼがぼっ……』
水深はムストリアの膝くらいまでしかなかったが、それ以下しか背丈のないキュクロプスは溺れていた。
「……」
ムストリアは無言で己の眷属を摘み上げた。
『た、助かったっス！　ちょっと出る位置を間違えたみたいっス！』
「そう」
ムストリアの肩の上にちょこんと座り、キュクロプスは安堵の息を吐いた。
「じゅんびは」
『ばっちりっス！』
頼もしい返答とほぼ同時、周囲の地面が大きく揺れた。
高位の地章霊が解放したその力に、大地が呼応しているのだ。
ムストリアはゆっくりと口ずさんだ。
「――目覚め給え、地脈に眠りし竜の王よ。かの淫乱と悪徳の都を灰燼に帰せしその誅罰にて」

「……っ！」
レミアは括目して見た。
ラハブを取り囲むように四方に展開されたのは、四つの巨大な立体紋章だった。

火系第四階位紋章術〈紅キ炎〉
水系第四階位紋章術〈洪水神話〉
風系第四階位紋章術〈龍ノ蜷局〉

地系第四階位紋章術〈龍脈暴乱〉

信じがたいことに、そのすべてが戦術級の威力を誇るとすら言われる第四階位だ。

「げっ、マジかよっ⁉」

ベルガリアが驚嘆して目を見開く。

バレットが慌てて怒鳴った。

「全員、退避しろっ！　急げ！　巻き込まれるぞ！」

ラハブと対峙していた教官たちが慌てて後退していく。

それを見計らったように、詠唱が完了した。

「——穢れなき炎は、永遠すらも焼く」

「——穢れし文明その悉くを洗い流せ」

「——その様、古の天空の覇者のごとし」

「——すべての罪咎を喰らい尽くせ」

四つの紋章が同時に煌めいた。

湖面の水を瞬時に蒸発させるほどの猛烈な火炎が。

湖を大豪雨に見舞われた河川のごとく氾濫させながら、天災じみた水流が。

虚空を翔ける巨大な飛竜のように、湖面を抉る横向きの竜巻が。

山ごと崩れ落ちたかのような大量の土砂の波濤が。

四方から一斉に巻き起こり、ラハブの巨軀すらも呑み込んだ。

凄まじい熱風と水蒸気、それから砂礫が撒き散らされて辺り一帯に降り注ぐ。

「な……」

レミアは目の前で起こった人知を超す攻撃に、呆然とするあまり言葉を失っていた。

それは他の者たちも同じだったらしい。獰猛な魔物たちまで、怯えたようにその場に立ち尽くしている。

「こ、これならさすがにドラゴンでも……」

誰かがそう呟いたときだった。

————————————————ッ!!!

強烈な衝撃波が、舞い上がった砂塵を一瞬にして吹き飛ばしていた。

「まだ生きていますわ……っ！」

砂煙が晴れ、ラハブが悠然と姿を現す。

もっとも、受けたダメージは決して軽くはなかったようだ。

全身を護っていた鱗はその大半が剝がれ落ちていた。内部の肉もまたあちこちが抉られ、あるいは焼き焦げ、巨体はボロボロだ。

それでもラハブは信じられない生命力で、未だ狂暴な闘志を露わに咆哮を上げた。

オオオオオオオッ！

虚空に巨大な立体紋章が出現した。

しかも通常の紋章と違う。

「水章霊と地章霊の融合……っ⁉」

「まさか、第四階位の〈天変地異〉か⁉」

「ぜ、絶対に撃たせてはいけませんわ！」

怒号が飛び交い、即座に紋章術を唱え、あるいは矢を射放ってラハブの発動を阻止しようとする。レミアもまた咄嗟に銃剣を構え、光弾を撃った。

だがラハブはこちらのその場しのぎの攻撃など物ともしなかった。

「く、来るぞ……っ！」

「避けろ！」

「どうやって⁉」

阿鼻叫喚の悲鳴が上がる。

「……ここまでか……」

レミアは今度こそ命運が尽きたことを悟り、そして悲嘆の呻きを漏らす。

そのときだった。

「心配するな、レミア」

──心配しなくていいよ、レミア。

「っ！」

不意に懐かしい声に名前を呼ばれた気がして、レミアはハッと顔を上げた。

光を見た。

皆が絶望する中にあって燦然と輝く、希望の光。

それは一人の少年の左手から発せられていた。

紋章だ。

光章霊の、契約紋章。

不意にレミアは、胸の奥から突き上げてくるような衝撃を覚えた。

「レイオス、兄様……？」

間違いない。

あれはまさしく、兄が有していたそれだ。

その証拠に、彼の手には懐かしい兄の紋章武装──《宵ノ明星》が握られていた。

だが今、レミアの目の前にいるのは赤い髪の少年だった。

「──俺が何とかしてやるから」

──僕が何とかしてあげるから。

ハンティス＝ハーミリオンの声が、かつての兄の声と重なる。

そうか、とレミアは悟った。

「レイオス兄様は、ずっとそこにいたのだ……」

詳しいことは分からない。

だがきっとそうに違いないと、一帯を照らすこの猛々しくも優しい光がレミアに確信させてくれる。

（だから……ぼくは彼をレイオス兄様に似ていると……）

気づけばレミアの瞳からは、滂沱と涙が溢れていた。

彼の近くには自らの尾を呑み込んだ円環の蛇──〝全知全能なる蛇〟が浮かんでいた。

『久方ぶりだ』

「ったく、ようやく出てきやがったか。ということは、俺を認めてくれたってことで良いんだな？」

『然り。我、汝を我が主として認めん。……本当はもっと早くに出ても良かったのだが、火の章霊が煩くてな』

「今は疲れて眠ってるから大丈夫だ。俺に力を貸せ」

『御意』

円環の蛇が頷き、少年は銃口をラハブへと向けた。

だがそのときついに〈大変地異〉が発動し、世界の破滅を思わせるような大量の土砂と豪水が空中で弾けた。

「紋章銃技──〈流星群〉！」

暗い迷宮内が真昼のごとき耀きに満ちた。

銃口から放たれたのは、まさしく流星のごとき光塊の群れだった。

それが降り注ぐ土石流を迎え撃ち、押し留める。

均衡は一瞬だった。

光の流星群が土砂の波濤を貫いた。

ラハブの全身に着弾し、その巨大な肢体を蹂躙する。鱗が弾け飛び、血肉と骨片が辺り一帯に四散した。

海竜の瞳から命の輝きが消える。

巨軀が盛大に倒れ込み、噴水のごとき飛沫が上がった。地底湖に大量の雨が降る。

事切れた竜は湖の奥へと沈んでいった。

エピローグ

Irregular's Rebellion

ハンティスたちが帝都に到着したのは、海底迷宮でラハブを撃破した四日後のことだった。
当初の予定よりも二日遅れてジェノバを出発したため、帝都まではかなり急ぎ足での旅路となった。
お陰でどうにか旅程を一日短縮させることができ、明日開催される聖騎武祭の開会式には無事に参加できそうだ。

「ミィナ、帝都に来たの初めてだよ！」

「ナハハハ、やっぱ帝都には美人が多いゆう噂は本当やったみたいやな！」

疲れを感じさせないミィナとチャンクの元気な声が、市壁を潜った先に広がる凱旋広場に響いた。行き交う人々が、まるで田舎者を見るかのような視線をこちらに向けてくるのは、お上りさんな二人のせいだ。

道行く人の多くは小洒落た格好をしていた。異国民や平民の比率の高いジェノバとは違い、帝都には貴族を初めとする上流階級が多く住んでいるのだ。

街並みも雑多なジェノバとは対照的に、綺麗に区画整備されていた。その辺りはキルクルスの雰囲気とも似ている。

「俺は一度子どもの頃に来て以来、二回目だな」

そんな洗練された都会の様子を見渡しながら、ハンティスは呟いた。

「私も二回目よ」

「あ、あたしは初めてです……っ！」

それにサヤとマロンが応じてきた。

マーテリア騎士学院に通う生徒の大半は、帝国の東部出身だ。ハンティスだけではなく、大多数が帝都との縁が薄い。

帝都・カルロスブルグは、帝国西部ロレーナ地方に広がる盆地のほぼ真ん中にあった。

広い土地を巨大な市壁が囲い、さらにその周囲をロレーナ山脈という天然の防壁が護っている。まだ都市国家だった時代を含めても一度たりとも他国の侵略を許したことがないのは、そうした立地と決して無関係ではない。

現在の人口はキルクルスの約三倍。皇帝の住まう巨大な皇宮は、都市の中心部を構成する高台に位置しており、都市全体を睥睨していた。

一行は今、宿へと向かっている。

「……ところでハンティス。いい加減、それどうにかならないの？」

と、そこでサヤが剣呑な眼つきで睨んできた。

「あ～……」

ハンティスは微妙な顔で頭を掻きながら、隣の少女を見やる。

先ほどから——いや、ジェノバの宿舎を出発したときからずっと、レミアがハンティスの腕にしがみ付いてきているのだ。

目が合った彼女は、申し訳なさそうに俯いて、

「……き、貴様が……その……い、嫌だというのなら……離す、ぞ……」

そう言ってはくれる彼女だが、実際に離れようとすると何とも哀しそうな顔をされてしまう。そのため、どうしても拒絶できないのだった。

（……まぁ、しばらくは仕方がない、か……）

ハンティスは内心で嘆息する。

レミアを誘拐した犯人がテンプス騎士学院の教官であったという事実は、同学院を激震させた。先日の第11小隊に続いての不祥事で、一時は今年の聖騎武祭への出場を見送るべきかという話も出てきたほどだ。

だが最もショックを受けたのは、やはりレミアだった。

かつては自身の選任騎士を務め、皇宮を離れた後も教官としてレミアを指導してくれていた相手に裏切られてしまったのだから、当然とも言えるだろう。

——加えて、最愛の兄の死。

普通なら精神的に不安定になっておかしくない状況だが、そこで彼女の救いとなったのは、兄の面影を感じたというハンティスだったのである。

（それで、俺を本当の兄貴のように慕って、甘えてきてる訳なんだが……）

正直、サヤたちの視線が痛い。

やがて宿に到着する。

帝都でも有数のホテルだそうで、美しい庭園の奥に豪奢な建物が見えた。

そのときちょうど向こう側から歩いてきた人物が、ハンティスの目の前で立ち止まった。

「久しぶりだな、ハンティス」

いきなり名前を呼ばれて面食らったハンティスだが、すぐに目の前の青年の正体に思い当たった。
「お前は……まさか、ハルク？」
ハルク＝ハルブレッド。
ハンティスと同郷出身の青年だった。
それを示すように、彼もまた同じく帝国では珍しい赤い髪をしている。身長はハンティスより頭一つ分は高い。
年齢は三つ上だ。
「……何で、お前がここにいるんだよ？」
ハンティスは警戒し、ハルクを睨みつけた。
同郷の徒との再会としては、いささか剣呑にすぎる態度だ。
そんなこちらの反応にハルクは肩を竦め、
「第二皇子殿下の近衛騎士だからだ」
返ってきた答えに、ハンティスは耳を疑った。
「第二皇子の……？　お前が……？」
「ああ。普段は帝国南部のメリーガ地方の領主をされているが、明日からの聖騎武祭をご覧になられるため、今は帝都にいらっしゃっている。俺はその護衛だ」
「……」
第二皇子の近衛となれば、調べればすぐに分かることだ。嘘を言う理由もないし、本当なのだろう。
「ここにいるところを見ると、お前も聖騎武祭に参加するみたいだな？　まぁ、せいぜい頑張ってくれよ」
そう言って、ハルクは立ち去っていく。
その後ろ姿を見送りながら、ハンティスは何か不穏な予感を覚えていた。

「準備は完璧です」
皇宮内にある居室。そこでハルクは、とある人物への報告を行っていた。
「ふむ、よくやったぞ」

満足げに頷いたのは、二十代後半ほどの男だった。
身長は高くないものの、横幅が広いせいで、かなりの巨漢だ。顔立ちも端正であるが、全身についた贅肉と脂ぎった肌がそれを完全に台無しにしていた。
部屋のテーブルには食べ散らかした料理が所狭しと置かれている。
すでに相当な量があのお腹の中に納まっているに違いないが、今もまた串に刺した鶏肉を頬張っているところだった。
男の名はレードリウス＝カルローナ＝レイマール。
第十四代皇帝レイストロ＝カルローナ＝レイマールの第二皇子だった。
「これでこの国はわらわのものよ」
レードリウスは口角を吊り上げ、宣言する。
「ええ、その通りです」
ハルクは頷いた。
そう。
準備は万端だ。
明日、間違いなく帝国の歴史が変わる。
（……懸念があるとすれば、奴の存在か。まさか、海竜すらも斃してしまうとはな）
ハルクは苦虫を噛み潰したような顔になるが、しかしすぐに不敵に口元を歪めた。
（ふん、面白い。もし止められるものなら止めてみせろ）
「急に押し黙ってどうしたのだ。何か気になることがあれば遠慮せずに申せ」
こちらの沈黙を見咎めてくる第二皇子に、ハルクは慇懃に応じる。
「いえ。やはりレードリウス殿下にはこの国で満足されるのではなく、ぜひとも大陸全土をと思いまして」
「はははは、その通りだ」
ハルクが煽り立てると、レードリウスは愉快げに嗤い、贅肉を揺らしたのだった。

巨大な円形闘技場は、無数の観客で埋め尽くされていた。
「……すごい人ね」
「ああ。五万人近い人数を収容できるらしいからな」
サヤの呟きに、ハンティスは頷く。
まだ始まってもいないというのに、すでに会場は熱狂していた。その大歓声のせいですぐ近くの声ですら聞き取りにくいほどだ。
聖騎武祭の本選は明日からで、今日は開会式のみだった。
この闘技場が試合会場になるのは、基本的に個人部門、部隊部門それぞれの準決勝以降の試合のみで、それまでは主に帝都の各地にある闘技場が使われるという。
参加する騎士学院の生徒たちには、特別な観戦席が用意されていた。周囲を見渡すと、色んな制服が目に入ってくる。
(向こうの青い制服が、帝都にあるスパティウム騎士学院か。さすがに強そうだな)
ハンティスは内心で呟くが、しかしマーテリア騎士学院も他の学院から注目されていた。
当然と言えば当然で、昨年、一年生にして個人部門で優勝と準優勝をさらった二人が、今年は個人と部隊の両部門で出場してくるのだ。
やがて皇宮音楽隊が厳かにファンファーレを奏で始めた。
「……お父様」
相変わらずハンティスにべったりくっついていたレミアが、小さく漏らした。
劇場の舞台のように、空中にせり出したバルコニー。そこに豪奢な衣服を纏った白髪の老人が姿を現したのだ。
レイストロ＝カルローナ＝レイマール。
カルローナ帝国の第十四代皇帝陛下だった。
帝国を統べる老皇帝は、杖を突きながらじっくりと時間をかけて歩くと、手すりの手前まで辿り着いた。
やがて楽曲が終わる。
観客は完全に鎮まっていた。何万という人で埋め尽くされた巨大な闘技場が、完全な静寂に包みこまれるのはなかなかに異様な光景だった。

皇帝は何かを口ずさみながら両腕を大きく広げた。
次の瞬間、光が弾けた。
あちこちから感嘆の声が漏れる。
美しい光球が宙を浮いていた。
様々な色の絵の具を出鱈目に混ぜ合わせたようで、不思議と調和のとれた奇妙な色合い。
しかも明滅を繰り返しながら、絶えずその配色を変化させていた。
あれが——聖霊。
聖霊教の主神にして、カルローナ帝国の皇帝だけがその力を行使することができるという、すべての章霊を司る存在。
清廉で厳粛な空気が闘技場内を支配し、誰もがその神秘に魅入っている。
突然、怒号が轟いた。
この厳かな神事の最中に一体何事かと、皆が眉をひそめたそのとき、
「なっ」
ハンティスは衝撃的な光景を目撃する。
皇帝の背後から飛び出してきた影が、剣閃を煌めかせた。
老人の掠れた呻き声が上がり、生々しい血飛沫が舞う。
「皇帝陛下っ！」
誰かが叫んだ。
直後、破壊された手すりと一緒に、皇帝が数メートルもの高さからフィールドへと落下する。闘技場内に叫喚と怒声が巻き起こった。
「お父様っ⁉」
ハンティスの隣でレミアが悲鳴を上げるが、倒れた皇帝はピクリとも動かない。
聖騎武祭開会式。五万人を超す人間が見守る中で行われた凶行は、しかし帝国の存続すらも揺るがす大事件の始まりに過ぎなかった。

あとがき

どうもお久しぶりです、尾地雫です。
気がつけば春。出会いの季節ですね。
引き籠りの私は当然ながら出会いとはまったくの無縁なわけですが、世のリア充な方々にはきっと素敵な出会いが待っているのでしょうね。ああ、ちくしょう。
と、春なのにいきなり鬱々としてすいません。私は至って元気です。

『イレギュラーズ・リベリオン』のシリーズ三作目、お読みいただき、ありがとうございました。
早いもので、デビューしてからもう一年近くが経ちました。
応募の段階ではまったく考えていなかったハンティスたちの物語の続きを、こうして三作目まで描くことができました。それもひとえに、読者の皆様が応援してくださったお陰です。本当にありがとうございます。
次巻でラストになる予定です。現在、鋭意執筆中ですが、彼ら彼女たちの活躍を最後まで見届けていただければこれに勝る喜びはありません。

謝辞です。
イラストレーターのおちゃう様、今回も本当に素敵なイラスト、どうもありがとうございました!?
と、「クエッションマーク」を付けたのは、実はこれを描いている段階ではまだ上がってきてはいないからなのです（笑）。
劇場アニメ『ガラスの花と壊す世界』のコミカライズ（電撃コミックスNEXTから、おちゃうさん書き下ろしの上下巻が刊行！　みんな、買おう！）など、色々とお忙しいかと思いますが、ぜひ体調にはお気をつけてくださいね。
担当の佐々木様、今巻もお世話になりました。次で最終巻ですので、ぜひ最後までお力をお貸しいただければと思います（もちろん次のシリーズでも！）。

また、編集部を初めとして、本作の制作に関わって下さった多くの皆様にも心からの感謝を。
それではまた次巻でお会いできれば嬉しいです。
ありがとうございました。

尾地雫

著者
尾地雫（おち　しずく）

京都生まれ東京在住。第7回ＧＡ文庫大賞で《優秀賞》を受賞してデビュー。
おちゃうさんの素敵なイラストを見ていて、ふと自分も何か描いてみたくなりました。そこでとりあえず見よう見まねでサヤを描いてみたところ、古代エジプトの壁画のような絵に…。即行で消しました。

イラスト
おちゃう

イラストレーター。代表作にはアニメ＆ゲーム＆ライトノベル『魔法少女大戦小張深』、『城姫クエスト 会津若松城』のキャラクターデザイン。日本郵政グループの年賀状サービス『郵便年賀.jp』の２０１５年度イラストにも寄稿。

ＧＡ文庫
イレギュラーズ・リベリオン　３．偽(いつわ)りの姫君(ひめぎみ)

尾地　雫

発行人　小川　淳

発行所　SBクリエイティブ株式会社
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５

装　丁　　AFTERGLOW（山崎　剛／西野英樹）
印刷・製本　中央精版印刷株式会社

２０１６年３月３１日　初版第一刷発行
２０１６年４月１５日　電子第一版発行

©Shizuku Ochi　　ISBN 978-4-7973-8614-1

ファンレター、作品の感想をお待ちしています

< Webページはこちら >
http://www.sbcr.jp/products/4797386141.html

（このページのスクリーンショットを撮って、ＱＲコードリーダーアプリで読み取れば紹介ページにアクセスできます。問合せのリンクよりお寄せ下さい。）

〈あて先〉
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５
SBクリエイティブ（株）
ＧＡ文庫編集部 気付

「尾地　雫先生」係
「おちゃう先生」係

http://ga.sbcr.jp/

尾地雫
Illustration
おちゃう
イレギュラーズ・
リベリオン
3
偽りの姫君
Ochi Shizuku Presents
Irregular's Rebellion
GA文庫

イレギュラーズ・リベリオン
偽りの姫君
3

「こっ、これからだ！」
リース＝リガルジェント？
「どうした？ まだ一発も当たってないぞ」
ハンティス＝ハーミリオン

「こっ、これからだ！」
リース＝
リガル・ジェント？

ハンティス＝ハーミリオン
「どうした？まだ一発も当たってないぞ」

「……ど、どうかな？」
サヤ＝サクライ
「やっぱりサヤの方が似合いますわね」
アルレナ＝
アラート

「……ど、どうかな？」
サヤ＝サクライ

「やっぱりサヤの方が似合いますわね」
アルレナ＝
アラート